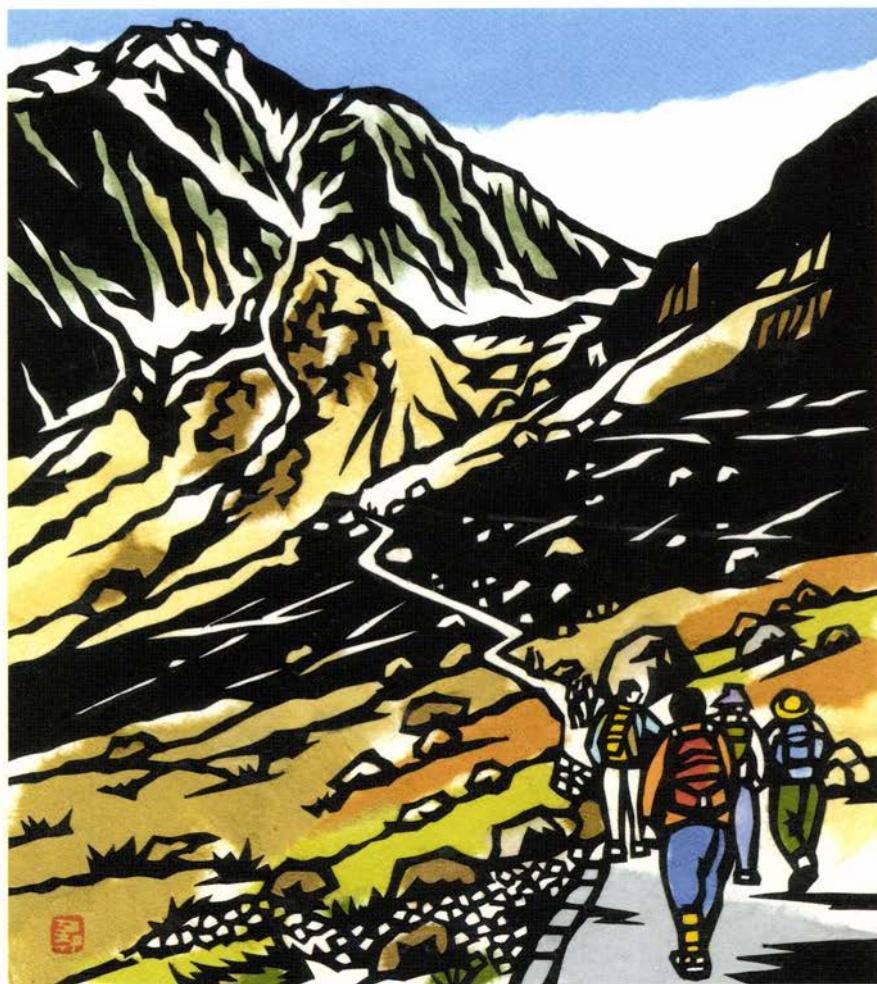


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十九年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九六三号



No. 963

八月号

日川協加盟

第13回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月8日(祝) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 生 駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成18年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成19年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F 金 剛 中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「お笑い趣味才々」 小 島 笑 司 氏
兼 題 「ハンドル」 (大 阪) 籠 島 恵 子 選
「 炎 」 (大 阪) 池 森 子 選
「 あ ま い 」 (愛 知) 早 川 遡 行 選
「 鳥 」 (香 川) 川 崎 ひかり 選
「 の び る 」 (鳥 取) 岸 本 宏 章 選
「空 気」(事前投句・9月5日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午(午後4時半終了予定)

会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇 親 宴》

と き 同 日 午後5時～7時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛 城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)
翌日観光 観劇「吉本新喜劇」 4,000円 30人締切

◇事前投句および懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月5日(水)までに本社事務所宛お願いします。

◇懇親宴・宿泊・翌日観光のご送金(句会費除く)は同封の払込用紙でお願い致します。

◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川 柳 塔 社 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎06-6779-3490

夜市川柳25年

河内 天笑

昭和57年6月20日締切分を以て初年度夜市川柳第1回が産声を上げた。そして25年が経過した今年7月の31日(火)に第25回夜市川柳大会が催される運びとなった。火曜日という平日だが31日に意味があるので敢えて平日に記念大会をひらく事にした。

今でこそコンビニナートに奪われて砂浜は見る影もないが、往年の大浜海岸の様子を子供達に見せてあげられないのが残念でならない。

漁業の神様を祀る住吉大社のお祭りを翌日に控え7月31日は瀬戸内の魚は元より遠く伊勢や紀州、四国各地から魚を積んだ船が集まり、大浜海岸では大魚夜市の一大ページェントが繰り広げられる。

この夜は無礼講でこの子も朝までに家に帰ればよいという結構な慣わしがあつて小遣いのなくなるまで歩き回ったものだ。子供にはひとかかえもある大きな氷の上をラムネ瓶がぐるぐると回っている様子が今も思い出される。

この夏の夜の風物詩なる大魚夜市を偲ばんと計画したのが夜市川柳のはじまりである。

夜市川柳の規約にある通り毎年12題の入選句の合点制で競う川柳のマラソンゲームだ。特徴は選者を川柳塔から6人、他柳社から6人として月変りの選者である事と、出句の全てを一人の字で句箋に清記しナンバーで整理するという方法をとっている。

昭和58年7月31日の第1回大会は特に思い出が深く参加者は僅か45名での大会だが、前夜に故西田柳安子氏が拙宅に來られ「夜市やからいろいろな魚を切り抜いて会場を賑やかにしようや」と朝方までかけて魚の形を切り抜いた思い出がある。こうして大先輩が私に力を与えてくれたのが25年も続けて來られた原点の様に思われる。そしてもう一つ、第一回から25年間、一回も休まずに今日まで出句を続けて下さった春城武庫坊・年代ご夫妻の熱意には頭が下がる。こうして一つの事を続けている内に川柳を通して偉い人、凄いい人に接する事が出来、私を育て上げてくれている様な気がしてならない。

夜市川柳の毎年の優勝者にはトロフィを差し上げている。第25回記念には久しぶりに女性が獲得をされた。高田美代子さんおめでとう。これ迄には一度、西山幸さんが優勝されている。また、25年の中で複数回優勝された猛者を紹介すると、神平狂虎さん、小島蘭幸さん、新家完司さん、三宅保州さん、前田咲一さんと皆さんなるほどと納得させる好作家揃いである。夜市川柳の舞台で数々のスター誕生を夢見て力のかぎり継続して参ります。

自選句

いい土をつくりにかかる農作業
号令をかけんと動かない腰だ

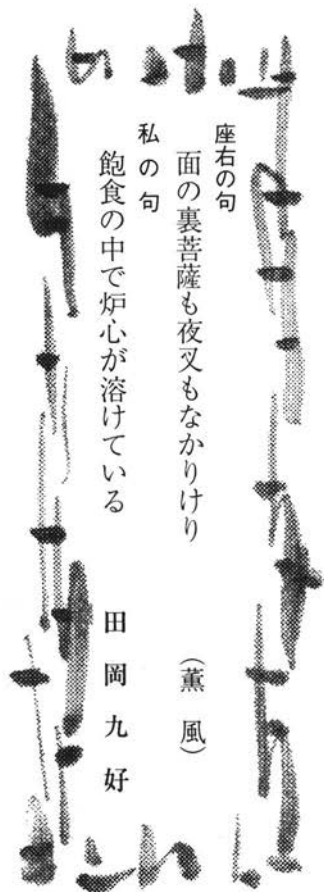
手のかかる息子みたいな夫にて

生前葬をして弔吟を見てみだし

邪魔になる前にどろんと消えるべし

天笑

〃
〃
〃
〃



座右の句

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

(薫風)

私の句

飽食の中で炉心が溶けている

田岡九好

川柳塔 八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「立山の夏」

■巻頭言 夜市川柳25年	河内天笑	(1)
川柳の環境づくりに向けて	川上大輪	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⁽³²⁾	木津川 計	(51)
自選集		(52)
温故知新		(55)
水煙抄	奥田みつ子選	(56)
■各地句会だより 南大阪川柳会の歩み	前 たもつ	(79)
愛染帖	新家完司選	(80)
誹風柳多留——一篇研究 24		(84)
檸檬抄「促す」	川上大輪・松本文子共選	(86)

川柳の環境づくりに向けて

川 上 大 輪

「川柳」という言葉が日常の中に浸透し定着しつつある。これはサラリーマン川柳の人氣によるところが大きいと思われるが、川柳人口の拡大という観点から考えると喜ばしいことである。「サラ川」の是非については意見の分かれるところであるが、この観点から私は「サラ川」大いに結構だと思っている。語呂合わせや駄洒落を頭から排除するのではなく、まず五七五に親しんでもらう、ということが大切なのではないか。川柳への入り口は広い方がいいわけで、誰でも気軽に川柳に触れられる環境づくりが大切なのである。

しかし新聞の柳壇以外ではほとんど見かけない。例えば公立の図書館には川柳関係の本はあるものの数は少なく、書店でもほとんど見かけない。

そこで短絡的な発想かもしれないが「待合室」に川柳句集や柳誌・句会報を置かせ

一路集 「器」……………富田蘭水選……………(88)

「ブル」……………米田幸子選……………(88)

「傷」……………松下比呂志選……………(89)

初歩教室「泳ぐ」……………三宅保州……………(90)

秀句鑑賞「水煙抄」……………高瀬霜石……………(92)

「水煙抄」……………瀬戸まさよ……………(94)

■句集鑑賞 米澤俣子著『花の下』……………木本朱夏……………(95)

みちのく20周年記念大会に参加して 青森函館の旅……………(96)

太田扶美代・岩佐ダン吉・藤田泰子……………

■エッセー 譲られた席……………酒井一壺……………(98)

七月本社句会……………

各地柳壇(佳句地十選/山本玉恵)……………(100)

柳界展望……………(104)

八月各地句会案内……………(117)

各賞選考規定……………(118)

■編集後記(ひとこと/田岡九好)……………(120)

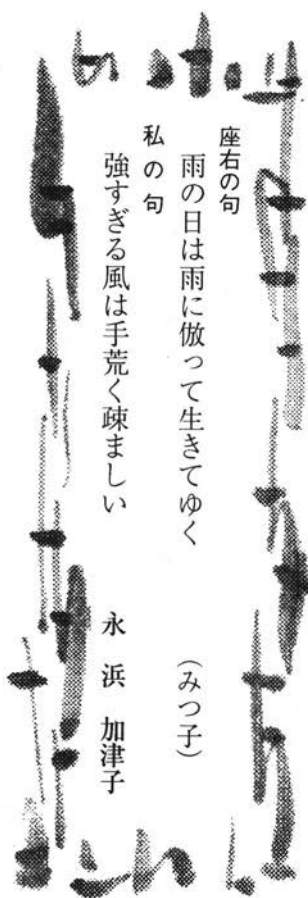
希久子・恵子……………(122)

座右の句……………

私の句……………

雨の日は雨に倣って生きてゆく……………(みつ子)

強すぎる風は手荒く疎ましい……………永浜 加津子



て頂く、ということである。病院や駅、公共の施設、理髪店や美容院等、待合室のある施設に置かせて頂ければ目に触れる機会も増え、サラリーマン川柳しか知らない人達への啓蒙にもなる。

幸い本社には三宅保州氏のお骨折りで初心者向けの立派な入門書『川柳しませんか』が出来ている。それらを大いに活用させることも一つの方法であろう。

もう一つは学校の図書である。どの学校でも短歌や俳句関係の本は一つのコーナーが出来ると充実していると思われるが、川柳関係の蔵書は皆無に等しいのではないだろうか。恥ずかしながら私の学校の図書室にも六万冊ほどの蔵書があるが、川柳関係は私が寄贈した本を除けば僅か二冊しかない。各地域の同人の方々にも協力をお願いして、近隣の学校に川柳関係の本を寄贈して頂き、子どもたちが気軽に川柳に触れ、親しめる環境づくりを進めることも忘れてはならないだろう。超高齢社会が進んでいる現在、川柳が絶滅危惧文芸にならないよう、出来ることから取り組んでいかなければならない。



河内天笑選

弘前市 高瀬霜石

助演賞くらいあげてもいいパセリ

行間にとどき蛇を棲まわせる

完熟トマトやはり大人に食われたい

パソコンを覚えて達筆が枯れる

どちらかが荷物にきつとなる明日

落ち着くなあどこかで水の音がする

堺市 志田千代

無人駅から東京へ行ったきり

先生が先に挨拶しています

意気投合してる私の両隣

ボケ防止喧嘩のタネを探さねば

惚ける前介護心得叩き込む

海のもの食べて人間元氣です

出雲市 佐藤治代

平和惚けいいではないかこんな日も

しっかりと握る手摺りのある階段

よく転ぶ足は用心深くなる

持ち寄った手料理腹もばんばんに
購買意欲なくして金が貯まり出す
青空にそそのかされて出す勇氣

米子市 政岡日枝子

コマーシャル本当かどうか買ってみる

確信はしてない顔だ眼が遊ぶ

サインしてちよつとセレブになるホテル

デザインが一緒挨拶しそこなう

小さい傘がとても立派にものを言う

華麗なる故郷の衣裳をもつアジア

海南市 三宅保州

キンギョエー金魚の声を聞きたいが

意地っ張り同士のボタンの掛け違い

飢餓の子の目にどう映るダイエット

悪いようにせぬと言われて身構える

ありがたや大仏さまも野仏も

宇宙カプセルのようなり試着室

大阪市 池上清治

コウノトリ愛の巢までも監視され
視聴率上げるに電波嘘もつき

道真に東風頼みたい黄砂の日

国会が喧嘩の見本見せてくれ

飲み助の巢は連休も込んでおり

交番に空き巣はいって銃とられ

美作市 大石 あすなろ

万華鏡覗くと虹が棲んでいる

残り火がほろほろ甘い夢を編む

耳底に古い話が溜り出す

顔さんとあげて明日へ旗をふる

無責任な噂進行形で飛ぶ

へそくりも食べてしまつてSOS

藤井寺市 高田 美代子

匿名であなたのファンですと言う

離陸する瞬間が好き旅が好き

バイオリズムが上向くまでと動かない

わたくしを乗せてすいすい騙し舟

神様の死角で悪がよく育ち

防犯カメラの前でポーズをとる娘

佐倉市 岡井 やすお

負けたけど頑張ったから今日がある

民でもよい北の良民救えぬか

対中外交女性にやらせてみてはどう

横綱は外国人に空けといった

特待生抜けた高校野球見ん

ハンカチ王子支えてくれる打撃陣

富田林市 藤田 泰子

ルーツなど気にしていない馬の骨

土壇場で彼氏が見せた腹の底

叶うなら長生きをしてバタンキュー

丸い月とても素直にしてくれる

函館へ来たから食べる海鮮丼

心配は彼女が居ない二十七

大阪府 米澤 俣子

生きている証し時間に縛られる

漫画からまさかまさかが現実化

可能性秘めた若さが魅力です

気を持たすほほ笑み貰ってから迷い

再会の君はやつぱり燻し銀

卵の花の白い花びら夏を連れ

鳥取市 谷口 次男

そのヒントはくがもらつて育てるよ

甘い水過ぎてホタルも糖が出る

遺書残し焼肉ベロリ平らげる

苦い筈銀座のコーヒー超高い

高邁な意見の帰りゴミをポイ

豊かさは釣瓶で水を汲んだ頃

羽曳野市 三好専平

子守歌知らない親に育てられ
いいいいことわるふりをしてみせる
血も尿もコンピュータに管理され
独裁の最期はいつも血にまみれ
蚕豆に布団のような英の愛
このごろは働き過ぎて首を吊り

愛知県 早川遡行

子育てを出来ない親が捨てにくる
何しても怒らないから怖くなり
じっとしては何にも変わらない
休肝日つくった事はいいことだ
本番になると小さく見える的
片付けて見ればこんなに広い部屋

三田市 堀正和

山道はすんなりと出るコンニチワ
雑草がとても元気な別荘地
転勤がないので溜る粗大ゴミ
年金が出るまでパート週三日
晩成も無理だ狙いは狂い咲き
主義主張ないが尻尾は振りません

西予市 黒田茂代

かすみ草薔薇一本を華にする
風のささやき迦陵頻伽の天の声
お化粧の時間が癒しですわたし

味しめて旅行にうつつ抜かしてる
主婦するか自立か今が揺籃期
連続物は見ない時間に縛られる

可児市 板山まみ子

うたた寝の鼓膜に届くホトトギス
貸したのは百円だけど忘れな
塩加減母にあわせる旬の鰯
法要の経はどうでもよい痺れ
法事でもなけりや帰れぬ遠い里
空巢から見れば魅力のない我が家

松山市 古手川光

僕よりも信用されていたバツジ
ふる里の風なつかしくやわらかい
甦れ日本へ仁義礼智信
シルバーに座り眠っている狸
丑の日へうなぎは元気なさそう
モーニング午後二時までと書いてある

奈良県 渡辺富子

ああ夫婦縁につながれ聞かいびき
ほどほどの作法があつて夫婦たり
着飾った妻に気づかずすれ違ふ
躓いた小石の先にあつた縁
おりあいをつけて夫を野に放つ
梅雨空へ義理ひとつ欠き梅漬ける

寝屋川市 籠島恵子

たわいない会話をタぐれがつつむ

迷つてはおれない雨期がやってくる

麦秋や父母の背中がなつかしい

麦秋や蹉跎を遠いことにする

くだ巻いてみたい日もあるすこし飲む

六十の蝶々結びがゆるすぎる

河内長野市 山岡 富美子

まだ胸に赤い雪ふる原爆忌

この星を残したいからエコライフ

脳年齢新製品に試される

家計簿の雪崩が止まぬ負担増

ほどほどで句読点打ちつつがない

格差など知らぬめだかの輪にとける

東京都 小川 賀世子

おはように風やわらかくなる散歩

若葉ムンムン少年の香にも似て

カモの子育て人間よりもママしてる

ガーデニング花のご機嫌問うている

のんびりとして欲しい母今日も留守

倉吉市 猪川 由美子

老人ポスト出来るかもねと恐ろしい

鏡より辞書見る趣味のわたしです

ゴタゴタに安倍の泥舟沈みそう

墓場には故人の秘密満タンだ
ヤバイです若者言葉ど肝抜く

占いで恫喝しては悦に入り

弘前市 高橋 岳水

人並みという物差しが見つからぬ

人間のエゴを見飽きた昼の月

一匹と思えば楽になる余生

人生の節目節目にある踏絵

棒りとはここに極まる原爆忌

神様の思いちがいか皮膚の色

豊中市 水野 黒兎

正直に描かれ似顔絵ほめもせず

哀楽はさまざま駅は万華鏡

妻といつても聞き役ろぼの耳

酒が効くほどの鬱ならすぐ直る

影法師お前もやはり太り気味

デザートのように食後に飲むくすり

鳥取県 石谷 美恵子

ターゲット高く挑んだのも若さ

狂わねば棒から出られそうもない

充分に構えて今日も帆をあげぬ

疑似針に引っかかるほど飢えてない

初対面こころの鎧脱がすひと

白無垢の出番は一度だけがいい

奈良市 米田恭昌

橿原市 居谷真理子

脱北の死線を越えて来た絆

要る要らぬ遺伝子分別機にかける

カラオケ喫茶集う女のティータイム

水着ショーババの視線が動かない

竜虎の絵虎はやつぱり弱いかも(美術展)

奈良市 天正千梢

歳重ね池の深さはまだ知らず

背をおされ苦い水だが飲みに行く

天の声聞くためにする耳掃除

山登り山にいち礼して一歩

新幹線得をしました富士が見え

生駒市 飛永ふりこ

庭の隅コロの幻追う私

持ってやる土産の重さ苦笑され

他人様と競べるなんて先の先

ばんざいと雪山賛美高らかに

トロッコとさ緑浴びる滝の音

橿原市 安土理恵

食いちがう意見机が叩かれる

万感をこめこれきりになる握手

選ばれたわたし選んだのもわたし

お互いさまついうつかりを許し合う

目が合って狂いはじめている時計

咲こう咲こうだあれも見ない花だけど

ネジ一つなくしカタカタ生きている

果ては海力を抜いて流れよう

泣け泣けと大地泣くなと青い空

華やいで海に抱かれにいく夕陽

香芝市 大内朝子

挑戦へびくびく踊る好奇心

欲しいもののいつばいあつてまだ元氣

母の歳越えた命を抱きしめる

恋かしら胸で鳴り出すオルゴール

夕焼けに染まりじんわり里ごころ

大和郡山市 坊農柳弘

錯覚の愛かも手招きの蜚

炎天を突き刺す向日葵のやる氣

団塊の世代年金素浪人

未知と無知背中合わせのロスタイム

鈍感力そして脳トレする男

和歌山市 福本英子

モシモシと痛いところの探りあい

小心の大きい鶏冠よく揺れる

予報どおり雨降ってきた外野席

万円札今日一日を無事すこす

病院とラーメン屋との待ち時間

和歌山市 松原寿子

手文庫のひとつに君の香が匂う

追伸の深さに涙誘われる

回り道思慕の草笛かぜに乗せ

生きるもいくさ女一途に爪を研ぐ

車椅子彼方に君の夢がある

和歌山市 田中みね

肩凝りが消えたら欲は申すまじ

何かある覚悟の上で待つカルテ

御注意へ馬耳東風か私語の席

貸し倒れでまだよかったと言う夫

若作り歳が物言う皺の数

和歌山市 榎原公子

ホーホケキョ 風はご飯をうまくする

孫達をデザインすれば天使の図

アンパンマン描いて孫からほめられる

愛を貪って背丈がまた伸びる

手をかけた分だけ味は深くなる

和歌山市 木本朱夏

行列をズームカメラが嘗めてゆく

父逝って破れた傘が遺される

傷口をやさしく撫でるマリアの目

ジェラシーが髪の中から燃えている

髪切ってわたしをすこし模様替え

和歌山市 堀畑靖子

哀しみを埋めてあげたい人に会う

ほっこりと情けにふれた朴葉味噌

ところでん下校の孫を待つてゐる

美肌成分投入効果あるやろうか

オバサンを卒業の日も近くなる

和歌山市 古久保和子

アピールが苦手私と昼の月

飯茶碗のヒビに努力賞あげる

居て便利居なくて気楽お互いに

びっくり箱ぐらいで動じない世代

説明書も効能書も斜め読み

和歌山市 玉置当代

花時計の前で二時間待ちぼうけ

厭な過去脱ぎ捨てよう辣韭剥く

怠け癖メタボリックに笑われる

いいじゃないですかと器の大きさ

国民無視答えを急ぐ多数決

和歌山市 喜田准一

隅っこで今日も吠えてるひとりです

陰ながら祈ってますと逃げられる

お天道様に向って胸を張る

言い勝った分だけ仕事増えて来る

遺産分け無口な人が喋り出す

和歌山市 細川 稚代

御仏飯ちよつと不出来な豆御飯

六段の調べなつかし琴の爪

満開のバラに生気を頂きに

四面楚歌妻のエールにはげまされ

御近所に助けられてるエトセトラ

和歌山市 松尾 和香

抱きしめて蜜の香りの青りんご

青信号灯す夫に守られる

予定表朝の元気で捗った

面影も重なり合って羊雲

雨音に昼寝さめこむ楽天家

和歌山市 武本 碧

夕映えが明日への扉開かせる

さっぱりと過去切り捨てるシュレッター

胸襟をひらいて神の鈴を振る

鍵掛けて親子の糸が結べない

敬老席で寝た振りをする長い脚

和歌山市 宮本 三喜夫

裏金でプロ野球界ゆれてます

顔役がのさばりだして市が動く

共犯が次々捕まりほつとする

全国のグリーンピアも廃業す

愉しみの旅事故にあい病院に

和歌山市 福井 桂香

茶つみ唄歌う老女の瞳が冴える

老いらくの恋祈る形に手を重ね

燕とぶ低く高くと夏至の街

長短針追っかけっこしてまだ六時

びっぴっぴどのチャネルも食べること

和歌山市 上地 登美代

ほんとうの強さ黙って笑ってる

精いっぱい咲いてみるから見てほしい

病院の時計はスローだと思ふ

カラフルな薬にあった落し穴

マリンプールに包まれたくて魚になる

海南市 堂上 泰女

鶯が宿の近くに住みついた

朝からの計画立てる野菜園

みただけで分らないのが生命だよ

追い風がさらっていった夏帽子

リハビリの身には嬉しい五月晴れ

鳥取市 鈴木 公弘

トップの座耐えてウエスト百センチ

薬飲むための薬をのんでいる

ほたる飛ぶ歴史に残らないけれど

通販のモデルはみんなスマートだ

とりあえず旗はまっすぐ立てておく

鳥取市 倉 益 一 瑠

大地踏む足の裏から春になる
ひたすらに踊り続けている日暮れ
広告のように贅肉脱げません
追伸に毒をちよつぱり盛っておく
税金が年金いじめして困る

鳥取市 録 沢 風 花

ひと雨が降って雑草有頂天
雷で慌てふためくうちの猫
乱舞する蛍の里は遠い日に
拉致の子を呼ぶ声がする日本海
社保庁に怒りを越えて情けない

鳥取市 有 沢 せつ子

川柳の調子はどうと孫が問う
丹念の野菜いただく有難さ
雷が一喝してこの世相
五十年経た恋文の主に会う
剪定し大きくなった庭と空

鳥取市 岸 本 孝 子

傷口にことさらふれる友がいる
人ごとのように聞いている海開き
追い風に上手に乗れたフリーター
今年また亡母とスイカを分けて食べ
喪の後は癒しに派手な服を着る

鳥取市 岸 本 宏 章

映画村だけは時計が止めてある
ゼロ一つデザイン料が付いている
紫外線若いときには気にもせず
弁解をするたび謎が深くなる
喝采のない自分史で良しとする

鳥取市 春 木 圭 一 郎

疲れても家に帰るとほっとする
家族にもいっぱい言おうありがとう
妻や子へ格好悪さ見せておく
何事も必死家族を守るため
褒め言葉一つにやる気わいてくる

鳥取市 杉 本 孝 男

鳩の目へ淋しさに逢うヒロシマ忌
夾竹桃真赤に炎えるヒロシマ忌
ヒロシマの心に学ぶ非核論
折り鶴よ競い平和の空へとべ
燃え盛るいのち預けて舞い上げれ

鳥取市 上 田 俊 路

雨垂れが続く恵みの千枚田
雨垂れにタンゴの曲を口ずさむ
借りた傘忘れて芸のない男
居酒屋で傘一本があぐらかき
素晴らしい明日があるから生きている

鳥取市 山宮 愛恵

主婦の朝テキパキとしてティータイム
笑う事いっぱいあつてうまい飯
ヒレステーキ奮発しちゃう誕生日
頑張りの指へやさしいマッサージ
片付をしたらばあちゃん食うてない

鳥取市 中村 金祥

自分史の中に祖父母が見当らぬ
いつの世も貧乏人がターゲッ
箱入りの飛鳥美人が歳をとり
年金の未納どころでなくなつた
いい汗をかくと心が広くなる

鳥取市 福西 茶子

頼もしい老人会の知恵袋
竹の子は陽差し受けないから美味い
ふるさとに納める税は惜しまない
突然に休耕田のキビ菜種
鍵掛けぬ勝手口から来る野菜

鳥取市 田中 瞳子

アナウンサーまでが略語を使い過ぎ
破れたら繕えばいいでかい夢
飲み過ぎの尺度百人百通り
やる気と根気少し根気が負けている
空気がサラサラ痛めた首が喜ぶ日

鳥取市 植田 一京

日本海あつて鳥取好きになり
歳かなあしかしかしが多くなり
ライバルと言われポーズをとっている
無言でも亡母の教えは生きている
午後からの予定びつしり忙がしい

鳥取市 夏目 一粹

おだてられ乗つてしまふと落される
歳をとるほど戸締りが気にかかる
困つたな頼られだして思案する
夢のある空くじなしの花の種
地球には一つしかない月あかり

鳥取市 山本 益子

人生のデコボコ道に立ち向かう
成すことの多い余生はたんたんと
天花粉匂う子集う夕涼み
耳早い友が噂をまきに来る
もしかして台風の目は私かも

鳥取市 福田 登美

老いた母頼つてくれて呆けられぬ
残り火に翔んでみたくて羽繕い
胸の内聞いてもらえば軽くなる
真つすぐに引きたい線がゆがんてる
前向きにやさしい老いの火を点す

鳥取市 土橋 はるお

次の世も遊べる癖をつけておく
得手勝手言わせしばらく泳がせる
昨日の法螺の続きを吹きに来た
裏山の古い祠が息を吹く
うにやむにやにせずにはばりと言つちまえ

鳥取市 奥谷 彩子

亡夫の七くせそっくり貰う子と同居
軸足の故郷へＵターン決めている
釣り糸を垂れるこの世の浮き沈み
うれしい日笑い袋をふくらます
民謡の生きてる里の山が待つ

鳥取市 永原 昌鼓

携帯が拍車かけてる本離れ
ごま塩を効かしたむすび愛を盛る
悲しいね老いの証しかよく転ぶ
細々と火種くゆらし老いを行く
金ですむ喧嘩は笑顔すぐ戻る

鳥取市 太田 幸枝

グリーン車で尻こそばゆい旅をする
歩きなさい歌いなさいと娘の電話
味方だと信じた夫早逝する
艶のある声だ八十路の安来節
はげましてはげます仲の友が逝く

鳥取市 富山 檳榔樹

喉仏般若湯これ話し出す
温暖化七夕星も煙たかる
すまなんだ昨夜の寝言本音なの
なつて見よ所得番付け十傑に
血税の無駄遣いこそ国賊だ

鳥取市 田村 邦昭

マナーなど知らない親に子が学び
転向を余儀なくさせた世が憎い
塾という遊び場見つけ子の元氣
味方だと思ふ握手にだまされる
まだ走る馬が引退決めている

鳥取市 土橋 睦子

欲ひとつ捨て肩の荷を軽くする
遠い日を想い出させる芋の蔓
自転車が私の脚になつている
禁煙と騒ぐタバコの花が咲く
弱点をみんな知つてゐる無二の友

鳥取市 塔 寛子

がむしやらに生きて未完の愛の詩
翔べぬまま燃えた女の最終章
カーネーション達者でいてと娘の便り
気づかわれつむじも腰も曲げかねる
九条という味方に向けて銃かまえ

鳥取市 西川 和子

エヤコンは切つて土用の風を入れ
シャワー浴び明日の力にするビール
時どきは音を外している気楽
お裾分けすぐお返し of 来る律儀
その度に母の教えを思い出す

鳥取市 宮 協 道 子

病む友へ梅檀香の風送る
生きるため最小限の涙ある
夫逝きて気楽さくれた野ボタンよ
浄土の風我子救つて さらつとね
我子達が観音様に見えて来た

鳥取市 平 尾 菜 美

見落した花に未練が募る日々
ひらめきが一瞬ピカリ目が覚める
見苦しい無理はやめてネ正当化
苔むさぬように宝を陽に晒す
耐え抜いた大殺界の夜が明ける

鳥取市 中 宇 地 秀 四

頼られてまだまだ俺はボケられぬ
何時も会う人の名前が口に出ぬ
妻旅行手持無沙汰の茶碗酒
孫台風帰った後の探し物
良心の無い人間が強く見え

鳥取市 吉 田 弘 子

死ぬはなし生きるはなしに弾む老い
ふと思うどちらが先に喪主になる
労りの愛情豊か夫婦の絵
強き芯細身に秘める美智子さま
会計簿が中国産でいいと言う

鳥取市 加 藤 茶 人

愛情の裏返し慰謝料嵩む
手離せぬ孫の手老いの日向ほこ
現実 is 介護疲れの愚痴も聞く
大阪のオバチャンらしいオチを聞く
言おうかな言えは妬みがちと恐い

鳥取市 池 原 天 馬

コミック誌今の世相をのぞかせる
猪の食わず嫌いを祈るのみ
同窓会喜寿ともなれば酒あまる
校庭に子らの声消え草しげる
軍人の墓一際高く苔むして

倉吉市 山 中 康 子

飽きるほど負んぶに抱つ子したんだよ
相手には一歩ゆずつてゐるころ
この試験まんだ序の口かも知れぬ
ふるさとの心をきざむおもてなし
子宝は何は無くとも最高だ

倉吉市 米田 幸子

若者におくれはとらぬ老いの意地

私利私欲みんな捨てたら仏様

矢印に添ってゆつくり黄泉の旅

許し合うことから愛の芽が育つ

老人が不況の波をもろに受け

倉吉市 山本 玲子

婆ちゃんは何があつてもありがとう

はーつとしてゐるようすが思案中

演説の好きな社長に草臥れる

加齢とともに人の情けが身に染みる

どんぐり目をして台風がやってくる

倉吉市 野口 節子

女三人どこまで続く無駄話

子育ての頃の景色が懐しい

幸せの景色少しずつ変る

加速する老いに歯止めの五七五

乗せられたアリコの熱いコマーション

倉吉市 最上 和枝

弁当へ板かまほこが紅添える

再会を喜ぶビール泡溢れ

坪庭の水琴窟が語りだす

白無垢かうエディングドレスかに迷う

芯のない豆腐一丁平らげる

倉吉市 牧野 芳光

四季の花飾り幸せそうにする

大好きなものは黙って食べている

効きそうな色の薬を飲んでみる

香水をまいて隣と差をつける

退職の先に極楽ありそう

倉吉市 松本 よしえ

安物の山百均で目移ろい

雨はまだ止みませんねとお茶を注ぐ

小松菜も播いてシトシトいい雨だ

明け方の雨シトシトと夢心地

雨雲を裂き雷神がやって来る

米子市 白根 ふみ

じわりじわりとサインが攻めてくる加齢

太陽が眠りそろそろ光ろうか

ポケットの怒り時どき指に触れ

意地悪にならないように助言する

もつれあう絆切りたし千切れ雲

米子市 青戸 田鶴

生きている小さなものへ感謝感謝

壁画のカビ飛鳥美人もよれよれに

泡立草刈ってせいせいした野原

なりふりをかまわぬ私いましめる

はじらいを忘れた女たちの群れ

米子市 中井 ゆき

万緑の命をもらう胸一杯
人様の分も生きそう元気です
真実は見えぬ無気味な壁の国
刈り上げた青年のくびさわかだ
スーバーはレジでありがと言っただけ

米子市 光井 玲子

住民税アップに波紋よんでいる
下駄箱に古びた草刈り鎌ひとつ
押し入れてひっそりすごす蛇の目傘
散る日まで自転車だけは乗るだろう
いただいた命おろそかには出来ぬ

米子市 門 脇 晶子

わだつみの骨が叫んでいる平和
九十九折わたりきったら黄昏れる
五月雨をあつめてダムは生きのびる
痛む足引きずりながら力んでる
借命を大事にしよう八十路坂

米子市 野坂 なみ

駅弁を家で楽しむ味の旅
さまざまの傘に守られ八十五
鍵かけたままの空家がまたふえる
種風船山の彼方のロマン追う
社保庁のミス万全の治療なし

鳥取県 竹 信 照 彦

洗濯物干す技板に付いて来た
歯の治療残る自前の歯を誉める
歯を削る音は昔と変わらない
ラニーニャが日本の夏を狙ってる
案の定多数与党の多数決

鳥取県 深 田 俱 久

七夕へ希うは君と一緒にだね
良心も缶と一緒にポイと捨て
大和撫子歩行携帯ボトルまで
人生の艶より気になる髪のかや
平成の錬金術か裏金は

鳥取県 盛 田 夢 路

トップに立つ夢は密かに抱いている
春夏秋冬風が奏でている音符
悲しみの奥に大事な人がいる
思考回路このごろ故障多すぎる
虐待死どれほど我慢しただろう

鳥取県 佐 伯 や え

目の手術した友つれて里の湯へ
逢えた日の午後あじさいは彩をかえ
思想少しかえたらとても生き易い
平和な世憲法九条あればこそ
神々しい大山の北壁凜と立つ

鳥取県 山下 節子

鬼瓦この家を守る面構え

破るためあるルールなどありません

注射器を見ただけなのに身構える

老人をターゲットにす詐欺師達

頼み事しかししかしと断わられ

鳥取県 下田 茂登子

味気ないおとこの傍で今日も暮れ

優しさに人間の味魅せられる

仏の目万に一つも狂わない

告げ口に血圧までが左右され

忙しさ連発しては自慢する

松江市 銭山 昌枝

食欲も鼻歌も出る青葉風

快復へネジをゆっくり巻いて見る

打てば響く妻の太鼓もすり切れる

洗面器に亡母と同じ顔が浮く

終りまで一緒に居ると決めた仲

松江市 小川 注湖

跳ねて見て舞って見たけど定年日

新車磨く初任給の子手を止めず

踏まれてもゆがんで咲いてひかる花

雑音がまっすぐ生きたる邪魔をする

人を褒め損じたことはありません

松江市 三島 淞丘

捨てられることが使命のゴミ袋

仲直り雨のち晴れと書く日記

欠点に片目をつぶる思いやり

侮って跳んだハードル蹴躓き

四捨五入して友情を切り捨てる

松江市 川本 畔

みんないい友達だった少し老い

泣いたこと笑ったことも置いてきた

遠い地へ想いを馳せてちまき巻く

夫は喉を痛めてしまい無口なり

そそくさと笹巻二つ食べて出る

松江市 津川 紫晃

人間をまあるくさせる泥まみれ

少年の足には風の靴がある

割り切つてしまえば楽な椅子がある

丸くなる話を聞いている湯呑み

父の日は二番煎じの味がする

松江市 安食 友子

目も潤む息子夫婦と湯の町に

庭園の篝火に酔う滝石も

陽光に天衣無縫な塵長閑か

語りかけから安らぎも下さる巢

皐月咲く遺訓どおりに育てて

松江市 佐野木 みえ

サスペンステレビの中に三時間
虎屋から届く羊羹お茶にする
一杯のワインもやもや吹きとばす
もういいかい土の中から蟬の声
カーテンを引けば孤独な夜のとはり

松江市 松本 知恵子

菜園のゴーヤ真夏へゴーサイン
労りの雨を待ってる夏野菜
少しだけ芽吹きが遅いだけのこと
嬉しいね復帰の中田ボール蹴る
うすむらさきに馬鈴薯咲いて子を宿す

出雲市 竹 治 ちかし

神様にまかせておけば良い話
こだわりを隠し悟りの顔でいる
良い人と言われている要注意
本当に泣きたい人は泣かせん
日進月歩昔のままの僕が居る

出雲市 石 倉 美佐子

ごめんねと言えど済むことまだ言えず
きつちりと棚の荷物も整理して
のほほんと聞いている息子叱れない
花菖蒲泪のしずく溜めている
美術館ムーンソナタが似合いそう

出雲市 園 山 多賀子

枝豆にビール再会待っている
余生にはもう岐路はない終点だ
爪丸く切って卒寿のサバイバル
変化球未だ受け止める姑の位置
吃水線辺りで血迷う風の私語

出雲市 小白金 房子

名柄の味はやっぱり豊の秋
酒煙草牛を相手に励む日々(息子)
切り張りをして元氣な兄が二人
月見草咲いて逢いたき人を恋う
蓋しても癒えぬ心の深い傷

出雲市 吉 岡 きみえ

口笛を鳴らせば澄んだ風が吹く
ラッキーな花は東を向いて咲く
想い出をいつぱいつめた玉手箱
いい子達みんな挨拶して通る
窓あけて車の往来みえています

出雲市 城 多 喜

にぎり飯私の力のいれどころ
口笛を吹いて若さに添うてみる
軸足がちよつとはみ出ただけのこと
また逢おうそんな気休めばかり言う
白黒をはっきりつけて嫌われる

出雲市 伊藤 玲子

出雲市 富田 蘭水

虫も好く野菜安心して食べる
家の前きれいに掃いて待ってます

ポケットの内緒話は零すまい

突ついた話思わぬ物が浮く

坂の上労るように紫陽花が待つ

出雲市 多久和 敬子

いい女演じて今日の幕を閉じ

少しづつ酒量も減って年を知る

まな板が妻の帰りを待っている

銀山の世界遺産に黄信号

紫陽花が雨の情けで咲きました

出雲市 岸 桂子

十円の行方立ったり座ったり

横文字がからきし駄目なキリギリス

摘んだ芽が大輪だったかもしれない

筍が脱皮始めた竹の道

けじめある日本の四季が狂いだす

出雲市 森 茂美

反省をしながら葉飲んですます

老兵だもう犬死はするものか

釣りあげた魚の涙が陽に光る

独り酒好きなひとには見せられぬ

バカヤローそんな言葉にある温み

五月病去ってブラウス生きかえる

ふぞろいの玉葱しきり艶を売る

日に一度畑をみると落つかず

無消毒キャベツ青虫主を待つ

お葬式遺影にすまぬ五月晴れ

出雲市 持田 多輝子

みまかりし句友の遺筆賀状読む

八十路越え目指す峠は卒寿坂

ゆくゆくは別れにやならぬ影法師

満願にまだまだ遠い遍路旅

文学にうとい私の脳細胞

出雲市 小豆澤 歌子

たつぷりの緑に噎せて聞き洩らす

新緑の中で冷たい噂聞く

進まない背中を押してくれる風

ほどけない紐が一本胸にある

合歓の花揺れる真意が掴めない

雲南市 毛利 幸

帯締めてどつしり構え大地踏む

もやもやが心の隅でうずくまる

地球での揉め事宇宙大笑い

カラオケで歌う演歌に身を隠す

一発の銃声政治に穴あける

島根県 伊藤 寿美

昭和の日になったみどりの植樹祭
肩の荷が生き甲斐だった上り坂
明日に夢今日の汚れは今日洗う
民宿でバカの木芽の乙な味
鈍感も老人力にして生きる

岡山市 井上 柳五郎

朝食後十種の薬あふり飲み
不整脈不安と危惧が交差する
ニトロ含む適機に迷う夜半どき
突然に動脈瘤を知り苦悩
悲喜交交CT検査超音波

倉敷市 撰 喜子

余生なお気力で生きん雲の峰
闇の中一筋光る蜘蛛の糸
妻上位我が家の平和たもたれる
失恋の痛手を語る顔の艶
家紋入りの幟旧家を主張する

真庭市 国米 きくゑ

雑用のみの生涯だけ胸を張る
試着室横むきに見て止めにする
眼も耳も達者足腰しゃんとせず
あげる物無いが笑顔と愛がある
小抽出し紙風船の夢ひとつ

真庭市 福岡 智恵子

貧しくも心豊かに花作る
ほどほどの趣味が余生の糧となり
一坪の菜園実るナスキュウリ
来年も出来る積りのクラブ買う
母の日に花より団子所望する

美作市 小林 妻子

子育ての甘さか木から落ちた猿
グリ押しの多数決など何になる
恩返しばかりを狙う天下り
親の年忌も坊さん任せで忘れとり
今に見ておれとトマトも花をつけ

美作市 山本 玉恵

苦も楽もすっぱりつつむ緋のベール
また逢いましようにと花しようぶの前で
おにぎりを食べひとりで出る笑顔
建前を通して爪はじきに遭うた
靴音が淋しさだけを置いて去り

美作市 福原 悦子

日本一母の奏でる子守唄
降る雨に気分転換鍋磨く
笑顔して介護の苦勞見せずいる
一男一女とつさに出来るわけがない
不器用な男にもある処世術

竹原市 岩 本 笑 子

白菜を猫が食べてる無農薬

フラワーシャワー門出の空は紺碧に

ヨーグルト猫が待ってる急がねば

枝豆もビールも好きで夏を待つ

カープ勝て勝てビールもよく冷えてます

竹原市 石 原 淑 子

天の声かも友あり迷いから脱ける

だんご汁たんと母乳の出るように

空即是色薔薇咲きほこる薔薇の散る

ウインドー慌てて丸い背を伸ばす

弾ける笑顔百戦錬磨あればこそ

竹原市 時 広 一 路

自画像の頭は白髪にはしない

今の世に美味しい葉なぜ出来ぬ

男独りと言われたくない掃除機だ

片減りにさせて済まないなあ靴よ

聞こえない耳の方から囁かれ

東広島市 福 島 万 年

コンビニでガム一つ買いうを足す

飽食のカラスは歌を歌わない

新緑の大海原をホトトギス

あれやこれ みんな忘れて孫を抱く

戦する国に奉げる子は産まぬ

宇部市 平 田 実 男

愛情も水もかけ過ぎてはならぬ

同居するまではしていた角隠し

叩いても埃りが出ない平議員

男湯へ入っていったいいおんな

欲に目が眩み詐欺師の的になる

美祿市 安 平 次 弘 道

腕組みがとけて多彩な色になり

口惜しいが切取線をまたいでた

舞台裏で泣いていたのは善人だ

燃えつきる手前未練がぐつと増し

古傷をたどり生き様考える

東かがわ市 神 保 坊 太 郎

耳学のメッキぼろぼろ剥げる頃

水戸からご先祖さまはウドン好き

弱り目に情け容赦のない花粉

こそばして見たい仁王の土ふます

間借りする地球を壊すのは誰ぞ

東かがわ市 川 崎 ひかり

ちよつとした事で採めてる倦怠期

行間に女の火種埋めてある

何もかも解れば人生つまらない

試食ではあんなにうまい味だった

万歩計花友達がふえてゆく

東かがわ市 清川 玲子

揺れ出せば犬も一緒に避難場所

飼い主に似てかベットも肥満さみ

疲れなど言わぬ仕事の虫の父

責めたとてどうにもならぬ割れ茶碗

吉本の笑いにほぐす頭脳線

東かがわ市 伊勢 八重子

一言を吞んで波紋を遠ざける

輪に居ても孤独の風は吹き抜ける

世話になる嫁にはチョッピリ花持たせ

割の良い話はチャッカリ持つてゆき

花束を抱いて職場にけりをつけ

東かがわ市 原 賢

上ばかり見てると石に蹴躓く

車間距離開けると視界広くなる

難問は無視して置いたままにする

度忘れが増えて言い訳ばかりする

ライバルのひとりに愚痴を聞かされる

松山市 高橋 宏臣

羽音たて急所を衝いてくる毒矢

言い訳に出かける靴も揃えられ

穿き潰す靴は意外に潰れない

生煮えのままで別れて抱くニトロ

命ばんざいごはんとつてもうまい朝

松山市 宮尾 みのり

妥協したとたん毒気も抜けました

素顔では気持も減入りそう女

もう時効ですねと歳を笑い合い

まだまだと古稀ニッケイを読んでいる

あやふやへ回答が出た電子辞書

大洲市 中居 善信

イカ2キロチヌは50を追いつづけ

しまらない乾杯です紙コップ

友達が一人もいないままニート

涅槃図よ逢うてはならぬ人と逢う

不意にやるかも私も持っている殺意

高知市 小川 てるみ

組板で踊っているよ夏野菜

反省は猿より劣るかも知れぬ

転んだら起きる暮しが身を助け

大と小人目氣にして小を取る

淋しくて仏と話しています

高知県 小澤 幸泉

どの顔も地酒に酔える桂浜

雨上がり山は緑にはしゃぎだす

サフランの花咲き赤子の声うれし

合図にはのらぬ亭主の重い腰

病窓に映るネオンが夏を呼ぶ

高知県 赤川菊野

唐津市 宗水笑

パスポート異国の文化たつぷりと
ストレスはゴビの砂漠にまきました
飯の世はちよつと寄り道してるだけ
自家菜園虫と共存しています
知らんふりしとこ ほとぼり冷めるまで

北九州市 岡田幸生

寡婦の輪に肩身が狭くいる有夫
御点前のマナーに悩むミニの脚
火を抱いた女の一途さが怖い
初恋の人の離婚を風に聴く
喜寿超えて妻の手綱がゆるみだす

唐津市 市丸晴翠

鮎と鞭ポケットにあるおばあちゃん
行方不明の靴犬小屋で傷だらけ
すっぱんの私に鏡後ずさり
まっ直ぐな飛行機雲にある孤独
ブルした暮しの知恵も黄昏れる

唐津市 樋口輝夫

悠久の往時を偲ぶ兵馬俑
失くなったおハギに位牌口を割り
叩かれて益々貝は口を閉じ
二刀流甘辛こなす人間味
似顔絵にはつきり皺も描いておく

心底の願いは絵馬に書きづらい
傍目にはゆつたり者の太公望
縄のれん上司を斬って妻も斬る
旨いものイワシの生という古老
お地蔵の薄い腹かけクールビズ

唐津市 井上勝視

妻の側安心をして酔っている
婦唱夫随洗いものから慣らされる
旧悪の時効を妻は認めない
落ち込めば老妻が一本つけてくれ
気丈なる妻にもあつた涙壺

唐津市 山口高明

スキヤンダル無い宰相でオモロ無い
懺悔するほどの悪さはしておらず
愛憎の糸が纏れて刃物沙汰
物心ついた時には施設の子
抜け道を防ぎ切れない銃規制

唐津市 坂本蜂朗

お袋の味コンビニで習う子等
交番は消えコンビニがあかあかと
医者のお笑い前後左右を確かめる
知らなんだ底の破れていた大器
ガラガラと恋も遠のくいい器量

熊本市 永田 俊子

ゴミ出しに老いのハンデ上衣替え

それなりの楽しみがある名無し草

歩き疲れてお地藏様とお話し

百円シヨップでひやかし客になっている

淋しくて人込み歩けばいいよ独り

熊本市 高野 宵草

嬉しさよ何はなくとも真心の

悪い歯の修理をせよと胃が騒ぐ

日が昏れてからエアコンが効いてくる

老い忙しやれのし袋ご香典

相槌を打つから切れぬ長電話

熊本県 岩切 康子

正常値だけが付いてまた検査

予定済み開放感の羽で伸び

順調な快復笑顔に救われる

たつぷりと犬の毛を梳く夫の留守

夢実現残りの命楽しもう

シドニー 坂上 のり子

自殺するほどなら本音言えたはず

他にももつと汚職議員がいる気配

優先席のためき寝つき立たせよか

山すそに寄り添うて根が生えた村

隣席と一期一会を惜しむ旅

弘前市 今 愁女

おばちゃんと呼ばれ何やら氣にくわぬ

白色の和紙にローソク水芭蕉

触られて頷くようにおじぎ草

合掌のかたちで眠る合歓の花

遠雷にはや広重の雨となり

弘前市 宮崎 ヒサ子

お札状の中で吹いてる初夏の風

旅は束の間その都度つどを胸におく

雷走る小さな意地は後回し

過ぎたひとこま思い出させて薔薇が咲く

滝の音に心すきと洗われる

弘前市 富士 慕情

嫌われているとも知らぬ赤マムシ

ゴミの日は欠かさずゴミを出している

まずビール後は野となれ山となれ

リストラをしても倒産した会社

歳時記を狂わせている温暖化

弘前市 須郷 井蛙

湯治場で人生論を語り合う

ニッポンの音が奏でる茶漬けめし

酒の量減って家族を案じさせ

四人目が生まれ勲章あげたい世

中継ぎも押えもみんな妻がする

弘前市 櫻庭順風

履修せぬ絵画入選するなんて

余暇の絵がいつしか熱をあげている

東奔西走に離されぬ絵筆

入選にお山が笑う山羊笑う

晩学の絵画故郷で崇められ

弘前市 岡本花匠

たんたんと生きて至福の新茶酌み

ウグイスの声に足止め散歩みち

永らえて愛しく諭す風と合う

日除けして花のいのちを長引かせ

ラベンダーのかおりいざなう遊歩道

弘前市 相馬銀波

答弁は鈍感力を試される

無党派の票に読ませるマニフェスト

二極化は先の先とは言えぬ票

ふところの深さで仕事する人事

この先も過去の重荷へ無口です

十和田市 阿部進

普段着で語る老婦が喜ばれ

健康で何時も若くていたいです

貧乏神居心地よくてさらばせず

飛び出すな走る車がかみつくぞ

強くなれ耐えて生きよと子に教え

平川市 小寺花峯

ふる里の駅はいつしか無人花

負け方を考える節くれの指

のほほんの人生でした下り坂

さびしさの涙を抱いたのもピエロ

年金に見合った旅で日帰りで

黒石市 相馬一花

オリジナルヘアでカリスマ出来上がる

倦怠期夫に渡す抱き枕

団塊のパパはまだまだ燃えるゴミ

どの辞書も最新版と書いてある

タンポポは美味しい風を知っている

黒石市 佐藤古拙

手料理にあつさり鎧脱ぎする

一部始終月が見ていた拉致の海

DNA天動説を譲らない

クールビズ男がちよっと軽くなる

あや取りの指がおとこを締めあげる

砂川市 大橋政良

妻の独楽サインを交す僕の独楽

単身赴任名刺を貼っていつも留守

思いきり叫んでみたい海の蒼

がたびしと重い引き出し梅雨なかば

ざっくりと甘さ飛び出る西瓜割る

さいたま市 八田 敏

点滴で生きてる妻に百合の香を
余命わずか医師宣告の冷たさよ
十三年幾度の危機を越えた妻
医師宣告あと付添える日を数え
梗塞でしゃべれぬ妻は何思う

さいたま市 星野 育子

ふるさとの廃家に今も泰山木
回り道したから会えた友がいる
夫婦ってナニと聞かれりや元他人
犬猿も育てようでは馬が合う
キッチンで世界が全て見えてくる

日高市 根岸 方子

桂林の景色絵心くすぐられ
舟下り奇山続きに時忘れ
裏通り将棋で涼の人溢れ
京劇にしばし忘れるむし暑さ
広州の街日本車が幅きかせ

柏市 河野 桃葉

骨休め何と優しい雨だろう
エネルギー充電させる物忘れ
人間が好きで人間裏切れぬ
飛び出しに黄色い声が降ってくる
旨そうにチヨコを頬ばる夜勤明け

柏市 永峰 宣子

銀行の利息代りのエコバッグ
匿名社会人情が薄くなる
高一が優勝プロを焦らせる(ゴルフ)
点滴の薬を替えて模索する
連日の病院行きがづらい歳

東京都 清原 悦子

無添加の空気探しに旅に出る
湧き水を一気に飲んで生き返る
格差婚世間の目など気にしない
良い返事届いて音符風に舞う
捨てかけた鍋がここぞという出番

東京都 長谷川 康子

一輪の紅が周りをなごませる
ふっくら頬をちょこつつつきたい
味噌汁の茗荷に初夏が匂い立つ
メールチェック片手でバギー押しながら
初夏の風苗のウエーブ誘ってる

東京都 岸野 あやめ

三キロも痩せたと皆に告げ歩く
褒められた千五十円ネックレス
へまばかりして暮らしてる昨日今日
内臓は素直閑節駄々をこね
きつと効く健保のきかぬ整体医

国分寺市 野崎 勝

生き方を変えてみたくて途中下車
紫陽花が鮮やかに咲き雨も善し
友と行く旅に懐空になり
墓石にここに居ますと彫っておく
久しぶり親戚揃うお葬式

八王子市 播本 充子

むずかしく難しく言うパネリスト
この人の何処に癌かという日焼け
白過ぎて怖いご飯もおしほりも
銃口を毛虫に向ける怒り肩
誰某のひどい話を聞いてくる

武蔵野市 亀井 円女

愛する曾孫いよいよ抱けぬ歳になる
信じましょ男の涙に嘘は無い
いいコンビ嫁も私もおっとりさん
皺の手にリングは合わぬもう止そう
阪神ガンバレ一位やないと許しまへん

横浜市 菊地 政勝

うしろから追い立てられて登る山
正論も抹殺される多数決
雑学の会話は底が透けて見え
肩書きの一喝風の向きを変え
限界を悟り寡黙となる男

横浜市 小野 句多留

円楽の栄枯盛衰芸惜しむ
年金の気の遠くなる未来地図
間仕切りをはずし手足を喜ばす
図書館に青春時代の匂いかぐ
亡命をしたけりやどうぞ御勝手に

富山市 ひかる

太陽と土の恵みにある不思議
安全と安心食べる無農薬
菜園の仲間先生ばかり居る
カラスにもキジにも分ける地の恵み
青空を仰ぎレモンの丸かじり

可見市 鶴留 百合

新顔はベテランらしい登山道
パソコンにいじめられてるドライアイ
至福だな七万本のバラの園
早朝のドライブ飛驒はやさしくて
絶景ヘリユツクの汗もスツと引き

静岡県 藺田 獭 杓

すらすらと同時通訳遅れまじ
同じ値のキャベツ重さを手で計る
マニキュアも要らぬ健康爪の色
見出しだけ見て新聞を読んだふり
父と子の将棋三番夏座敷

犬山市 吉田 幸子

抽選会ウフツと笑いティッシュユクレ

縁という糸で鼓動が鳴り響く

嫁からのメール妊娠三ヶ月

脳天気切羽詰まって知恵が出た

話ネタ盗られあつさり外す席

犬山市 金子 美千代

化けて行く過程観察する車内

肩書は知らなくてよい趣味の会

おしゃべりの中で修正する持論

任すなら口出ししない事にする

空席が目立ちやきもきするお能

犬山市 関本 かつ子

顔も手も別人になるつかみ取り

お互いにメガネ捜しをしてる居間

せめてもとひと品増やす年金日

宗教を持たない人も千の風

大柄な人で細かい口を持ち

愛知県 三浦 きぬ

親知らぬ子猫の黒と暮らす日々

物不足清貧の頃なつかしい

逝く時は子猫の黒を抱きしめて

君が代にやはり私は日本人

妻は喜寿亡夫は二十代のまま

京都市 高島 啓子

ふつきて全部磨いた窓ガラス

転勤へ市の立つ日をまず憶え

長雨へ螺子が緩んでくる手足

梅雨寒へ熱い番茶が欲しくなる

うっかりと気を許してた小糠雨

京都市 榎本 宏子

朝寝して小雨が耳に心地よい

美しい国富士の勇姿を見て思う

身の回り整理しすぎてから孤独

凡人を強気にさせる誉め言葉

筋書きは最初からないラブゲーム

京都市 三宅 満子

妻が留守電子レンジがよく喋る

釣り掘りの魚が愚痴を聞かされる

病院で聞けない事をテレビから

忠告もあれこれ聞いてくたびれる

沙羅双樹いさぎよく散る雨上がり

京都市 西村 益子

老い二人大きな鮎桶持て余し

へそくりが減りっぱなしでケセラセラ

生き方を変えるストレス溜るから

不義理した顔が浮かんでくる深夜

料理掃除手抜きばかりですみません

龜岡市 井上 森生

大阪市 津守 なぎさ

遍路風ウオークで琵琶湖一巡り

落慶の伽藍を祝う揚羽蝶

欲の目を閉じるといつもいい夢が

日に一句はつと気付いた感謝の句

タイタニックの危機に気付かぬ日本丸

長岡京市 山田 葉子

衣替えひとりしてます竹の秋

森の囁き聞きたれるまで歩く

肩叩きの予感外堀埋まつてる

白旗を掲げてからの軽い足

無駄足を踏んで気心知れてくる

大阪市 中村 叡子

老いてゆく道は苛酷で淋しくて

老いふたり誰にも言わず旅二泊

大浴場並んだシャンプーみな試し

露天風呂舐めれば塩の味がする

白鵬がハワイ巡業また優勝

大阪市 松尾 柳右子

長生きは朝昼晩の魚好き

五月雨に草木生き生き目を奪う

から松に浮雲かかるツアーバス

にらめっこせず目をつぶる電車なか

ビル谷間すばやく飛行機通り抜け

検査後のお粥がうまい青い空

残雪にふきのとうみる上高地

病には負けず痛みは試練とも

旬野菜どんどん調理する至福

恐ろしいポリープ除去をしたビデオ

大阪市 渡部 さと美

たこ焼きが食べたい里の子らが来る

麦の秋もう見られぬかびわの色

八月の天と地呼応千の風

ちよつと見栄張った男の裏が見え

兄弟で飲めば昔へすぐもどり

大阪市 伊藤 博仁

病院食カロリーとなく腹の虫

退院の上げたお神酒のおすそ分け

脑梗塞ばんそうこうが引き寄せる

振り向けばまた置き忘れテレカード

ポケットの紐に問うてる無料バス

大阪市 近藤 正

増税を改革の名で押しつける

親も子も気を許せない遊園地

年金が消えていました悲しからず

この夏も歴史を刻む選挙戦

間の抜けた人が主役になる落語

大阪市 岡 本 久 峰

せめてもの神が恵みか医者知らず

男らしく白州で裁き受け給え

風薫る貧乏ぐらしまた楽し

仏心がごきぶり逃がす歳となり

ハイビスカス咲いてひとりのわび住まい

大阪市 小 泉 ひさ乃

いばらせてずつと夫婦のとらとさる

父さんの灸今日は大きめにする

人の手も杖も頼らぬ頑固な手

居直って病と共に日々の箸

口喧嘩したのに電話かけてくる

大阪市 小 糸 昭 子

米食はずサブリメントが売れている

友情に胡椒少々かけ過ぎた

選挙戦万歳の後逮捕され

携帯が段々簡素化されていく

日本列島日の出の時差が一時間

大阪市 星 野 きらり

明日という日がわたくしを待っている

残された命は過去のごほうびか

今はもう自分だましの余生です

人間はひとりと悟る今更に

参道も行きはよいよい帰りは恐い

大阪市 熊 代 菜 月

急ぎ足金木犀がひきとめる

小さな手振ってしつかり自己主張

折鶴が元気をくれる枕元

行きかえば知らぬ同士の明日になる

喜寿傘寿はちばち行こかあと少し

大阪市 板 東 倫 子

モンゴルに守ってもらう相撲道

阪神が負けて食卓弾まない

父の日へ旬のお酒と旬の菜

元氣だが猫背になつてゐる写真

日々苦悩幸せそうでない社長

大阪市 福 岡 末 吉

歳重ね厳しく優し師を慕う

音沙汰のなくて安らぐ親縁者

彩りを楽しみやおら箸洗い

末永くペットでいたい妻の許

カツカレー味は二の次父の作

大阪市 岩 崎 公 誠

ニッポンの男に欲しい向こう意氣

自慢より先に反省して欲しい

終盤にやつと真実見えてきた

ゴミ捨てで出会う男と喋らない

百歳の通夜に安堵の声も洩れ

大阪市 西川 更紗

意け癖シンドロームが進んでる
掴んでもするりと逃げる福の神
母がいるただそれだけで座が和み
そこそこの演技で今日も切り抜ける
風薫る鎖骨美人のボニーテール

大阪市 川原 章久

ストレスを繁昌亭へ捨てに行く
談合の話聞いてる茶のボトル
ひとり居の孤独紛らす猫二匹
猫までが横で気を揉む長電話
ウインドのゼロ間違った老眼鏡

大阪市 清水 絹子

長寿国の老いに医療費脅かす
自問自答年年頑固古い確か
エンゲルだけ独り自慢の路地暮し
温暖化微細も外すコンセント
自給自足おーい茶でもハイハイと

大阪市 神夏磯 典子

風の海自分が小さくなってくる
今日だけを咲く夕顔に教えられ
不安感激しい雨に救われる
きつちりと妻が見ている明細書
苦しさを吐き出したのに聞いてくれ

大阪市 津村 志華子

思い出もたんと綴じてる朱印帖
仏滅のタブーなんぞは気にしない
オレオレの無頼も国に母がいる
責任感強い男でやさしくて
コマーシャル命の値踏みする保険

大阪市 川久保 睦子

七人の敵も笑顔のOB会
流星の早さに願い語れない
衣食住足りて人間狂いだす
煩惱を静かに洗う永平寺
どない道変えてもやっぱり鬼と逢う

大阪市 小谷 集一

知らんなら知らんと言えは楽になる
火種まだ少し残っている日記
大阪が好きでたこ焼き食べ歩き
順調が続き心の箍ゆるむ
鈍感力磨き悟りに近くなる

大阪市 川端 一步

限りあるいのちだ恋のサスペンス
彬のこと書けば元氣の出るペンだ
梅雨入りで四国も虹が見えそうだ
酷税にわが家の刺身薄くなる
ああ年金ゴミと一緒にされていた

大阪市 鶴田遠野

大阪市 井丸昌紀

七夕が語り継いでる永遠の恋
格差社会中流意識失せていき

集中力衰えている休肝日

お産難民国の無策にはっとかれ

早朝はパジャマに服を着て散歩

大阪市 奥村五月

夕張と内の家計簿同じ道

税金が冷えたビールをまだ冷やす

小島から夢のでっかい子が巣立つ

お開きで幹事が変わる三次会

五合で聞かぬ事まで喋りだす

大阪市 大川桃花

まだ運がありそうバスがちょうど来る

じゃんけんの癖見抜かれて鬼ばかり

怒ってるらしい間のある生返事

酔い方もちよつと気取ってナポレオン

人の倍動いたような玉の汗

大阪市 升成好

受け売りの知恵に応用編がない

旗色が悪いと急に失語症

一つや二つ妻にも言えぬことがある

仲直り僕が損してけりがつき

適量をいつでも一寸だけ越える

別腹でじわじわ増えてゆく目方
遠い目ではいいはいといなされる

宝くじ当たり奈落に落ちた友

たった今見てきたように嘘をつき

泣き顔を笑顔に変えるのはお金

大阪市 中村れんげ

鬼になり仏にもなり子と生きる

手を合わせ拝む笑顔の如来さま

煩惱が嘘もまじえて世を渡る

一杯のコーヒーマシーを確かめる

自分史のタブーはそつとほほかむり

大阪市 榎本舞夢

美しい声ひびかせて森の朝

電話詐欺お年寄から狙われる

夢つかむ掌誰も持っている

酔わされて同意しまして今夫婦

価値観の違う絆は切り捨てる

大阪市 榎本日の出

一日を無駄に過ごして癒される

空気でもこんな汚れと換気扇

いい嫁で鬼の出番が見つからず

お薬が好きで病が逃げられず

無理に聞き心配ごとを増やしてる

大阪市 古今堂 蕉子

考えてるだけじゃ救いの手にならぬ

癖のある人の考え分りよい

ぐーの手に個性を握りしめ生れ

介護保険不正に巢食うお前もか

成果主義トツプいつかは頭下げ

大阪市 谷口 義

雨の日は少し湿っているお金

鉛筆で書いてあるから冗談だ

毎日がぶつつけ本番だと思ふ

お茶漬で流せる話なら聞こう

立読みの知識程度のお付合い

大阪市 前 たもつ

雀郎が生きて一本筋通す(日川協日光)

新緑に五体も解けるいろは坂

華厳ノ滝中禪寺湖のある限り

再会へポーズ変らぬ眠り猫

日光で見る新聞も虎が負け

大阪市 野田 栄呼

後続に譲り続けるマイペース

雹の刃に畠の野菜丸裸

洗剤で落ちない汚れ心にも

存在の大きさを知る妻の留守

直線の言葉控えて嫁姑

和泉市 西岡 洛醉

初対面年嵩同士馬が合い

長生きの秘訣に合うた腹八分

十指皆無駄無い今日が欲しい僕

八十歳保険満期の元氣さよ

微笑みの温い空気に仲直り

和泉市 横山 捷也

スポットライトあびても本心明かされぬ

冗談で釘を一本さしておく

ふるさとは疎遠永代供養の墓

大ふろしきたたむチャンスを見失う

口八丁手八丁で生き残る

泉佐野市 山本 蛙城

君見給え蝶もトンボも減っている

句のネタを絶やさず政治忙しや

美しい国で飴よりムチの音

白内障手術後美人ばかり見え

やはりそう見えたか席を譲られて

池田市 栗田 久子

戦争を語れぬ者の原爆忌

送り火がこたえてくれた千の風

入道雲空の青さを押し上げる

定刻を越えてはじける盆踊り

養生訓すでに十分生きながら

茨木市 藤井正雄

交野市 森本弘風

おぼろ月テラスの妻に呼び出され

駐車場線引くだけでよく儲け

行き先が余程嬉しいネックレス

言うてみるもんだ冗談からの駒

美容院浅い眠りの蝶となる

大阪狭山市 矢野 梓

一点の重さ怖さよ延長戦

止まらない老化スピード加速中

気持良く疲れ一気に朝が来る

あつさりと許す言葉を探してる

エコライフ土鍋で煮炊きしています

交野市 田岡九好

ほかのこと聞いてくれている問診票

中吊りで大体わかる週刊誌

風邪引きも起承転結ありにけり

ちゃんとやれ再発防止言う前に

五月雨や定位置につくタイガース

交野市 山川日出子

宝もの今も元気な古時計

パンバンザイまいど一号宇宙まで

小さい手としわの手遊ぶ指人形

代々の僧を知ってる五葉松

民謡を友に爺さん畑仕事

父の日に息子の焼酎待っている

ジープが乙女のはじらい奪い取る

特売のキュウリで今夜も胡瓜もみ

飲み放題元は取れよとむごい鞭

ヘルメット被った僕は違う僕

河内長野市 坂上淳司

熟年のおばちゃんツアー給が好き

給よりもおまけ欲しくて買うグリコ

クールビズ余計に締らない閣議

超ビキニ脱いだも同じようなもの

引退のデイブ堂々たる種牡馬

河内長野市 村上直樹

時代からすこし跳んだらもう奇才

先案じしては肩の荷ふやしてる

妻の秘書年金つきの何でも屋

腹振る寄席でこころのリフレッシュ

自己流も磨けば味のある色紙

河内長野市 水谷正子

制服を脱いだ乙女の長い脚

こだわりを脱いで余生が軽くなる

若葉風生きてる証心地よい

卒業校律儀振り込み票が来る

謝罪するお辞儀はて今日何でした

河内長野市 井上喜醉

初夏に舞う可憐な姿花菖蒲

ネットなら広い世界を覗き込め

携帯が便利で手帳見捨てられ

顔背け挨拶なしのすれ違い

老兵が見守り隊で派手なシャツ

河内長野市 植村喜代

樋の中雀もう何代目かな

真っすぐに伸びる竹にも節がある

わが娘にしてわが娘にあらず嫁に出し

ちよつと目を変え庭の草取る五月晴れ

寝て疲れ起きて疲れてとしやろうか

岸和田市 堤 檜代

一病があるので他人を思いやる

人はみな歳より若い言うてくれ

ぬか漬のなすびを割って食べる幸

いつの世も悪代官は絶えぬもの

こま切れの眠りで元氣もらつてる

岸和田市 原 さよ子

孫や嫁に老いかばわれて見る玄武

玄武見る長蛇の列の三時間

褒められた手相へ夢が伸びていく

一丁の豆腐が余る老い二人

まじないをばあちゃんたと知っている

岸和田市 雪本珠子

休日には猫と時間を分かち合う

本当は淋しい老いの瘦せ我慢

歳月が尖った心丸くする

ご時世か日本の色が変わりだす

釣れずとも海のオゾンを吸っている

岸和田市 森元ふみよ

薪能幽玄世界京の宵

贅沢な夫婦喧嘩の味忘れ

老いひとり呑気にこの世謳歌して

白寿婆カローリ一気にして笑わせる

半世紀前に習った草鞋編み

岸和田市 土橋房枝

新緑に力をもらうウオーキング

記念日も夫婦の価値観ずれたまま

金婚で似た者夫婦出来上り

人退化ロボット進化近未来

爽やかな王子二人に癒やされる

岸和田市 井伊東吉

会合の名を借り遊ぶおひま族

関心が賞味期限に向く季節

シーサイドスタイル風のギャルパンツ

あきらめる月が近づくタイガース

仏滅の割安拳式人気あり

堺市 齋藤 さくら

誇るもの何もないので笑つとく

一度でも年金貰うまで死ぬ

胃の痛み押さえてくれる子の電話

あの時のご恩がいつも底にある

どん底を知ってる人だ味がある

堺市 矢倉 五月

バイキング残さぬほどが難しい

離婚劇指輪はどこへ行くのやら

安く買いつぐに値段を言いたがる

自家菜園わたくしなりに農繁期

体調が良ければ愚痴も少のなり

堺市 加島 由一

赤ちゃんはいいねと祖母の独り言

思い出し笑い母さん帯を解く

携帯が今どこにいる誰という

自己主張せぬとミルクも貰えない

失恋の数は妻にも言つてない

四條畷市 吉岡 修

石ひとつ枯れ山水の主役たり

男くささ栓ひねつたら溢れでた

過去ばかり良いと言うから嫌われる

ふと見るとあの人もふとこっち見た

五年いて東男になれぬまま

吹田市 山本 希久子

新緑のみちのくは佳し日本晴(みちのく旅)

まな裏にねぶた耳底津軽三味

八月の雲幸せは掴むもの

年金の自転車キコキコ漕いでいる

手術成功お月様にも手を合わす

吹田市 太田 昭

昭和史を繙く八月の亀裂

八月忌父は無残なきりぎりす

父の最期母を呼んだと信じたい

巣立つ子にもう赤紙を来させない

箸を割り森の哀しい声を聞く

吹田市 木下 敏子

大好きなひとと一所に老いゆくか

人の世話できる間の今が花

新緑の森でやさしくなった蝶

着飾って見てもやっぱり馴れた靴

梅漬けてやっぱり母の塩加減

吹田市 穴 吹 尚士

胸に手を当ててご覧と睨む妻

プラトニックな浮気に妻の起訴猶予

善人の仮面を脱いで汗を拭く

前科にはならないほどの罪重ね

どん底の声は無視した多数決

吹田市 野下之男

強行は癖になりますオボッチャマ

この次は誰になるのか王子様

黒幕が居るからこの世面白

温めてた言葉素直に出て来ない

案なんて知るはずがない蟻の列

吹田市 須磨活恵

毒少し旨みに替えて生きている

ちよつとした事が気になり寝つかれず

ひとりずつ去って散りぢり縄電車

不器用な生きざま晒す影法師

まだロマン追いかけている影法師

吹田市 大谷篤子

お静かにわたしただ今二日酔い

頬杖で娘のような夢に酔い

笑い皺ふやした顔がいとしくて

最後まで悔い残るので手は抜けぬ

ゴメンネのあの一言に礼を言う

吹田市 瀬戸まさよ

大陸の黄砂手すりに腰下ろす

あの人の地方語実は丁寧語

白髪を薄紫にして毅然

国産のシール確かめ買う疲れ

多数決イコール民主主義ですか

吹田市 早川清生

日本撃つむかし原爆いまファンド

八月は米ソも詫びる罪がある

石見神楽神さま石見弁である(旅で2句)

神の棲む石見に銀といひ湯湧く

ICU小説のネタたんを見る

高石市 浅野房子

バラ園でバラ好きだった人思う

れんげ草長らくお目にかからない

他人様の短所ばかりが気になる日

何事も思い通りにならぬああ

冗談に出来ぬ水にも流されぬ

高槻市 大崎侑子

巣離れの出来ぬ甘えのニート族

空巢などと笑った隣またやられ

褒められて言うべき苦情言いそびれ

胸の中分らないから付き合える

来年もお出でと願う燕の巣

高槻市 傍島克治

柳腰に見る大正ロマン夢二の絵

高望みしすぎてお呼びかからない

魔術師も妻の眼力誤魔化せぬ

天気予報外れて喜ぶこともあり

親馬鹿が今爺馬鹿になっている

高槻市 生田 義一

高槻市 執行 稲子

五月晴れ粹なばあちゃんサングラス

山散歩猿が三匹お出迎え

永田劇次から次へ種つきず

実力が人気尻目に交流戦

真実を話そう波乱覚悟して

高槻市 峯村 勲弘

苗床の茄子も胡瓜も似た二葉

下校する子等に目配り散歩道

クールビズファッション競う議員席

年なりに元気ですねと聴診器

生かされていると思えば悔いはない

高槻市 瀧本 きよし

天国の陽気いつでも春うらら

薫風が吹くと誘いに来る陽気

青い空消すように湧く雲の峰

澄んだ空仰ぎ心の機嫌聞く

見せかけはしつくり陰で揉めてます

高槻市 左右田 泰雄

腰にひびくから動かさぬ植木鉢

うたた寝の夢をこわしたドアチャイム

テレパシー夢見が当たることもある

世界地図知らない国がたんとある

忘れぬあの牛乳の絞りたて

寝過ぎてはそのまま起きぬかも知れぬ

ヘヤーカラーしつくりいかぬ曇り空

飼い主の車近づくと耳を立て

チューリップ新入生の顔をして

ゆつくりの歩幅大好きマイペース

高槻市 指宿 千枝子

リフレッシュ若葉青葉の電波浴び

ばあさんに老人力という電波

説明書分かるように書いてない

ベースボール少し分かって面白し

ふるさとの駅へと続くこの線路

高槻市 佐甲 昭二

手の中に切り札をまだ残してる

風の中チャンスの逃げる音を聞く

逢えばすぐ愚痴をこぼせる友がいる

逃げ道を覚えて揺れる志

盃が腹を探りに寄ってくる

高槻市 乙倉 武史

八月の海を埋めよう鎮魂歌

金属も人並み過労死もするよ

事故多発心のネジを締め直せ

責任を取らぬけじめのない社会

社保庁の怠慢年金体たらく

高槻市 富田 美義

自問自答やさしい答え求めてる

季語の無い野菜を食べて生きている

臥す妻に煮豆の焦げをつつかれる

平坦な人と思えぬ手の温み

もぎ立てを朝の笑顔に盛って出す

高槻市 杉本 義昭

勘狂うほどの美人に道聞かれ

感動を十七文字にちりばめる

難問のパズルが解けて雨上がる

退き際を心得ている咳一つ

押さないで引いてごらんと母の声

高槻市 井上 照子

子のために時には鬼に化けている

ブラウスが一枚買える犬の服

コンパクト笑顔で閉じたバスの中

生きる苦を結婚のあとと思ひ知る

華やかなスタートだけに落ちられぬ

豊中市 藤井 則彦

青年のような背筋とところざし(田中正坊さんを偲ぶ)

音読が終ると弾む朝ご飯

カルチャーから作家へ巣立つ白昼夢

電源のONに気付かぬ忍び逢い

パリ帰りの機内で啜るカップ麺

豊中市 山門 タミ

ハウスには匂を知らない野菜たち

緑の葉どんな花にも似合う服

我が娘でも老いたら世話になる遠慮

横綱を倒した力士また外人

ああ痛い我が足腰にトゲがある

豊中市 安藤 寿美子

雨上るどこぞに虹は出てへんか

電車今京都の雨の中へ入る

独酌も独吟も良し夜の雨

旅の雨あわててバスへ走りこむ

草むしりアゴアシ付きで孫雇う

豊中市 吉田 あずき

電化製品次々老いて来るわが家

金儲けの心で出来ぬ介護法

裏切られ続けて見えてくる真理

どの毒も女に免疫性がある

車窓から駅名を読む旅楽し

豊中市 江見 見清

出産日爺にも役目割り振られ

新生児皆に似ていることになり

訊いてから電子辞書見て確かめる

学び舎で遊びニートとなる巣立ち

吃水をなかなか越せぬ恋であり

豊中市 坂上高栄

富田林市 中井アキ

世が進むはしか年齢高くなり
梅雨らしくない五月晴れ海開き

週五日学力低下と言うおつり

スケジュール陛下お疲れ出ませぬよう

水に浮く一円ほどの我が余命

豊中市 岸田知香子

家系図の変体仮名を解説す

家系図を開けて今更祖先知る

こうなれば店と心中覚悟する

苛立ちを知って知らずかマイペース

ガラクタはみんな捨てろと娘が指図

富田林市 大橋鐘造

順風の男に欠ける思いやり

メールには無いときめきの封を切る

花束を贈る妬心を抱きながら

その先が見たくて時計進ませる

永眠へ独り芝居の幕おろす

富田林市 片岡智恵子

しっかりと老いと死を子に見せましよう

遊歩道あるけば染まるヤマツツジ

価値観の違いで消えていった夢

来世もあなたが良いとおどかされ

百年後でも笑えそう寛美のビデオ

ストレスを溜め込んでいるおちよぼぐち
同じ目の高さを嫌うお役人

亡きひとの愛した松も老いてきた

回廊でいとしい影とすれ違う

赤ちゃんの肌には勝てぬ美白液

羽曳野市 吉川寿美

何となく明日を信じて傘を干す

落しぶた古い話が煮えつまる

巻き戻しきかぬ人生古テープ

烏カア雀チユンチユン凡な辛

満開の娘が父の目に眩し

羽曳野市 安芸田泰子

万歳の顔に満足溢れてる

ゲーム機と一緒に孫の里帰り

腹ばって畳うれしい旅帰り

十本の指それぞれに持つ任務

ジェラシーの握手が混じるクラス会

羽曳野市 酒井一壺

人間になりたくないと言いが言

うきうきの時は足もと見えてない

無事育つまでは母親鬼になり

因習を断ち切る嫁で期待する

リストラへ啖呵を切って退社する

阪南市 森村美花

東大阪市 安永春

車椅子押して夫の目がきれい
ほっとする目覚めに聞いた雨の音

けったいな国庶民ばかりいじめはる

新玉の甘味を知っている醤油

風呂の中正座の練習しています

東大阪市 米田水昇

運命の糸は細いが続いている

大物も刑務所行きとなるあわれ

点と線結ぶ絆は確かです

人生の旅は晴れたり曇ったり

夫婦旅最後となった風の盆

東大阪市 笠井欣子

アジサイのショー美しい散歩道

句報読みあなたこなたの顔浮ぶ

受診待つモノの睡蓮かかる部屋

梅漬けて母の昔を子に語る

過去形も乾杯好きになりました

東大阪市 中岡妙

座らねば友の遺影と向き合えぬ

影法師まだふる里に置いてある

メールでは私の思い届かない

若者の勢い風を巻き起こす

十年日記さあ頑張るぞ未来たち

五月雨に舞妓が急ぐ蛇の目傘

れんげ草すみれたんぼほどれも好き

改札でエレベーターはどこですか

野菜市立ってにぎわう道の駅

雨上り蝶々もつれ合いながら

東大阪市 北村賢子

役人のための年金払ってる

雲切れて一つの星に救われる

しわしわの笑顔に生きて来た誇り

人の波間にゆられ揺られて生きている

悩み事沢山抱え太ってる

東大阪市 佐々木満作

不知火の型美しく土俵入り

繁昌亭笑い転げて涙する

喫煙者罪悪感を負わされる

許せない管理杜撰な社保庁め

赤信号あと一秒が待ち切れず

枚方市 丹後屋肇

鶯に招かれて踏むけものみち

雪溪に冠り直しの夏帽子

祝勝会名馬が雑草食んでいる

トンネル抜けて放列の竿に遇う

高齢のジャズをニートが囃し立て

枚方市 伊達郁夫

藤井寺市 若松雅枝

聞き流すだけなら耳をお貸しする
雑草と髭が伸びてゐる病床

愛情を苦言に形変える妻

足音が今日の成果を伝えてる

ケイタイが飯は要らぬと詫びている

枚方市 寺川弘一

ツーカーのはずの女房がついて来ぬ

この家の値踏みなどして雨宿り

トイレの中で人生をよく考える

じゃんけんでまだ逆転を信じてる

命百態生さざまもいろいろあるさ

枚方市 海老池洋

短くなつた鉛筆思う定年日

乱調になりたい時も水車

古刹にもガードマンめく仁王様

集合離散人間なんてそんなもの

今だから笑つて言えるとんだミス

枚方市 二宮山久

幸せは妻とこいでる夢の舟

ほら夏が来るぞと田植ガマガエル

梅雨なのにかえるが鳴かず田植おえ

父の日へ孫から届く電話ベル

梅雨入りへ心も体も衣がえ

姉妹が五人揃つて古希を過ぎ
出先から妻がメールで指図する

銭勘定だけは今でも確かです

ダイエツトすれば着れるとまた仕舞う

タレントの世界旅行を地図で追う

藤井寺市 中島志洋

巡り合い切れてなかつた赤い糸

たつぷりと流した汗が実を結ぶ

金魚すくい子より父親意地になり

盆おどり噂の二人輪を抜ける

気配りのお絞り嬉し玉の汗

藤井寺市 鈴木いさお

サマージャンボ妻もこっそり買つていた

そんなはずないと血圧計叩く

そこまでは覚悟してない妻の乱

困つたヒト科だと地球のつぶやき

世の中で一番好きなのは自分

藤井寺市 太田扶美代

悠悠自適寝不足の日がつづく

ポマードの匂いを不意に思い出す

奥様の杖でなければ歩かない

古代展御先祖らしき人が居た

株分けができた順から嫁がせる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ちよっと運悪かったねと氣遣われ
夏草の匂いにしゃんとするからだ
無口だと自分で言うている本音
本当の顔が映った窓ガラス
捨てようとするとき動いている時計

寝屋川市 江口 度

柱見ると片足あげてみたくなる
幽霊の真似して相手困らせる
でたらめな答と思う時もある
相撲だけにちょんまげ受け継がれ
禿げないように頭両手で押さえて寝る

寝屋川市 平松 かすみ

議定書を守らぬ国を叩かねば
少子化を願いたいのは野良の猫
お野菜を植えて朝夕にらめっこ
チンブイ直してほしい五十肩
朝刊の倍の重さで来るチラシ

寝屋川市 太田 とし子

両手つき負けてなるかと蛙鳴く
小抽出し捨てよか置こか貝ボタン
母の形見つづく私の呂ちりめん
焼香の煙貰ったお裾分け
パントマイム話がほしい赤ワイン

寝屋川市 森 茜

夕ぐれの淋しさに添う背後霊
ケセラセラわたくしごとが洩れている
腹まわりキューピーさんは許される
約束は胸に誓っておくことに
向き合って雲とぼつかり浮いている

寝屋川市 富山 ルイ子

行き先がすぐに決まった満期金
何時までも神経痛と仲が良い
一人つていいなあ好きな事が出来
この土にさずかる無農薬野菜
初成りの胡瓜をさつそくにサラダ

箕面市 出口 セツ子

心配をうつとうしが子の子の自立
甲斐性無い親で心でわびている
金が無いと言えずに電話切る息子
しんどいと言わずがんばる子が不安
次男だけ覚えてくれた誕生日

箕面市 広島 巴子

くちなしの香りが誘うティータイム
ヴェネツィアのグラスに浮かぶゴンドラよ
ミイラ展包帯の染み気にかかる
窓越しの雨に打たれて座禅組む
久し振りの子の夢何かあったかな

守口市 井上桂作

豊かさの中でいつしか孤独生む

憲法の改正やがて現実に

生命を育む地球お大事に

国守る自前の規範考えよ

街の中監視カメラの蛇の目に

八尾市 村上ミツ子

いまいちの料理おいしいねと食べる

車間距離保つ努力はしています

艶っぽい話へみんな寄ってくる

見たいドラマいつも途中で眠くなる

次の世もきつとあなたの妻になる

八尾市 宮崎シマ子

虹までは遠いだろうなシャボン玉

情け受けるたび書き変える遺言書

貴方の背のハート見つめて従いてゆく

名所には草餅を売る店がある

やせるなんてみみっちいことやめとこう

八尾市 山本宏至

結ばれぬドラマが好きなお母さん

ハンドルを握るとこわい鬼になる

背伸びして悪事に染まる青い麦

いい嫁を連れて帰った子の自慢

お節介人の痛みに触れたがる

八尾市 高杉千歩

懐しい船場ことばと繁昌亭

今にして思えばみんな思いやり

中元の手配義理には草臥れる

あと一つ正念場あり老いすすむ

存分に生きたと思う絵具皿

八尾市 生嶋ますみ

まんまるい顔で帽子が似合わない

みのもんた見ながら昼寝深くなる

仏壇へ聞こえるように愚痴こぼす

喜寿過ぎてもうかぶらない鬼の面

物思いアスパラガスを茹ですぎた

八尾市 吉村一風

今日も一日幸せでしたありがとう

あじさいの誘う散歩で深呼吸

キヌサヤともやしのひげは僕がとる

友からの電話くすりを忘れなや

ようしゃべるコンニャクの鍋いい香り

八尾市 長谷川春蘭

生きてまた一つ節目の苗木市

大切に山吹咲かせ露地住まい

シャボン玉一つは垣ねこえにけり

存分に桜見し夜のブランデー

タクシーの窓より花見したるのみ

大阪府 桑 田 ゆきの

太鼓腹叩き戦時の飢餓想う
おもむろに茶器手の平に畏まる
談合で太った腹を叩かれる
風上に立てぬ器が飛ばす野次
内視鏡心の傷は探れない

大阪府 澤 田 和 重

正直がすぎて波乱の種を生む
母さんが軸で平和な我が家です
危機感を募らす妻の丁寧語
損をした話は聞かぬ母の耳
葉桜の下で出直し考える

大阪府 前 田 ゆ い

捨てられた猫にも運がつき纏う
子供にも運のある無し母の情
世の中は運よと初老ボツリ言い
才能を乗り越え努力実を結ぶ
戦争で散った運命忘れない

大阪府 初 山 隆 盛

なにわから変えるお江戸の独り勝ち
七彩の雨と契ったあじさい忌
交流の戦に目立つよその花
読む本が積んどくだけの本になる
浴槽に九連敗のラジオ鳴る

神戸市 山 口 美 穂

震災の傷不揃いの器にも
考えて一寸押さえてするくしゃみ
同窓会十五に返る古稀の顔
ありがとという御意見と言ったまま
病院へ行きますという薄い紅

神戸市 山 口 光 久

午後六時働き蟻が豹変す
酒一合ふわりふわりと小宇宙
スナックは猫撫で声で出迎える
当てにされぬ鉄砲玉は気楽です
馬の脚を必死で演じ盛り上げる

神戸市 岡 川 無 限

遅咲きの分だけ運を溜めている
物のない頃は守っていたモラル
いじめなどないと信じていた誤算
葉桜の下で定年後のプラン
古里の風が他人の顔をする

神戸市 伊勢田 毅

胸のすく啖呵を夢できつている
検診後生命線を確認する
はしかでの休講日本平和です
水の味そつとホテルに聞いてみる（ホテルツアーに参加 2句）
人間の多さにホテル疲れてる

神戸市 田中 章子

尼崎市 春城 武庫坊

ぬるま湯は出るタイミング難しい
アバウトに生きてるさして支障なし
スピードを出したいとこで待つボリス
記念日を次々作り夫と飲む
天下り英語の辞書にありません

神戸市 山田 婦美子

針のような父の手もみの一番茶
生命があるよに新茶の輝やいて
習慣で緑茶の香りにほっとする
旅先の至福一服の茶の旨さ
人間の嘘を暴いていく自然

相生市 中塚 礎石

消しゴムは四角のままの原稿紙
平凡な酒がつまみを分かち合う
真っ直ぐに歩いたせいかわッコ引き
休耕田かえる一匹泣いている
戦争の写真セピアになつて消え

芦屋市 黒田 能子

突然の別れに揺れるイヤリング
ポテトサラダの大好きなおじいちゃん
うす味の奥の深さをかみしめる
父さんの無口説得力がある
座布団が人待ち顔に並べられ

八月だ今も夢見る戦地の夜
妻通院ペランダ蝶の番舞う
雨の日は明るさ欲しく花買いに
お地藏も凡夫と同じ眉毛持ち
真つ青な空に溶けゆく老いの夢

尼崎市 春城 年代

酒男の唄は情けを酌むように
よろしきかな軒を連ねた蔵あまた
滅法強い祖父のお酒の流れ酌み
伏見の酒は春夏秋冬女酒
酒粕の匂うふるさと風鱈える

尼崎市 田辺 鹿太

粗茶ですと出されたお茶の旨いこと
人間に忘れるという得手勝手
八十路来て山が恋しい山男
水ガメの心配をする炎天下
参ったな右も左もカタカナ語

尼崎市 長浜 美籠

今日の日を描くと弾む四分音符
それぞれの本性が出る酒の酔い
一日がこんなに重い 傘たたむ
ナイショ内緒の話ありますお月さま
多すぎる効能書に抱く不安

尼崎市 軸丸勝巳

三田市 北野哲男

市民大学落第重ねまた入る

平積みをぐるり眺めて出る本屋

図書館に人間模様見る寝息

賞味期限切れた五体が弱音吐く

鉢の花合格ですと蝶がくる

伊丹市 山崎君子

茜雲何処に平和があるだろう

ありがとう娘のひと言が嬉しくて

朝ドラに辛抱強さ教えられ

早慶戦亡夫と歌う応援歌

今日届く手もみの新茶里憶う

川西市 西内朋月

荒れるより少しはましな泣き上戸

笑ってもボツンと目立つ泣き黒子

泣き笑いの長い旅路をぼつぼつと

水槽に閉じ込められた回遊魚

体力の衰えを知る模様替え

川西市 米原雪子

高度成長もつたいないを忘れさせ

山ほどの仕事こなせた頃想う

移り行く世相の格差見るテレビ

決断を促されてはなお迷う

梅雨入りを心待ちして見る予報

漬物の賞味期限が短かすぎ

家系図の記録を破り母白寿

カルチャーの若者頭六十二

逆縁に花何百が何になる

景色など無縁のジェットコースター

三田市 久保田千代

髪切って五月の風の軽さ知る

子が育つ私も育てられていた

お節介人の余命を数えてる

夕焼けへ母さんと手をつなぎたい

裏切りのひどさ女も爪を研ぐ

三田市 石原歳子

この通り元気ですよと力瘤

誰もみな白髪が増えた七回忌

亡き父の所作を真似して偲んでる

掃除機に吸い込まれてたイヤリング

嫌われる煙草と仲の良い夫

西宮市 牧 渕 富喜子

目を閉じて国会中継聞いている

花に水しばし無心にしてくれる

九十歳なおはにかみの笑みを持つ

はさみ震えてキリトリ線が笑い出す

逆縁の友への手紙書けずいる

西宮市 西口 いわゑ

蚕とや神の使いか絹を吐く
思わずも声高になる負けている
父の日もばらとケーキで来てくれる
鏡の中の女の欲は果てしない
煩惱は束ねてもまだ余るほど

西宮市 山本 義子

気づいたらもう遅いです地球燃ゆ
広い日本湧き水とカラカラのダム
盆踊りいまに一揆になりますよ
百貨店とスーパーでする避暑気分
百日紅きみを女神と信じてる

西宮市 秋元 てる

慌て者の息子は老母を置いて逝く
思い切り泣けよと亡母の声で覚め
そのうちにやあーと帰って来そうな子
生き残るまだ役割が済まぬから
乗降口多くなじめぬ都会の駅

西宮市 亀岡 哲子

三代代笑い弾けるサクラランボ
百均で傘買うて出る俄雨
子の描く僕の似顔が父に似る
太陽が地球照らしている希望
夭逝の弟に仕種まで似る子

西宮市 坪井 孝一

美しくないと言うのかこの日本
跳ぶための翼一対持っている
窓際で向き合う友と仲良しに
父叱る加減の拳よく効いた
おふくろには歳を忘れて子に返る

西宮市 緒方 美津子

電車きて小走りならばまだできる
丸文字もくせ字もよろしラブレター
さすが夏場所館内が白い
地球を喜ばせたくて木を植える
この一年投句が出来た生きていた

西宮市 井上 松煙

連れ舞いの紋白蝶を飽かずみる
初夏の風バイタリティーに満ちあふれ
お隣と分け合っている蘭の株
青春の跡形もない麻雀屋
星からの電波で神話届けられ

西宮市 菊池 トミエ

紫陽花の藍にゆだねるもの多く
今日も良い日であるように朝を掃く
旅番組見では行きたい虫が出る
水無月という名に惹かれ和菓子買う
ほどほどの幸せ思うメロンパン

西宮市 片山 忠

老人会ハメ外しても知れている
途中下車まだまだロマン欲しいから
浮気さす妻も悪いと言う細木
化けの皮はいでそれから好きになる
敬遠がだるい試合にしてしまう

姫路市 古川 奮 水

桜鯛瀬戸の湾処は汐の風
たこ焼とビールふハアふハア仲が良い
旅日記酒の旨さへ友誘う
五月病野太くなつて新芽出す
曇天が幸い生垣手入れする

兵庫県 大谷 幸次郎

梅雨空を待つ紫陽花にかたつむり
心待ちすれば遠のく梅雨の入り
梅雨が来て傘欲しくなるトマト達
ころころと仔犬ひとりで戯れる
ドライアイ初夏の日差しが眩し過ぎ

鳥取市 植田 一 京

前月分

絵手紙を貰って嬉し初夏の風
直球を投げて失敗ばかりする
窓少し開ければ違う風も吹き
一步二歩引けば何でも無い話
神仏に祈り開運待っている

第57回富田林川柳大会

と き 9月22日(土) 12時30分開場
(昼食は済ませてお越しください。)

ところ 富田林中央公民館2Fホール
TEL 0721-24-3333
(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ約200m)

宿 題 「美」 小野紅紫朗 選
「毘」 岩佐ダン吉 選
「放」 高田美代子 選
「間」 福田 秋雄 選
「対」 土田 欣之 選
「柵」 池 森子 選

しめきり 午後1時30分(各題2句)
かいひ 1,500円(作品集、お茶)
賞 特選賞

懇親会 4,000円(当日受付)
問合せ 池森子 TEL(FAX)0721-25-0603
主 催 富柳会 (川柳とんだばやし)
後 援 富田林川柳協会

第21回堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月8日(土) 12時30分開場
ところ 堺市立梅文化会館3階第1講座室
堺市南区桃山台2丁2番1号
TEL 072-2296-0015
(泉北高速鉄道・とが美木多駅3分)

おはなし「川柳あの手この手」河内 天笑
宿題と選者「ひとり」 河内 月子 選
(50音順)「分ける」 久保田元紀 選
「削る」 墨 作二郎 選
「タイム」 住田英比古 選
「はずれる」 高田美代子 選
「童謡」 長江 時子 選
「空き家」 中田たつお 選

席題なし、各題2句、締切13時
当日出句締切 午前11時半

出句料 1,000円(作品集、参加賞呈)
賞 各題秀句に呈賞
主 催 堺市文化団体連絡協議会
後 援 堺市・堺市文化振興財団
連絡先 堺川柳協会

〒593-8305堺市西区堀上緑町2丁16-3
河内天笑方 TEL・FAX 072-278-4706

川柳塔の

川柳讃歌

③2

木津川

計

一村の品位を守る大樫

居谷 真理子

「一村の品位」がいい。なべて品位は財力のありなしではない。下司な大金持ちのなんと多いことか。人間の品位、即ち、人格は畢竟、教養のありなしに尽きる。また、都市の品位、つまり、都市格は文化の在不在と深くかわっている、と憚りながら『上方芸能』で僕は四十年来主張してきた。

「一村の品位」は、人間の教養、都市の文化としての「大樫」で守られ、高められていく。大樫とその風景を守らねばならない。

末席の美学だ背骨まっ直に

高橋 宏臣

「末席の美学」がいい。ある村の品位が振れて横に這う巨木でなく、空に向かう大樫であるように、人間も末席なればこそ背骨をまっ直にしたい。「ご機嫌を伺う」姿勢、「下手に出る」態度、「揉み手で迎える」様子はいずれも背を曲げているのである。

おのずからなる敬意が畏ませるのとは別の、卑屈や下心、追従や迎合とは一線を画したい。「一寸の虫にも五分の魂」があり、「匹夫も志を奪うべからず」の志を失ってはならぬ。

唇のファスナー緩む花の下

木本 朱夏

「唇のファスナー」がいい。言葉の狩人は新鮮な表現の探索者である。「薔薇色の人生」と誰かが言い、「灰色の人生」と誰かが答えて二つの言い方は広がり、使われ過ぎた。「唇のファスナー」は多分「唇にファスナーを」の用例で広がると思える。「物言えば唇寒し秋の風」の芭蕉は、早くにその意味で唇を詠んでいたのだ。「かんにんしてとキッス両手でふせがれる」の路郎は、唇にファスナーをした仲居がいて、参った。

氣付かなくていいよ小さな花だから

安土 理恵

いったい何事が牡丹の如き句の理恵さんに起ったのか、というのも「どうぞ離れて今は一人で歩きたい」とも今号の同人吟に詠んでいるから。これはもう一大決心で大きな花から重ほどな「小さな花」になられたのだ。あまりに小さいから「鼻紙を敷いて坐れば董かな」と一茶が詫びた、その尻に敷かれても「董程な小さな人に生れたし」と漱石は念じ

て利己心の大きさを恥じた。さて理恵さんに願おう。犀星の句のように可憐に「うすくもり都のすみれ咲きにけり」でありますように。

団体で男子トイレへ流れて来

井上 松煙

六、七年前か、京都駅・新幹線ロビーのトイレが大改修された。男性用トイレは変らず、女性用トイレが大拡充された。すでに観光は女性主体になっているのにIRの対応が遅れていたのだ。商業劇場は早く、大阪の新歌舞伎座が一階両側の男性用トイレを全廃、女性用に総改造したのは七〇年代半ばだった。対応の今なお遅れたところはこれからも女性団体の「シー・ジャック事件」に必ず遭う。

発送をもって発表するなんて

三宅 保州

誰かがこの発表のインチキ（と指弾されて抗弁できるか）を叩かねばならなかった。名立たる企業も他人をあざむく昨今である。八百長を取沙汰される横綱もいるのだ。商店街の大売り出し抽せん会もあやしい。特等・現金把み取り一人の紫の玉は、あのガラガラに入っているのか？

発送をもって発表するケチな会社である。誰にも送っていないかも知れない。社長に問う。「梨下に冠を正さず」を知っているのか、と。

（「上方芸能」誌代表）

自選集

奥田 みつ子

雨を待つあじさい何を待つ私
五月雨があじさいの葉でジャンプする
自分の意志で歩ける何と有難い
時は無情 みな思ひ出の人に
旅路なお遠くの人に見守られ

河井 庸佑

反論も謙虚に聞いて生かす知恵
体験を蘇らせて二度の職
子の為と思う苦言は聞いてない
殊更に遠くの神へ頼みごと
スランプへじたばたしない腹を決め

川上 大輪

考えているのは今日のおかずだけ
腕前はレンジでチンをする程度
棘のない薔薇被害者のふりをする
無邪気にも約束ばかりする小指
満開の桜を咲かすパイプ椅子

木村 あきら

戦勝を信じて散った若桜
名所とは悲し原爆資料館（広島）
武蔵 大和 魚礁となって幕下りる
二千年の歴史を閉じたキノコ雲
戦争は御免都市をみな灰にする

小島 蘭幸

一番安いホテルがひとつ空いていた
東照宮の雨に打たれて来たいのち
なるほどなるほど三猿のストラップ
じいちゃんになる心得を読んでおく
美味しいと言ったレトルトかと聞いた

小西 雄々

田植する陛下もお年召し給う
網棚の新聞を読みきらわれる
父の背を越えた河童の荷が重い
神様の心を微分法で解く
ストレスを忘れに来いと縄のれん

小林 由多香

宝くじ一億当たるまでは買う
思春期の心ころころよく変る
柿植えて八年先の夢をみる
太陽が真上だ腹がへつてきた
今日頃はカレーだろうな そうだった

斉藤 嘉

田に水がたつぷり蛙唄い出す
蹠いた小石をそつと温める
道草の子へ忙しいおじ草
人參を持って仔馬に逢いに行く
大根の花の素質は祖母譲り

塩満 敏

羽曳野に高度の温泉湧きました
春になり妻の花園花が咲く
九条を守る運動しています
住みやすい平和な日本早く来い
大阪に鶴彬句碑出来ますよ

新家 完司

声もなく坂を転がる失業者
他人のことなどは構っておれぬ坂
野良犬も元氣なうちは生さられる
飯の世の出口が坂の下にある
夕暮れの川など見つめないように

玉置 重人

ありがたい助言ハードル越えられた
万歩計軽いジャンプを考える
下り坂また二の足を踏んでいる
仕事にも行かずに腹は減ってくる
盃洗の中に沈んでいる野心

恒松 町紅

便利さはいいが人間味が薄れ
穏やかであつて欲しいと通学路
長老にされて遠慮のない歩幅
本人の確認という味気なさ
シャッターをおろし寂れる古い町

津守 柳伸

はれ晴れと道路清掃できる幸
ときどきは逆うことも存在感
衣食住年金もありなんで泣く
頭では充分把握できたのに
汗かかぬつもりこつてり厚化粧

遠山 可住

健康法いろいろ一つが続かない
虫が食う外葉うまいにちがいない
新聞がちゃんと届いて午前五時
小三の孫と肝胆相照らす
お賽銭本氣になった掌を合わせ

都倉 求芽

自殺する弱さ強さもないわたし
話し合い二煎目の茶になるわたし
遠慮した車横が凹んでいる
雨近い夜風夫婦のトーン落ち
この雨に聞けぬ寂しさ樋の音

土橋 螢

人のため世のため生きているいのち
運命は天にまかせて田を植える
後もどりでできない処に座っている
怒ること忘れ笑ってばかりいる
友だちは死んでも俺は生きていた

西出 楓 楽

頼りない奥歯ときどき噛みしめる
残り物集めわたしのアラカルト
目標は平均寿命それでよし
笑えない喜劇演じる昼の月
座右銘いっぱい書いておくところ

仁 部 四 郎

遠来を上座に父の七回忌
空いていた上座に正座する遅刻
酒だけは上座と同じ酒が出る
初めての上座なるほどいい気持ち
上座から膝も崩さず嘘を言う

波多野 五楽庵

慰めの言葉を抱いて病んでいる
あまりにもリアルな人形目を逸らす
冷凍魚おまえも喉が乾くのか
溜息を吐くのはよそう辛いから
男おんな最後に残るのは女

林 瑞 枝

こだわりの枯れ野で探す落暉の絵
ちちははの足跡背筋から消えぬ
赤いルージュ別れもありし花時計
鳥取砂丘歌うとよみがえる青春
歌謡ショーひばりはさすが天才だ

宮 口 笛 生

留守番も出来ない遠い耳となり
人間にかえる晩酌お替りを
御気嫌の晩酌御馳走無いけれど
赤紙は御免九条守らねば
八十八ヶ所大部残してあきらめる

宮 西 弥 生

一歩ずつ進む加齢だから飾る
計算がくずれて余命立て直す
果たしても果たせなくともお布施する
ゆつくりと自然と流れてる絵筆
野も山も光りとんがりから抜ける

森 下 愛 論

気まぐれな恋でスパークしています
けなげにもほほ笑む君がいじらしい
ひとり寝る部屋の広さも忘れてる
した心見え見えお世辞だらだらと
長寿意義あり美酒に文句なし

八十田 洞庵

サボテンのふる里砂の詩がある
星空は宇宙に咲く花母が居る
空よ空ここまで生きた旅カバン
転び傷つけて坂道まだ続く
リングむく男に嘘は言い出せぬ

両 川 洋 々

ロボットのエキ스는人の汗だろう
世が世なら汚職議員よ切腹だ
末期だとカルテが僕に釘を打つ
拉致をした北にモラルが通じない
人間を辞めたくもなる裏切りよ

阿 萬 萬 的

へらず口挟んで立ち場悪くなる
でしゃばりの声雑音として蹴られ
行き当りばったり自信のない老後
曲り角ちよっぴり自信のない背伸び
過去の傷突かれ疲れた顔の皺

板 尾 岳 人

駅前に住んで傘持つひまもなし
風鈴は猫の昼寝に邪魔をせず
缶蹴りの缶を労る露地の奥
旅帰り美味しい蕎麦の店探す
楽車を父に抱かれて観た鎮守

温故知新

足立 春雄

かき氷我が日本の味を持ち
入道雲ボート一つが沖にあり
教授の恋だったばかりに騒がれる

市場没食子

お年齢としだと言われむかつとして帰り
本棚へ衣食削ったのを並べ
もう医者も義理で診に来るだけのこと

奥村 丹治

友達の間では消ゆ雲のごと
死んだ振りして蜘蛛よ淋しがらすな
そもその嘘の初めのゴム乳首

尾崎 方正

ブドウから梨から秋がしのび寄る
無理すなど言われた方が生き残り
悠々と流れる水の恐ろしさ

合同句集「私達」より
昭和三年発行 選者麻生路郎

水煙抄

奥田 みつ子 選

大阪市 原田 すみ子

三角が丸くなるまで撫でてやる

秘め事を無くしてからのノーメイク

線香花火のポトリ私の涙かも

奈良市 乾

春雄

大雨に身の内なにか荒々し
家族の和作り続けた自負がある
六十の春もそこそこ浮かれます
六十歳欲とあきらめ相半ば
六十年自然に出来たわたし色
六十年まだ振り返る時じゃない

札幌市 三浦 強一

人生の流れを変えた句読点
伸びている寿命の先に地図がない
聞き上手忘れ上手で雑魚の群れ

浮き沈み耐えて仏の顔になり

うぬぼれの紙風船がふくらまぬ

風船も男も紐を切りたがる

豊中市 松尾 美智代

昭和史の傷まだ疼く八月忌
酒蔵の試飲うれしいバストアー
個人情報食傷気味のシュレツダー
議論百出して何にも決まらない
鈍彫仏粗あらしくて優しくて
団塊の懷狙う笛太鼓

紀の川市 宇野 幹子

後ろ髪きっぱり切った裁ち鋏

潤滑油切れて友情軋み出す

よそ行きの心に着替え逢いに行く

雨の日はひとり静かに本の虫
晴れた日は主婦は働き蜂になる
曇る日は少し遠くへお買物

狭い世を広くまあるく生きてます

オーロラを見た夜は神を信じます

大阪市 森田明子

今治市 塩路よしみ

身に潜む他人ときどき顔を出す
老残を凜とさらして花菖蒲
必要な荷物だけなら軽いもの
灯を消すと心の内が見えてくる
私にも心に深い闇がある

三田市 阪本藤朗

定年後妻との距離が難しい
腹立ちを今日は一つで済ませます
買い換えたメガネ三日はよく見える
決心は消しゴム付の鉛筆で
拝啓と書いて電話に切り替える

八尾市 松葉君江

生きがいの家族私の太陽に
かむ習慣老化防止の処方箋
人間の土台を作る子の食事
やりたいと思った時がチャンスです
目を閉じる見えない物が見えてくる

日立市 加藤権悟

八月の蛍知覧の母を恋う
絵日記を描いて腕白夏終る
あじさいの花芯裏切るのがうまい
ただいまの顔に書いてるいい結果
天の句にガッツポーズが出てしまい

冷めた目でぼんやり雲の流れ追う
色即是空やすらぎもらう数珠の艶
終章を綴る秀句にまだあえず
介護士の愛の目線に助けられ
真相は誰も知らない髪を切る

和歌山市 たむら あきこ

七十五日を生き抜いてきたうわさ
京の堀優雅な拒否のかたちして
私にエールを送らねばならぬ
ビブラートしながら悶死したさくら
越える越えない渦中の恋がせめぎあう

泉佐野市 稲葉 洋

哭かないでも泣けてくる千の風
雲が湧き若きう甲子園
二人だけ和傘の内の別世界
浄土考愚にもつかない事ですか
食べつぷり主役パパから子に移り

池田市 上嶋 幸雀

猛暑日が梅雨より先に来る不気味
梅雨入りもふたりの宇宙ひとつ傘
父の日にしみじみ亡父の樹の高さ
父の日もただ何となく妻と居る
父の日の電話も鳴らぬままに暮れ

大洲市 花岡順子

笛を吹く母へ逆らったりしない
かつとするから目の前が見えにくい
黙ってるだけでも好きな人と居る
筋書きが少し狂った早合点
平行線のままで好きだと言いそびれ

堺市 大久保伸子

余生という未知の次元へはばたこう
似てほしい所は似ずに子は育ち
一枚の葉書精神安定剤
自衛隊鎧ちらちらのぞかせる
鰯雲恋を忘れてから久し

香南市 桑名孝雄

泣き言はよそう格差はどうせつく
中高の孫へ雑学至福どき
内視鏡とエコー任せの酒の可否
目と耳が八十路の坂で脅えだす
ドスコイドスコイ動と静との青と白

和歌山市 柏原夕胡

思いきり泣いて忘れてしまいたい
忘れられぬあなたを胸に折り畳む
ジャンプしてみてもあなたに届かない
試してはいけないにんげんのころろ
嘘ついたことなどないと言

田辺市 大峠可動

半島の笛は波浪の口笛よ
天は地の戦に飽きてピカソと哭いた
白線を跨いで九条踏み潰す
点線のすきまで生きる不整脈
歳月の裏も表も詩の果て

大阪府 神野千恵子

好きだった赤がこの頃疎ましい
黄砂降るセピア色した近未来
役立っていると感じる丸い風
今日もまたそこそこ生きてしまいい風呂
御茶御花先ずは挨拶から教え

三田市 白井二英

錆びぬよう時々動かすことにする
墓標増えいつまで続くイラクの地
追い打ちをかけずひたすら時を待つ
人間に頓着せずに進む四季
弱肉強食最たるものは人間か

大阪市 三浦千津子

美しく老いる願いを溶く絵皿
生き様と理想図大分かけはなれ
繰り言がひたひた続く雨三日
古里に帰って来いと呼ぶ情け
これからも二人三脚赤い糸
(古里へ移住きめる 2句)

西宮市 藤本 直

西脇市 七反田 順子

万鈞の重み一字も動かせず
一輪で活けた野花は誇らしげ
散る時の風情を愛でる人が好き
母という題のやさしくむつかしく
計画を建ててゐる時が夢のとき

岐阜市 平野 あずま

ノースリーブの腕まぶしい更衣

神風を信じ意外な敗戦忌

相生市 村木 信子

正論へ青い若いと吹矢飛ぶ

箴言を貰う風にもある情け

欲しい時行方不明になる熟語

白足袋のほてりが疼くわだかまり

お寺からカラオケへ行く喜寿の幸

トラブルを避け遠回りする本音

手をなめる仔犬と孤独分かち合う

若返る手だてへ趣味の生き甲斐よ

大阪市 中井 萌

和歌山県 森下 よりこ

気分だけ酔っております下戸の宴

何もかも知って寡黙なお母さん

末席に居てこそ見える舞台裏

鍵かけてつらい思い出しまい込む

ばあちゃんを手玉に取ってしたり顔

青葉風になったとしても弟よ

お昼寝と三食付きの玉の輿

一人ぐらしにラジオ三台置いてある

夫婦居てふた言み言それつきり

茶わん割る確率も減り一人住む

寝屋川市 小嶋 みさと

海南省 小谷 小雪

花菖蒲人の心も活気づく

ひと言が言い出せぬまま帰り道

紫陽花は衣を替えて人誘う

くしゃくしゃの波を静める長電話

華やいだ声も弾んで老い旅行

草若葉素足の夏はやわらかい

個性とは人それぞれに輝いて

車椅子のタイヤに空気入れる朝

喧嘩して仲直りして五十年

イケメンよりおもしろい人がよくもてる

シドニー 三谷 たん吉

馬鹿騒ぎ選挙しり目に旅に出る
選びたい奴も無いのに何が義務
支持率を下げてすっかりタヌキ顔
一票を必死でくれと民主主義
当選し万歳叫びひとだます

シドニー 森本クックバラ

戦果つ民も国土も檻樓にして
戦犯もなるか靖国千の風
九条捨て修羅の巷の再現へ
他人事五千万人棄民とす
調査隊狙うは民の口封じ

香南市 百田 幸

無口だがボツリの言葉射を射る
強がりと言って内心落着かず
寂しさを温めあつて立ちばなし
日々多忙これが生き甲斐かも知れず
主婦稼業もう定年にして欲しい

今治市 渡邊 伊津志

美しい魂宿る木彫仏
私を正確に出す声の質
ため口は不遜親切とは聞けず
生き残る義務ではなくて持つ権利
一番の贅沢それは捨てること

東かがわ市 中塚 寿々女

発言は皆の意見の後にする
流れ星一ツ無病の願い込め
悩み事大師の胸に委ねたい
朗報に胸躍らせて封を切る
試着室ニッコリ笑つて夢をみる

東かがわ市 赤澤 貞月

広辞苑今頃とんと重くなり
娘と同居介護保険は無駄らしい
旨そうなりんご仮歯に問うて食う
さよならと旅立つ抜け毛いとおしく
和筆筒で昏々と寝る親の愛

宇部市 高山 清子

言い訳をしない男の頼り甲斐
迷惑を掛けてへだての無い仲に
諦めていないから行く美容院
終章の序曲始まる物忘れ
野次よりも手ごわい冷めている視線

尾道市 木曾 一徳

田一枚植えて落暉の落し処
田を植えて棚田は義理をはたしをり
田植機の母は静かな音でる
四隅には母の植えたる補植苗
早苗饗は父と息子の諸焼酎

松江市 山根 邦代

友婦郷かわらぬ笑顔連れている

老いたりと笑顔で言える友に会う

目が覚めて嬉しくなれる青い空

大小の靴が並んだうれしい日

お出掛けは風にのつてる爽やかさ

出雲市 荒木 英子

おふくろの味一に上げたいお味噌汁

部屋中が私の色になったよう

淋しいがテレサの歌に満たされる

独り居は脳に活入れ生き延びる

生き延びて年金あつてありがとう

雲南市 福岡 博利

筆とスミわたしの春を支えてる

妻の背中かくロボットをさがしてる

雑音の中に小さい神のこえ

出かけるの声にメガネのカクレンボ

美しい国ハンカチとハニカミと

雲南市 菅田 かつ子

再会の薫る五月の風の中

どくだみの花にストレス癒される

よそ行きの言葉で留守電入れておき

片付けてまた散らかして生きている

待つ人があつてたいやき買つて来る

雲南市 武島 ちよえ

湧き水へ緑滴る中を行く

道問えばカーナビみたいな人でした

予告なく突き離されて強くなり

会いに行くそんな気持で墓の道

私の余白を染める色を選ぶ

安来市 原 煩惱児

つらい過去知らぬ早乙女花田植

鼻歌もはずむころの花田植

五里六里訪ね楽しむ花田植

早乙女をよくぞ揃えた花田植

サミットもすつきり行かぬ温暖化

鳥取市 山岡 紀子

嬉しい日嬉しい酒で二日酔

ふるさとに元氣印の老母がいる

現役で六十路の坂をジャンプする

バツイチへ女の意地を覗かせる

初夏の風遊び心を呼んでいる

鳥取市 山口 千代子

病んでいる老いの肩にも税は来る

正直に貧乏人は税納め

退職後妻の領分わかち合い

ほころびを繕いながら良い夫婦

平凡な暮しが幸と感謝する

倉吉市 酒井 芙美子

米子市 猪森 スミエ

傘寿でも所帯主ですしつかりと

老人の知恵を社会に役立てる

湯気の中のぞいてみたいシルエット

徳などは無いが真面目に生きている

道徳がすたれて寒い世の中に

倉吉市 前田 喜美子

特だねも鈍行で来る過疎の村

ころもがえ去年は何を着てたつけ

炊飯器昔の苦勞思い出す

百までも生きて乗りたい自転車に

本物の東京銀座まだ踏まず

境港市 遠藤 那珂子

コンピニのおにぎり持って小旅行

遣伝子は先祖がくれたプレゼント

遣伝子が今の私を作りあげ

登下校子供を守る旗をふる

なぞ一ツかかえて私ここにいる

境港市 遠藤 トミ子

汁吸えば嫁の心が見えて来る

汁吸って嫁に感謝の朝明ける

午後になり八十路の坂を今日もこす

老いの身は午後になっては明日を待つ

コンピニが出来て都会の仲間入り

島なまり染みたワカメの香り買う

そもその出逢いは寺の月参り

出逢いから六十余年旅つづく

米寿まで歩く確信ゆらぎだす

確信をもつて進めと背を押す

米子市 吉田 陽子

新しい傷が古傷柔らげる

男女平等女も外に敵がいる

わたくしが生きてるそれがサスペンス

よく見れば空に月あり苦笑い

弱り目になって毒ある花好む

鳥取県 橋谷 静江

良い話聞けば一日気分良い

若人の元氣に出合う夏祭り

掴むより逃した魚大きすぎ

カード時代これから先が心配だ

私はカードざらいで通すだけ

鳥取県 岩崎 和子

たんぼぼが植込みの陰凜と咲く

主婦という粹のなかでも喘いでる

怒るまい夫婦二人の真昼どき

回り道無駄も乙かな寄ってみる

読んですぐ抜けて行くのに本を買う

和歌山市 堀 富美子

遠い日のルーツが喋る故郷に立つ

故郷の空気がそっくり包みこむ

子育ての燕に劣る社会面

展示会孫の晴れ着が眩しすぎ

団塊が余生を選ぶユーターン

和歌山市 田中 すすず

一念を通し飛沫を浴びている

光るもの全身に浴び開く花

波に乗る青いトマトの熟れ具合

仕方ないと片付けられてから不信

さあどうぞどうぞと奥の広いこと

和歌山市 土屋 起世子

忘れてた恋甦るクラス会

金婚式曾孫に主役の座をとられ

見る人の思いいろいろ天の川

風鈴の音色その日の風まかせ

皮肉屋の脳は老化をまだ知らぬ

和歌山市 根田 よしこ

落語会くすり忘れてワハハハハ

先生の手品が光る参観日

気がせて隣の田植え気にかかる

パンの耳好きだと嫁に言い出せず

老人と胸張る夫六十五

紀の川市 辻内 次根

これからいつも思っている私

根が深くないからやがて癒えてくる

曲げてまで聞いてくれない仏さま

シミュレーションすると梯子が届かない

比べると恥じ入るばかり影という

紀の川市 木村 徑子

近くの他人恩に着る人ばかり増え

生かされて人の情けに着膨れる

友情は心の奥の宝物

晩成の夢あたたためてまだひよこ

大空の汚れを拭いた酸性雨

奈良市 矢野 良一

カルピスの味懐かしい青春譜

こっちどす教える人が色つばい

亡き母の面影浮かぶ円い月

バラの寺花を見る顔みな仏

緑風に歩数が増える森の径

尼崎市 河津 正治

衣食住足り良心を置き去りに

繕いの仕種も遠く針供養

年の功浮いた話に蓋をする

苦も楽も思い出深い真珠婚

身の程とつばやき見抜く古鏡

尼崎市 加川 靖 鬼

ドラマなら事件の起きる時間帯
羽根で舞う蝶々は神の遊び技
塞翁が馬また何事か起こりそう
アリバイになればと指紋残しとく
満開の桜明日の風知らず

加東市 安 達 厚

定退後趣味一筋という至福
散々に迷ったあげく不義理する
やつとこさでしたよ傘寿も金婚も
買物と医者行きだけの自家用車
播いた種いつも生えると限らない

宝塚市 丸 山 孔 一

瓶の蓋老いの力を嘲笑う
ワイシャツも日の目見るのは葬儀だけ
お互いに喧嘩が無駄と悟る年
近頃は地獄の沙汰もリボ払い
あなたの眼真夏陽のごと胸を射る

大阪市 尾 崎 黄 紅

月の夜は月と語って月を褒め
掌に受けた水の旨さは忘れない
三角の形で三人仲が良い
封書からはがきに歳を取りました
ダイヤよりガラス金婚過ぎました

大阪市 伏 見 雅 明

自負心を抱き続ける床柱
握手して互いの腹を探り合う
太っ腹と持ち上げられて怒れない
いつまでも小指約束覚えてる
生真面目に生きた証の感謝状

大阪市 吉 田 富 美

まん丸の月を眺めた終戦日
一合の酒で泣いたり笑ったり
イモの蔓食べたあの時父母も居た
風鈴の異なる音色選りまどう
浅漬の茄子や胡瓜が色よくて

大阪市 坂 裕 之

こんな事悩んでいたかあほらしい
おもいつきり背伸びをしたがまた縮む
父の日に届いたまたも夏バジャマ
ちよつと飲みいっぱい喋りすつとした
病歴と孫の自慢の定年後

大阪市 吉 川 弘 泰

脈測る看護師の手の温もりが
点滴の落ちる速さに命乞い
病院の窓より見える鯉のぼり
薬でも甘味にが味の味くらべ
退院を告げられ嬉しひげを剃り

大阪市 平嶋 美智子

深緑の木漏れ日子らが踏んで来る

成功の幼馴染がまぶしくて

クラス会皆ブランド下げて来た

誕生日絵手紙だけがおめでとう

アンパンを食べてテンション上げてます

池田市 多田 契子

変心と思いたくない腕時計

帰宅許可でえへんねんと逝った兄

白鳥が貴婦人になる雨後の池

告白をなさいよ緑ざわざわと

落日が今日一日をわしづかみ

泉佐野市 備後 三代子

スイッチを切替えず今日の日

酷なことあつても秘めたまま眠る

ふたつみつ忘れたままで恙なし

食い違いながら納まり夕暮れる

あつちまで持つて行こうか玉手箱

河内長野市 針生 和代

あつさりと孫に負けてる腕相撲

神様に幸せ貰う笑い顔

亡父の声亡母の声聞く千の風

鮎と鞭使い分けてる永田町

温暖化強い国から出る不満

岸和田市 米富 淳風

静と動私の中の季節風

夏を呼ぶおたまじゃくしのフラダンス

静寂の墓地に御無沙汰お詫びする

鼻肩目に見て育んだ我が娘

嬉しさも切なさも待つあ故郷

堺市 荻野 像山

新緑へマスクコーナー狭くなり

新緑の中を杖もつスニーカー

新緑へエプロン羽根に変えた妻

枯れ葉でも夢で緑の恋もする

空模様人の心をもてあそび

吹田市 藏田 光子

喋るだけしゃべり続けて旅三日

久々に仏壇みがく外は雨

天気予報外出の日を見極める

ねだられて顔も財布も緩ませる

それなりの暮らしに慣れて布団敷く

吹田市 早泉 早人

ときめきを使い果して錆びて行く

とりあえず相槌うって仲間入り

疑えばココロの鬼が顔を出す

酒無くて辛い人生過ごせない

全員の祈りはひとつ着陸時

高槻市 笠原 乃りこ

親の思い子に届くのはいつのこと
亡き母の遺産ごっそりヒモと紙
いつになく陽気な素振りさてはまた
カーネーション思いもよらず嫁がくれ
思いきり跳んだはずだが距離がです

高槻市 安田 忠子

清張の火の路に惚れ飛鳥路へ
飛鳥路の石造物の摩訶不思議
一回り違いの姉に見る未来
争っても外では味方する姉妹
母だけは味方になってくれました

豊中市 荒巻 夢

大吉のみくじは捨てず不信心
陽に向かいかしわ手を打つ父の背
子の顔を忘れた母の手が温い
バックボーン持つて生きよと師の言葉
笑う場所ずれたまんまで五十年

富田林市 古田 千華

梅雨明けて紫陽花寺は無表情
自分色主張しているドロップス
団塊の手帳に並ぶ旅予定
夢でなくほんとに一流めざしてる
金よりもシルバー似合う夏姿

寝屋川市 北田 ただよし

雨の日に鼻屑がない相撲見る (大相撲TV観戦)
角番の割にまるまるよく肥り
顔まさに仁王ぞコロリ転びおり
負けたとて手は借りないと意地をみせ
昇進を決めた力士に光る汗

羽曳野市 森 下一知

感情の赴くままが敵を産む
ポケットにねじ込む芥に発火点
食欲の不振が続くペットロス
中立を通して風を選っている
割り切れぬ小数点が腹の隅

羽曳野市 吉村 久仁雄

不器用のままで変わらぬ非戦論
胃カメラに腹の底まで見透かされ
廃村の無念を残す桑畑
言い訳のたびに墓穴が広がる
その時を待てずに妻のもらい泣き

羽曳野市 永田 章司

碎かれた夢の破片を今も追ひ
美しい国の年寄悲鳴あげ
雨一過水やり不要夏の夕
情熱は希望をもった人に湧く
ひそひそと人事の話耳が立つ

羽曳野市 仲谷 真一

日本にも銃社会が進んでる
官界の談合事件に呆れはて
社保庁も新手のサギをやっている
コムスンもやっぱり老人だましてる
NOVAのサギだまし方まだ教えてる

枚方市 二宮 紫鳳

手弁当汗と笑顔で舌鼓
自治会の和みもたらす花菖蒲
紫陽花の小雨にけむる二人傘
おニュー傘雨のデビュウを待っている
ウォークする夫婦の歩幅揃い出し

枚方市 小林 わこ

静いはいまに治まる夕立も
今日は雨カレーと決めて小休止
父の遺したツツジの赤に氣を貰う
再会で胸にさざ波立てました
力一ばい投げたい小石胸の奥

藤井寺市 俣野 登志子

思案してまた思案してまた思案
妻ならばみな憧れる週末婚
急いでるのに夫はいつも三歩あと
嫁姑互いにほめる千六本
ふたりで食べて片付けはなぜわたしだけ

藤井寺市 津田 シルク

仏だんの花買つてから買うジャンボ
バラ色の人生にある千の棘
膨らんだ財布夜遊びしてこまる
かたつむり葉っぱの裏で雨を乞う
孫の目に日の丸弁当どううつる

藤井寺市 伊藤 アヤ子

いい匂いする方向に行きたがる
慣れた頃うつかりミスで命とり
衣更え去年の服が入らない
花咲いてあなたに笑顔戻りつつ
ミニトマト赤くなるのを孫と待つ

藤井寺市 吉田 喜代子

母も逝き娘の椅子もない空気
ひよつとして思いが当る日の怖さ
行き詰まる花と童謡友とする
金具どろ天知る地知る私語となる
老いてなお感謝している足も目も

箕面市 寺井 柳童

H20大阪らしい新社名
肩書がとれて気ままに野良仕事
不細工な顔なんですが飽きまへん
鳥の声見覚えのない木が芽吹く
ホーホケキョ艶と色氣が増し五月

八尾市 脇 俊子

内緒だと小耳にはさむ裏の顔
大地踏む膝が時折スト起す
明日のこと空白にする今大事
孫というダイヤを今は研いてる
団塊の世代をねらうハイの旅

八尾市 田邊 浩三

顔しかめ黄砂を浴びる道祖神
襟正し娘の彼が待つ部屋へ
反省会今日も欠かさぬ縄のれん
うちのナビ横でうるさく指図する
捨てようと分けた冬物また仕舞う

八尾市 西川 義明

疑いを知らぬ天使の瞳がきれい
もう少し走れる余力残してる
朝の経唱える声が透きとおる
父の顔知らずに古稀の敗戦忌
一本の絆の先にある命

八尾市 赤木 妙子

引き潮にゆだね捨てたい罪いくつ
昭和まるごと平成喜寿でまだ背伸び
木の芽叩く母を真似てるもみじの手
吸収合併しても揺るがぬ故郷の山
五月蠅いをうるさいとやとハエのウツ

八尾市 前田 紀雄

本来は介護医療は国がする
一日を可もなく不可もなく暮す
新緑の鶯背なに下界見る
人生は泣きたい時に酒を飲む
子や孫に残したいのは良い地球

八尾市 平川 幸枝

春先の脳はあちこち故障する
あつさりと握手したのに手の鼓動
用心の顔に相談言いだせぬ
今や子も当てに出来ない親の脛
洪滞の運転レモンひとがじり

八尾市 寺川 はじむ

汗流し浴衣ガールが涼を売る
田植機がやつと出番の梅雨の朝
降って良し降らぬも良しと田の早苗
ポーナスのニュース横目で眺めてる
美しい介護の裏にあるへどろ

大阪府 岩崎 玲子

うれし泣き涙をためるツボ探し
月の下涙は止まること知らず
遠い日の涙にじんだ日記帳
時々青空風が拭いてくれ
おセンチな涙を受けてくれる嫁

大阪府 若 月 祐 作

吹きわたる音色静かに千の風
結ばれぬ縄を二人で揉んでいる
あかたれいじめにあつて閉じこもる
正夢が目覚め良くして占なうて
東西の横綱初の他国籍

大阪府 高 木 道 子

一病を削除したくて飲む薬
千の風千の涙の果てだろう
ほどほどの忘れ上手で生き上手
プライドは未だ捨てずに丸い背
軽い嘘真ん中に入れ盛り上げる

京都市 清 水 英 旺

老人力つけてちよつぱり力コブ
知恵熱もハシカもありの大学生
人間は心の強い生き物か
はんやりと緑の風を見てる午後
ブラインドを下ろし自分の殻に入る

北名古屋 片 岡 文 男

電子辞書叩くとなりで電話辞書
田植機が一家総出の仕事取り
カーネーション貰う五月の辻地蔵
デパ地下が育てる主婦の手抜き技
安倍土俵数を頼りに押し一手

佐渡市 高 野 不 二

予報通り降ってくれないほしい雨
冷酒とビールそれぞれ親子酒
父の日をついでのように祝われる
腹立てるニュースが今日も多すぎる
自家用は曲った胡瓜でもうまい

横浜市 川 島 良 子

冷静になろうなろうと水を飲む
なまけ者なんですだから手を抜かぬ
家庭菜園おばけきゅうりと笑い合う
焦るからこころ乱れてくるのです
もう少し肩の力を抜きなさい

横浜市 巖 田 かず枝

国民の怒りフツフツ活火山
夕方は大のおともも淋しくて
手が痛い心が痛いよりまし
孫の顔見たくて用事探してる
誰似でもないの孫にはかわりなし

横浜市 長 島 亜希子

接客法教育したいレストラン（ロシア旅行）
スパスイバ（＝ありがと）に幼児英語で返事する
贅沢は無限にできるものと知る（エカテリーナ宮殿）
キリル文字覚えた頃に帰国する
ペンダントの値から総額値踏みする（琥珀の間）

横浜市 中尾 哲代

亡き人の声でオウムが呼んでいる

取得税想定外のマイホーム

善人が飛び出してくる救急車

お友達その一言に縛られる

歳月を経ると逢うのがこわくなる

横浜市 金森 徳三

歳の所為鉢の手入れに飽きてくる

何時遺言書こうか迷う歳になり

赤ちゃんの泣声嬉し垣根越し

消費税選挙の後に控えてる

ケイタイでメール後から電話する

藤沢市 加藤 スズコ

ちらし寿し香る木の芽に里唄ぶ

初対面思わぬ笑顔ほつとする

散る桜木々は芽を吹く息づかい

よい知らせ友の便りに花切手

心ない友を許して一呼吸

東京都 井上 つよし

クスクスと落語楽しむイヤホーン

人間も背中也丸く好々爺

名案もトイレを出るとすぐに消え

艶の良いゴキブリ逃げ足も速い

流木が浜辺に歌う放浪記

昭島市 野口 忠

子が通う道には若い風が吹く

誉め言葉ですかあなたに瓜二つ

プラマイがゼロの人生まあいいか

お化粧がくずれ飛鳥は大騒ぎ

戦争を知る糠床の平和主義

立川市 柏野 遊花

まっ直ぐに流す汗からリフレッシュ

走る飛ぶ揺れる影追うウォーキング

水やりで流れた蟻の行方など

喪失と遺失ハートを確かめる

コーヒーのはしご話は振り出しへ

草加市 飯土井 健夫

青汁で健康という宝受け

学ないが妻の常識日本一

スポーツに言い訳はない汗の数

感動の本に誘われ午前さま

極楽は山のいで湯に三日ほど

札幌市 小沢 淳

きよし君貧乏なんか恥でない(西川きよし)

初恋を女房に聞かれバビペポ

戦争に負けて平和な国家です

空々し嘘の上塗りして恥じず

弱点があつて気楽な人が寄る

府中市 馬場利子

加東市 黒崎美紗子

庭に干す絆が満ちる傘の彩

雨上り今日の元気さもろに受け

哲学に疎く胡瓜の種を蒔く

明日もまた生さるつもりの米を研ぐ

堺市 羽田野洋介

胸襟を開き過ぎたか無礼講

ときめきは目から耳から香りから

縦結び不器用な父懐かしむ

腹の虫おさまり切れず顔に出る

奈良市 阿部茶々

雨だれと同じリズムの子の寝息

同窓会話せる友がいる至福

年輪を刻んでみんな美しき

蛇の目傘くるくる回し逢いに行く

大阪市 寺井弘子

穴明きのジープン年中クールビズ

人情の枯れゆく街に慣らされる

今私鈍感力が頼りです

土が好き趣味園芸で埋めておき

河内長野市 木太久正一

毒だみの庭にひっそり自己主張

山藤の自然に咲いて山に融け

連ドラで朝のリズムを整える

古日記昨日のことのように見え

あれこれと脳へメモして日を送る

あの時計逆に回ってくれたらな

紫陽花の変る愛嬌雨欲しい

年金がたよりうっかりしておれぬ

岩出市 村中悦男

セピア色遺影の父母は生きている

病院で昔恋しい人と逢う

命とは病氣と老いで知る重み

解決の知恵はふとしたことで起き

泉大津市 助川和美

お小遣い祖父の説教ついてくる

女房はおれのためには化粧せぬ

朝食は夫みそ汁妻サラダ

ハイドウドウ喜んだ孫競馬好き

羽曳野市 松本静子

改革と言う名の波が押し寄せる

虫食いの野菜美味しい無農薬

かしわ餅作ってくれた母想う

キラキラ星手に届きそう古里は

奈良市 辻内げんえい

長寿国老母が老母看る時世

母の日に息子からのメールで妻笑顔

遊園地危険なくせばただ広場

梅雨空にアウトドア派は昼寝する

大阪府 畑 中 節 子

野菜苗植えてうきうき夢多し
マイベース自分の歩幅確かめつ
先ず月の予定を記すカレンダー
草むしる背に蝶の舞う昼下がり

鳥取県 斉 尾 くにこ

人と人こころもとない距離がいい
休日ひとりこの贅沢と淋しさ
坂道を登る風吹くところまで
さつと今心はまたも叫んでる

唐津市 岩 崎 實

あん言葉こんなことばとて思い出し
たまにはね遊び半分それでいい
耕耘機白サギ数羽したがえて
黄砂降る車のよこれよく目立ち

取手市 葛 西 清

眉を描き大人の顔で降りる駅
救急車隣で停まり声出ない
落とされた失敗談でテキが落ち
自分史の表紙羅漢が徳利持つ

三田市 上 垣 キヨミ

泥の手を洗い涼風深呼吸
予報士を泣かす勝手になる雲
血と汗の年金食べた五枚舌
うろ覚え漢字指摘に目が覚める

生駒市 小 西 稔

甲子園かち割り氷なつかしい
山境に緑求めて汗流す
野球だけ国境無しに楽しめる
美しい言葉でつかむ人心

八尾市 笹 倉 ひろし

ちよい悪を気取りジーパン革ジャンパー
骨格も心も柔い子が増える
三歳児知恵いっぱいを身に纏う
小出しする残り少ない知恵袋

三木市 広 瀬 房 江

九条を忘れないでねえ総理
手伝いの孫とハグして田植え唄
怪我なくて良かった事故の泣き笑い
デザイナーの額も証書もセピア色

吹田市 二 宮 栄 子

アルバムの力走子等は信じない
三対一煙草吸えない家が建ち
蛇口から湯が出て母の頃思う
なまぬるい態度仏に叱られる

枚方市 小 川 良 吉

里萌えてストレス消した里ちから
嘘もなくソフトな会話老夫婦
千の風ほくもなれるか喜寿の春
ソフト舐め目で孫を追う遊園地

米子市 小 塩 智加恵

買うつもり無いに店員優しい目
背高の息子私の家系似だ

六十も私にとって子供です

生かさねば我が家の暮らし握る人

西宮市 石 野 照 代

何にでもとんかつソース戦中派

いびつでもきゅうりやつぱり夏の味

王子様群がる日本平和です

絵手紙が夏のかおりをつれてくる

大阪市 山 本 加お里

待ちぼうけ駅に出口が二つあり

友達と喧嘩するほど仲が良い

赤ちゃんの天使の笑みにいやされる

野良猫と目が合ってから今家族

河内長野市 宮 守 正 博

少しだけ流れにそつと乗ってみる

隠しごと脱いで体が軽くなり

平和です焼酎が先湯が先か

忘れてる仕舞ったところ忘れてる

府中市 藤 岡 ヒデコ

ありがとうご苦労さんでひびき合う

健康な心と体こそ宝

無事暮れて無事目覚めても焦る日も

新緑の風を体に吹き込んで

鳥取県 岡 村 孝 明

裁判員ブームに裁きの本を読む

会釈して未知の人との和を広げ

全快を祝う旅行に保険かけ

堅い土耕やし古木活気づけ

出雲市 川 島 和歌子

久方に母を見舞って髪を梳く

息詰る沈黙破る咳払い

妥協した私の考え甘すぎた

うっかりと今朝の約束もう忘れ

高知県 い の 静 草

エスカレーターさせないために黙り込む

非人情表に出せば息苦し

奴風静かに糸を切る準備

凜と立つ山芍薬にみな小聲

山鹿市 阿 部 ミツ子

人生は楽有り苦あり夢も見る

有難う心から出る温もりに

ふまれても花咲く季節忘れずに

ばあちゃんは若いと言われ悦に入り

鳥取県 田 村 周 子

喜寿傘寿心洗われありがたや

万物は土にかえてまた生きる

近頃はビックリニュース多すぎる

喧嘩して初めてわかる人の味

府中市 岩本雅代

鳥取県 近藤秋星

六月の空の怒りか氷り雨
柳誌には生きる喜び溢れてる
柳の輪でひらった智恵が杖となる
趣味の庭脳細胞が研かれる

松江市 松浦登志子

芥子の実が米粒になるウンばかり
忘れろと言うが貸す方覚えてる
ひと言の多い家系が通夜に寄る
納棺に本心からの言葉出る

松江市 相見柳歩

昼寝している時通る選挙カー
遣伝子がそっぽを向いた田と畑
筍のようにコンピニ建ってゆく
凡人は金に糸目をつけたがる

雲南市 渡部好榮

転んでもただでは起きぬ戦前派
ありがたや年金暮しも板につき
隙間風吹く事もなく恙なく
味噌汁の味にこだわる犬もいて

鳥取市 横田春名

帯締めて老いも華やぐひとときよ
ばあちゃんの知恵袋借り切り抜けた
姑の顔童女のように見えてくる
梅雨冷えにズキズキ痛む捨て台詞

社保庁のずさん啞然とするばかり
社長辞任くらいで済むかコムスンよ
父の日は一升瓶を提げて行く
衣替え俺も今日からクールビズ

境港市 中井虎尾

飛びたくてエアポートに集う人
三年の日記を買って三日書く
退職後毎日ゴロ寝丸く住む
政治劇台本通りなぜゆかぬ

鳥取県 竹森富久江

あやまって軸になる芽を潰したの
機微にふれねぎらう母の温い駅
花の昼ほんわか風の口うつし
もう一度チャンスを駅にアプローチ

鳥取県 岡本幸枝

ばあちゃんのテンポで居間は和んでる
寡黙でも男はざばり筋通す
野が好きとメジロホホジロ晴れて鳴く
びつたりと介護が続く家族愛

鳥取県 松岡照美

おんぶして背なの丸みが子守する
踏まれても草の根性曲がり出る
六十路へと繋ぐ手と手で共白髪
若気の至り六十路で収支決算し

鳥取県 鳥越 鬼一

好きなのに好きと言えない恋心
今思うあなたと組んで良かったと
足腰は弱ってきたが口達者
合併で陸の孤島が沈み行く

鳥取県 飯野 菖子

メールより貴方の生の声がいい
ガンバレば寛ぎ二倍春の野良
特ダネも会話もないが元気です
ありがとう味方になってくれた空

鳥取県 坂本 智子

愛別離苦を消すことの難しさ
ゆるい人いつものんびり間に合わず
リハビリで母の笑顔がこぼれそう
恋ですか滾る心はこぼれない

和歌山市 坂部 かずみ

一応は明日のプランを立てて寝る
お祝いの薔薇が続いて疲れだす
ケータイは愛の言葉も残らない
年齢が気になって見る死亡欄

和歌山市 山田 侃太

お天気を調教したい予報官
道草をたつぷりとして専門家
流れ弾に当たる都会に出なくとも
鉄の斧私は嘘をつきません

奈良市 尾畑 なを江

ふり向くと昨日の事が追って来る
浮き沈み望んだことでないものを
使い捨て出来ぬ私の物の山
人生にアンナコンナとマサカ有り

神戸市 武田 恵美子

詩ができず手あたりしだい本をよむ
むつかしい言葉並べてかしこがる
テスト中東と西でおおげんか
減食もにおいにつられ負けになる

尼崎市 小池 幸子

夜半時柱時計の打つ音色
腕時計富の象徴見え隠れ
一步退く気持を持って丸く住む
耐えただけ顔に刻んだ皺の数

尼崎市 桑原 東園

油断から約束反故にして悔いる
孫を待つ選び抜かれた褒め言葉
老ゆるとも胸に育む小さい花
極楽に遊ぶや棺の光る顔

加東市 岩本 美緒子

余生もち弱りかけてる齒のいとし
骨粗鬆負けないガード鰯食う
年会費嵩張り論吉連れて消え
窓全開極楽風の涼うれし

篠山市 谷田多美子

新茶入れ和菓子分け合う昼下り
木の椅子を鳴らしてしばし藤の下
繕いもの亡母に似て来たなと思う
花しようぶあじさいも好しハイチーズ

篠山市 永井かほる

礼服も洋服になり泣く呉服
雨後の菜園行きはなお楽し
若い時始末頑張り今がある
菜園の朝の二時間日も回る

大阪市 田浦實

風呂敷が物に合わせて百変化
路地の店老いも若さも皆味方
竜安寺石が奏でるモダンジャズ
宮城沖鰯豊漁に胸騒ぎ

大阪市 平井露芳

コーヒーで脳はすっきり糖下り
大臣を死なせた罪な安倍首相
マイカーが離せぬ老いの医者通い
長生きの秘訣聞かれるまで生きよ

大阪市 吉内福世

農道の草も久々里恋し
都会より里の空気の味を吸う
棚田にも緑の模様人を呼ぶ
旅疲れ夕日色よく癒される

大阪市 太田としお

エレベーター別れたひとと二人きり
お留守やと聞いていたのに主人でる
狂わないセイコー腕によく遅刻
嬉しいよ嬉しいけれど双子とは

大阪市 橋村容子

カラフルで歩きたい靴出番待つ
イナビカリ怒ったような降りの雨
料理好き人を寄せては試食会
男靴並べ安心女子一人

大阪市 澤田定子

蟲肩チーム勝てば何度もニュース見る
葉の数色で覚えて飲んでます
足腰に洋風家屋敵味方
サミットも自国の欲が見え隠れ

茨木市 島田誠一

潮の目の境が読めず沈む運
人間のエゴ境界を引きたがる
ボテボテと氣遣う美学大阪弁
美人にはついニコニコと話すクセ

門真市 矢阪英雄

定年の嵐に負けぬ防波堤
健康を自分ではばむうつの幕
解り合い手と手でつかむあたたかさ
だきしめて親子の流れたしかめる

河内長野市 黒岩靖博

温泉でほんやりつかる至福とき

苦虫を腹に収めて恵比須願

のんびりと旅した後の忙しさ

お目当ての清酒が当りおらが春

河内長野市 内海綾乃

病院も医療費高くすいてきた

雨ほしいと蛙の鳴き声にぎやかに

腰につけ歩け歩けと万歩計

年いくと何もいらぬよ平和のみ

岸和田市 坂口英雄

キノコ雲知らぬ祖父母が増えて来た

年金の貰い忘れは知らぬ振り

横綱に勝って痛くない座布団

はやきより笑顔が増えた野村さん

岸和田市 中岡香代

親子とも当りを選ぶことできず

ほんやりは見せ掛け実は堅実家

制服の裏と表に違う顔

痛む胃を張本人が気づかない

高槻市 植地勇

もう少し見たい所で目が覚めた

昨夜見た夢に出た場所何処だろう

起こるなど事前の準備考えつ

我が心整理付くまで進めない

豊中市 谷川勇治

茶袱台がわいわいの頃遠くなる

真似ているつもりはないが父の背

黝八等軽い命の父でした

何度でもヒロシマのこと話します

寝屋川市 岡本勲

暗黙の了解ですという浮気

お別れに机につけたキスマーク

言うつもりつもりで過ぎた片思い

相合傘斜めにさして濡れている

枚方市 坂本ミヨノ

梅雨の日蛇の目珍し覗かれて

米寿です賞味期限もなく元氣

人の世は仏も鬼も泳いでる

ゆずり合う目と目が凍り嫁姑

藤井寺市 増井ヨシ枝

百合の香が追ってきそうな散歩道

子猫には母さんになるお婆ちゃん

淋しさへ孫が笑いの灯をともし

お若いと言われわざわざ年を言う

八尾市 中島春江

夏帽子一寸気取って姿見に

風涼し赤子のあくび母もまた

頑是なき孫に弟我が出番

男の手もサクランボ摘む時やさし

大阪府 小栢 こずえ

生真面目な人というから生真面目に
お日さまもたまには休みしたら良い
追う老いをどう追いやるか思案する
あきらめた鉢にも花がよみがえり

大阪府 大屋敷 婦美子

とうとうと押しながしゆく梅雨の川
今はもうらしくはやめて若づくり
ほけ封じピンポン会話いつまでも
みまかりし母と暮して八十年

大阪府 西川 冷子

囀りを受話器に乗せて里の朝
クラリネット主旋律吹くちんどん屋
団塊と押し出され来た半世紀
卓上へかすみ草足し祝い膳

京都府 松本 甘鬼

喜びのバージンロード淋しさも
くじ運もないのに夢を買っている
見付からぬメガネ頭にかけている
孫あずかり我がままな子にしてかえす

栃木市 岡野 すみれ

一生を働き蟻でいい夫
任せろと叩いた背なにある温み
立ち直る涙と知って親安堵
脱毛も白髪も隠す武器があり

川柳塔のぞみ 8月句会

欠席投句	宿題	場所	日時
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3	「軽い」「鑑賞」「べらべら」各2句「自由吟」1句	銀座区民館(地下鉄東銀座③出口)	8月28日(火) 13時

第23回 井笠川柳会誌上大会 薬 ひこばえ

課題 「卑怯(ひきょう)」
今川 乱魚 (千葉県) } 共選
久保田 半蔵門 (大阪府)
野村 賢悟 (広島県)
「約束」
西出 楓楽 (大阪府) } 共選
梶原 サナエ (兵庫県)
西川 けんじ (岡山県)

応募要領 便箋又は所定の用紙に各題2句(計4句)を列記し、〒、住所、氏名、柳名、TEL、所属柳社名を列記して応募料と共にご送付下さい。

応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付
締切 8月31日(金) 消印有効
投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68 井笠川柳会 Tel・Fax 0865-62-6200

賞品 課題天位のうちから総合成績により石碑贈呈。その他三才入選句に賞呈

主催 井笠川柳会(日川協加盟)

時実新子追悼句会

会費 2000円 締切 12時 各2句
「風」竹治かし・「時」松本文子・「実」石橋芳山
「新」熱田圭詩朗・「子」川本 畔・「流」松 彬
〒690-0875 松江市外中原町94 川本 畔宛
投句先 締切 8月10日 投句料 1000円
主催 川柳大学 島根ゼミ

■各地句会だより

南大阪川柳会の歩み

前 たもつ

南大阪川柳会の誕生は昭和四十年十月であり、『川柳塔』の創刊と同じである。今年の十月で四十二年を迎える。

金井文秋さんの記録によると、南大阪川柳会の流れをさかのばれば、川柳雑誌社阿倍野支部、その前は同南支部と言った。

昭和二十三・四年頃、高鷲重鈍さんらの呼びかけで、阿倍王子神社で開かれたそうである。文秋さんが参加された二十九年ごろから阿倍野支部と名前がかわり、須崎立秋、菊澤小松園さんが中心で、ガリ版刷りの句報を出していた。

その後会場は旭町金塚会館へ移った。豆秋さんが昭和三十六年五月に亡くなり、松江梅里さんを担ぎ出すことで会を続けることができた。

梅里さんの料亭を無料で借りて、『川柳雑誌』より早く「大萬川柳」の成績を会場で発

表するので、人気が上がり、阿倍野本社、なととひやかす人もあったほどであった。

昭和四十年七月麻生路郎先生が他界され、



『川柳雑誌』

が四六〇号

をもってそ

の歴史を終

える。十月

『川柳塔』

の創刊と同

時に、南大

阪川柳会と

改められ

た。

その二年

後、文秋さ

んが引き継

ぎ、九十歳

で人生を全

うされる四

年前まで、

約三十年間

会長として

ご尽力をい

ただいた。

句会場は玉造の老人憩の家に落ち着くまで阿倍野の大萬、寺田町の高松会館等と移っている。この間今は亡き、菊澤小松園・西出栄・西田柳安子・小出智子さんに支えていただいた。

五十年代に入ると、萬的・柳伸・重人・寿美・庸佑・楓楽・千里・度・章久・千梢さんらが加わり、今も要として活躍されている。

平成九年三月から寺井東雲さんが引き継がれ、七年余り会をリードして下さった。

私は、小出智子さんらベテランがおられるので勉強になると誘われ、平成八年秋から参加。そして句会場から見えるマンションに引越した縁もあり、十六年六月から三代目の会長としての重責を担っている。

この三年間のできごとは、句会場を玉造から天神橋六丁目の「住まいの情報センター」に昨年六月に移ったことである。人数も増えてきており、南大阪川柳会が北大阪の地に根づきつつあることがうれしい。

句報五〇〇号を一つの区切りとして、九月二十四日（日）記念吟行会を計画している。より多くの方の励ましとご指導ご支援をお願いいたします。

豆秋小松園五〇〇号へと辿りつく たもつ

愛染帖

新家 完司 選

大阪市 岩崎 公誠

箱入りのメロンが届く筈がない

(評) いくら考えても、高価な贈り物が届くアテなどはない。誰に恥じることもない真つ当な暮らしをしている証ではないか。

豊中市 安藤寿美子
次の世はどんな男に逢うだろう

(評) 今生で結ばれた男も悪くはなかったが、次も同じでは夢がなさ過ぎる。「どんな男と……」と思えば、次の世へ行くのが楽しみ。

東京都 清原 悦子

まだ母がいるから里の空を見る

(評) 常に意識の底に母がいる方角がある。せわしない暮らしの中で、ふと空を見上げる時も、母のいる古里の方を見てしまふ。

堺市 加島 由一

初めての店で父の名たずねられ

(評) 顔が似ていたからか、友人が呼んだ名字からだろうか。平凡な明け暮れの中で、稀には胸が熱くなる味なひとときがあるものだ。

横浜市 居合真理子

海に在る限り値札の付かぬ魚

(評) 幸運な魚は、にんげんに遭遇することなく、海を楽しみ海で死ぬ。不運な魚は、捕獲され値札を付けられ、にんげんに食われる。

紀の川市 辻内 次根

年金の入る日いつも晴れている

(評) 額の多少を言えばキリがない。貰えるだけでも有り難いと思えば心が弾む。偶数月の十五日は、空もこころも快晴である。

三田市 上垣キヨミ

ゴハンよの声ははつきり聞こえます

(評) 聴力はかなり衰えて、小言などは耳に入らないが、「ごはんですよ……」の声だけは明瞭に聞こえる。まだまだ大丈夫だ。

富田林市 大橋 鐘造

ごめんねが上手に言える生き上手

(評) 人と人の潤滑剤は「ごんにちは」の挨拶と、「ごめんなさい」の詫言葉。生き下手はプライドが高くて絶対謝らない。

河内長野市 針生 和代

燕には赤ちゃんポスト無用なり

(評) 赤ちゃんを救う手段として有効なのは分かる。が、「ポスト」という名称はいかなものか。赤ちゃんは断じて「物」ではない。

倉吉市 松本よしえ

ウソという名前の小鳥愛らしし
考えただけで混浴恥すかし

シドニー 坂上りの子

マルクスも九条もまだ読んでない

地球より重い命がダイエツト
羽曳野市 吉村久仁雄

豊中市 吉田あずき

衣替えの度に縮んでゆくサイズ

身を晒す詩は私のドキュメント
紀の川市 木村 徑子

高槻市 瀧本きよし

手術前夕焼けいやに赤く映え

不意に会う不意に別れがあるように
箸一膳洗う平和な洗い桶
大阪市 小泉ひさ乃

羽曳野市 永田 章司

胆石を砕く手術に震えてる

子の癖を注意の親に同じ癖
子小さい旅父母の写真を懐に
大阪市 星野きらり

朝語で大樹にもらうエネルギー

平凡が何より老母の握り飯
遠い絵になる缶蹴りも竹馬も
弘前市 高橋 岳水

八尾市 高杉 千歩

飽食の世に食堂へ並ぶ列

傲慢な若さへ聞かす反戦歌
四條畷市 吉岡 修

ひつそりと名もない星のまま消える

逆転は無いとききらめ風呂にする

大阪府 米澤 俣子

高くとも日本でとれた野菜買う
遣伝子を思えば文句子に言えす

西宮市 坪井 孝一

ぶつかった意見がもとで無一の友
窓際でうとうとそれが仕事です

寝屋川市 富山ルイ子

六〇冊文庫本借り読み耽る
寝たきりの友 杖つきながら見舞う

西宮市 藤本 直

親學子を教える親は一人住み
古希すぎて賞罰もなく飯うまい

米子市 政岡日枝子

取り敢えず走ってみるか黄信号
お互いのもしもに保険かけている

三田市 阪本 藤朗

夏の昼今日も御用の庭の葱
ポケットを全部あたって出る切符

和歌山市 木本 朱夏

ハウツーをちよつとつまんだ趣味の数
身に覚えあつて手紙は焼いておく

豊中市 水野 黒鬼

教科書に墨が塗られた負の記憶
深呼吸吸あのみどりに染まる肺

河内長野市 坂上 淳司

脈拍が時々飛ぶが生きている
海都市 三宅 保州

宇宙から見れば盃ほどの月

松江市 松浦登志子

元気出せみんな仲間であんな敵
大阪府 前 たもつ

八王子市 播本 充子

ソーメンと西瓜が続く悪しからず
飛び魚の飛距離が落ちるのも加齢

今治市 渡邊伊津志

芸人の最後を芸に告げられる
独り言自分に理解させるため

鳥取市 倉益 一瑠

したたかなメールだハートついている
味だとも妙とも思ふくされ縁

和歌山市 古久保和子

シャッターを下ろして街は重症に
ああ昭和ゼンマイ仕掛け懐かしい

弘前市 高瀬 霜石

プランコがとっても好きな父でした
平和日本まいにち親子殺し合う

京都府 高島 啓子

切手には糊をしつかり塗って出す
だんだんと味の出てくるおつきあい

泉佐野市 稲葉 洋

郷関を出すつと格好つけ棄農
盥蘭盆会託びねばならぬ事多し

大阪府 岩崎 玲子

三日月に座つて亡母と語りたい
神くれた宿題病んでひとつ解け

寝屋川市 籠島 恵子

サン格拉斯かけると背筋のびてくる
リーダーの迷いチームが揺れている

松江市 川本 畔

にらまれてにらんで通る犬と猫
冷房の嫌いな人と同居中

西宮市 牧瀬富喜子

食いものにされてたまるか竹を踏む
帰られぬ詠を投書でホームから

京都市 都倉 求芽

高邁な話へ欠伸してならぬ
手づまりを破るつもりで机拭く

唐津市 市丸 晴翠

曲がり角母に聞きたいことばかり
人の倍汗かいている最後尾

海都市 小谷 小雪

休みの日音も軽やか古時計
あなたからもらった指輪リフォームへ

鳥取市 福西 茶子

浜風をクーラーにしてする昼寝
仏壇もお墓も孤児になるやがて

羽曳野市 吉川 寿美

不揃いのどの子も愛しいちこ皿
病院のベッドへ言葉置き忘れ

横浜府 金森 徳三

年金日松坂牛の百グラム

大阪府 大川 桃花

雑草も薔薇もおんなじ芽の形

唐津市 仁部 四郎

たればの顔が集まるクジ売り場

茨木市 藤井 正雄

白黒をつけに來たのに酒が出る

大阪市 神夏磯典子

体重が減れば減ったで気にもなり

八尾市 吉村 一風

いい話ラップしたまま忘れてる

島取市 岸本 宏章

朗報だらけが蟹の餌になる

香芝市 大内 朝子

自転車で登り切れない坂が出来

松原市 玉置 重人

都市砂漠カラスの声が騒がしい

池田市 上嶋 幸雀

父の日の世のざわめきは嘘っぱい

箕面市 広島 巴子

けんかして夫婦で写す閻魔堂

三田市 堀 正和

どうせならヒゲを生やして赤いシャツ

シドニー 森本クックバラ

鳴る喉が止んで眠りに落ちた猫

弘前市 福士 慕情

竹踏んで癒やされている土踏ます

米子市 中井 ゆき

柴刈りの爺ちゃんもなく山荒れる

札幌市 二浦 強一

生きている喜怒哀楽の皺刻み

藤井寺市 若松 雅枝

テレビ見て両手伸ばしてグーチョキパー

鳥取県 竹信 昭彦

ほとけ心おさえ害虫退治する

西宮市 緒方美津子

おなががすくと太つてること忘れ

枚方市 丹後屋 肇

坐禅堂覗くブルーの目のアロハ

吹田市 大谷 篤子

添寝した子もよく育ち反抗期

高知県 いの 静草

山小屋の気分ですらり布団干す

枚方市 海老池 洋

守備範囲だんだん狭くして老後

弘前市 宮崎ヒサ子

忌日来て仏と午後を語り合っ

鳥取市 中宇地秀四

笑い皺初心な笑窪のなれの果て

橿原市 安土 理恵

遺伝子のいちばん上にすわる癌

大和郡山市 坊農 柳弘

泣き言を言えば尾てい骨が笑う

大阪市 森田 明子

アマリリス私の秘密叫びそっ

海南市 堂上 泰女

五月晴れ青を呑み込む大欠伸

松江市 津川 紫見

安心な死を保険屋が売りにくる

米子市 青戸 田鶴

波の音亡母のいた頃ふと思う

大阪市 津守 柳伸

挨拶を返せぬ子等の塾通い

奈良市 尾畑なを江

無意識の繰り言本音つまつて

鳥取市 有沢せつ子

心まで軽やかになる衣替え

大阪市 谷口 義

骨董がことりと鳴つて夏になる

和歌山市 田中 すず

露草が主役はつたらかしの庭

栃木県 岡野すみれ

大金でない年金の使いよさ

尼崎市 山田 耕治

きつかけはいただきますで仲なお

藤井寺市 高田美代子

駅までは自転車後は専用車

高槻市 左右田泰雄

あさつての方を向いている好奇心

美祿市 安平次弘道

視点変えてみれば気になる夏帽子

大阪市 三浦千津子

定年の影を引き摺る日の長し

大阪市 伏見 雅明

ふるさとを捨てふるさとに骨埋める

篠山市 円増 純子

集金はそっちに置いた花談義

神戸市 田中 章子

真夜中にコンビニちよつと不純かな

高槻市 傍島 克治

蹟けど誰も起こしてくれぬ街

八尾市 村上ミツ子

結婚に迷い迷わず離婚する

日立市 加藤 権悟

コメントは同じマイクの謝罪劇

西予市 黒田 茂代

一人になるとよからぬことを考える

鳥取市 土橋 螢

わたくしの寿命がのびるのが怖い

東京都 岸野あやめ

我が儘な脚を押し込むストラックス

和歌山市 喜田 准一

汗掻かぬ意見で無視をされている

藤井寺市 太田扶美代

人生の悲哀話せる人という

寝屋川市 北田ただし

土俵から勝負つくまで出られない

倉吉市 桃谷 和郎

夢と欲あるうちはまだ旅立てぬ

大阪市 津村志華子

それぞれに個性があつて三姉妹

堺市 荻野 象山

老け込まぬように頭を染めている

鳥取県 山下 節子

亡母さんは星になるのか風だらか

高槻市 佐甲 昭二

もう母の小言が聞けぬ里帰り

和歌山県 森下よりこ

子安地蔵へお礼まいりは欠かさない

立川市 柏野 遊花

今日から折り返し点古稀の会

唐津市 坂本 蜂朗

論破して飲み代払う破目になる

米子市 白根 ふみ

赤ちゃんのサイン見逃してはならぬ

大阪市 福岡 末吉

失敗の取り持つ縁で打ちとける

八尾市 生嶋ますみ

親友に打ち明け夫には内緒

唐津市 宗 水笑

古希越えてプールの効かぬ知恵袋

和歌山市 たむらあきこ

ペディキュアで内の女と会話する

大阪市 井丸 昌紀

どきどきとすることもなくやがて秋

尼崎市 小池 幸子

朝の窓日々変化するグミの赤

大阪府 桑田ゆきの

手話弾む木漏れ陽顔に受けながら

松江市 相見 柳歩

日曜の午後には君といたいなあ

生駒市 飛水ふりこ

この頃は自分の短所いとおしく

鳥取市 土橋はるお

メタボリックシンドロームを抱いて寝る

堺市 西村りつえ

一病で知るありがたさとあり

大阪府 初山 隆盛

食材を褒めて板長謙虚なり

吹田市 太田 昭

戦争はすまい子一人死なすまい

鹿児島市 五反田 榎子

戦争のない海に出る水着派手

岡山市 井上柳五郎

匿名のアンケートでも見栄を張る

鳥取市 岸本 孝子

大病のない自分史が宝物

堺市 羽田野洋介

見ない振り自分の心試される

寝屋川市 太田とし子

催促の出来ぬ小銭を借りに来る

吹田市 穴吹 尚士

大勢に従い今日を生き延びる

熊本県 高野 宵草

スーパーでつい買い過ぎた空きっ腹

八尾市 田邊 浩三

ベテランが仕込む相手はフリーター

鳥取市 田村 邦昭

あいまいに生きた命を惜しんでる

岸和田市 土橋 房枝

マイ川柳六十路の中で輝かす

誹風柳多留——一篇研究 24

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦

清 博 美

159 ちゝめると四くたり程の初めの文

山口 この文は特定しなくともいいのだが、まず吉原の遊女からの文であろう。通う回を重ねて馴染みになれば文も細々として情の深いものになるが、初めての文となると書くこともなく、また来て下さい、くらいの内容になる。それが四下りほどだというのである。初手のふみ字をはしたりはだけたり

天四板1

客を釣る文に蚯蚓をのたくらせ 五九二

小栗 賛。三下り半を少し上回る程度。

山田 賛。小栗兄説適解。

ちゝめるとさり状態な初のみ 一二五

清 「ちゝめると」とあるから、長い文だったに違いない。

160 おかしなさるとうらみだとおやちひ

山口 息子に遊ぶ金を貸す友達か出入り先があるであろう。貸してくれるから息子の放蕩が止まらない。恨みだと親父が嘆いている。相手は茶屋か遊郭の付けのこともかもしれない。

三四三

かりる時息子ハ舌かよくまはり 四二四

増田 賛。付けの遊びだと思えます。

清 賛。

161 べら坊で居所の無イ二十けん

山口 二十軒は、浅草観音仲店より左に折れ、伝法院の向側にあった茶店の称。古くは三十三

六軒あり、歌仙茶屋と呼ばれたが、後に二十余戸に減り二十軒の茶屋、あるいは二十軒茶屋と呼び、略して二十軒とのみも。(江戸語の事典)

「べらぼう」は「べらんめい」になって江戸っ子のお得意となっているが、元来は大阪起源で、「べらぼう」寛文十二年(一六七二)の春、大坂道頓堀に異形の人を見ず。其貌醜き事たとふべきものなし。頭するどく失り、眼まん丸にあかく、頤猿のごとし。京師東武におよび芝居をたてて諸人に見せける。これよりかしこからぬ者を罵りはづかしむるのことはとなれり」と『本朝世談綺』にあつて、西鶴の『日本水代蔵』には「便乱坊」の字をあてている。また、そくいを作るときの「籠棒」から殺潰しの洒落ともなっている。

浅草の二十軒茶屋には美人の茶汲み女なども置いたことから、用もない殺潰しでもがおしかけ、居場所が無いくらい繁盛したというのである。

はかま着々べらぼうの居ル二十けん

安満2

まつひるまうかされて居ル二十けん

安四13

小栗 賛。類句からみて、べら坊は浅黄としてよいのかもしれない。礎稿の引かれた(安二

満との外にも、

十九間シ程ハ浅黄ておつふさぎ 安八天2

二十けん目まじろからす浅き居る

安七札4

御はかまへよたれかといふ二十けん

安四鶴2

伊吹 賛。べらぼうは、②不粋。野暮。(二江

戸語の辞典)で、小栗説の浅黄に賛。

清 賛。

162 もとどりを直して孔子たのみましよ

山口 鞠躬如(きつきゅうじよ)は、身をかがめ、恐れ慎むさま(日国)

【論語】郷党第十に「入公門、鞠躬如也。

如不容。立不中門、行不履闕。」(公門を入る

に鞠躬如たり。容れられざるが如くす。立つ

に門に中せず。行くに闕を履ます。)とあつ

て、皇帝を敬つて、王宮の門に入るのに身を

すくめて、恐れ謹んで入った、という文章が

ある。

句はこのことを詠んだもので、孔子も髻を

直して謹んで「頼みましよ」と言つたらうと

いう想像の句。

それにしても江戸の川柳子は漢文の教養が

ある。素読指南のお蔭か。

我が門て鞠躬如たり朝帰

五九二五

清 賛。

163 またくらへつゝみをあてふさげ出し

山口 万歳は全国に色々なバリエーションが

あり、江戸の正月は三河万歳で賑わった。本

来は、太夫が目出度い万歳歌を歌つて舞い、

新年の賀を祝うのであるが、途中からテンポ

も早くなり、才蔵が鼓を受け取つて舞い始め

ると文句も所作もかなりわいせつなものにな

つて、周囲を湧かした。股ぐらへ鼓を当てる

のだからその所作は想像できようというも

の。娘などはここで逃げ出す。

才蔵につゞみ渡すと出ほうだい 安四鶴1

才そうのつゝ、ミもちらん下モが、り 天五松1

才蔵ハつゞみで腰を遣ふなり 末三九

清 賛。

164 まづい事たばねた文をぬいて出し

山口 吉原からの文遣いがきて手紙を渡して

くれるのはいいのだが、束になった中から抜

き出してくるのはまずい。いかに同様な客

に同様な文を書いているかである。商売々々。

くれのふみどうそくかぬけにあり

明五桜4

月のふみ六十帖も書いて出し 天七鶯1

清 賛。

165 そとく指南の居た跡へにうりみせ

山口 煮売り店(煮売り屋に同じ)は、菜、

魚などを売る店で、店で飲食もさせる。煮売

り酒屋、煮売り茶屋などもある。(二江戸語辞

典)

【素読】は文章の意味内容に関係なく、文

字をただ音読することだが、「素読指南」は

漢学の先生、「論語」などを教えて素読させ、

意味内容も講義していたらう。寺子屋のハイ

クラスのようなもので、たいていは禄を離れ

た浪人などの世過ぎの仕事であった。商売気

もなく、繁盛もしないので、看板を上げた

思つたらずぐやめて、その跡が煮売り屋にな

つてしまったというのである。今で言えば横

町のカルチャー教室があつという間にお終い

になって、その跡が牛井屋になったというこ

ころであらう。

子ばつかり出来てみしめなそとくの師

二〇五

清 賛。

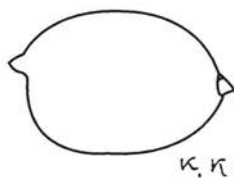
共選欄

檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)



「促す」 川上 大輪 選

もういいと風が促す衣替え

その気にはなつてないのにせかされる

シグナルに促されてる付け睫

立ち読みへ区切りをつけた発車ベル

促されいよいよ幕地の見字に

促され飛行機になり馬になり

促す人の横でゆつくり欠伸する

初めから用意されてるアンコール

改善を急かされたのは事故の後

さりげなく置かれた僕の誓約書

やんわりとぶぶ茶を出した京座敷

督促状混じる郵便受けの鬱

結論はまだ出ませんか永い春

あの二人促さないと日が暮れる

決断を促す針が早くなる

通り抜けできます僕の薄い胸

堺市	羽田野洋介
池田市	栗田 久子
雲南市	菅田かつ子
松原市	玉置 重人
三田市	久保田千代
大阪市	古今堂蕉子
尼崎市	春城武庫坊
横浜市	菊地 政勝
池田市	北出 北朗
西宮市	片山 忠
弘前市	今 愁女
枚方市	丹後屋 肇
可見市	板山まみ子
大阪市	神夏磯典子
大洲市	花岡 順子
弘前市	高瀬 霜石

「促す」 松本文子 選

促されやつと登った坂もある

催促をしないと年金は出ない

自分史に葉はさんだまま生きる

カレンダー丸で囲んだ誕生日

促され勿体ないが捨てる服

箸置くとすぐテーブルを拭きにくる

指揮棒を気にせず弾いたピアノリスト

おしゃれ着のボタン促すダイエット

あきらめず消えた年金追いかける

なりゆきであなたの独楽の紐になる

チャレンジを促す風は向かい風

決断を促す磯飛んでくる

喝采の渦が促すアンコール

いい子だいい子だと洗脳してしまふ

早く早くつい口癖になった朝

せせらぎの音に催促されて起き

鳥取市	岸本 孝子
京都市	高島 啓子
大阪市	岩崎 玲子
大阪市	井丸 昌紀
高石市	浅野 房子
愛知県	早川 遼行
交野市	山川日出子
箕面市	山川 日出子
大阪市	近藤 巴子
京都市	都倉 求芽
和歌山市	田中 すす
鳥取市	春木圭一郎
美祿市	安平次弘道
弘前市	高瀬 霜石
和歌山市	福本 英子
松江市	川本 畔

強制でないがと呉れる寄付用紙
赤ちゃんが泣けば乳房が張ってくる
でちやった婚を促すお腹の子
カメさんに行こかと言われ五十年
お父さんそろそろ書いて遺言書
決断を促す磯飛んでくる

限定と言われそわそわする財布
促すと仏もときに鬼になる
ご返事をお待ちしますというメール
赤ちゃんはまだか出前じやあるまいに
督促状フリ込め詐欺じやないかしら
促すとすぐ樹に登るDNA
促せばまた回り出す夫婦独楽
神様を促す鈴が重すぎる

一日のファイト促す常備薬
鈍足の私を影が振り返る
くちづけをお忘れですと言う瞳
促した方へ流れる雑魚の群れ
反省を促しに来る鳩時計

秀句

天の川恋は一気に加速する
死にたけりや死ねと言われて今がある
カップ麺そろそろ世帯持てと言っ

軸吟

猫に鈴付ける視線が僕に向く

堺市 矢倉 五月

羽曳野市 安芸田泰子

大阪市 澤田 和重

豊中市 谷川 勇治

横浜市 金森 徳三

鳥取市 春木圭一郎

大山市 金子美千代

八尾市 宮西 弥生

尼崎市 田辺 鹿太

海南市 三宅 保州

香南市 桑名 孝雄

西宮市 牧瀬富喜子

紀の川市 宇野 幹子

西宮市 西口いわゑ

大阪市 鶴田 遠野

吹田市 太田 昭

出雲市 伊藤 玲子

出雲市 竹治ちかし

富田林市 中井 アキ

堺市 加島 由一

堺市 荻野 象山

奈良県 渡辺 富子

布団干し天気予報に促される

促せば少年らしく眉上げる

促してみても意固地になる鏡

促され買ってしまった不用品

そして朝また現実がせき立てる

催促はせず銭別として差し上げる

呆けぬうちと遺言状を急かされる

改善を急かされたのは事故の後

促した方へ流れる雑魚の群れ

身辺整理促す老いが背を押す

喋ってしまいそう誘導尋問

メタボリックの腹が促すダイエット

招待の席でもめ事ばかり聞く

催促の金が絆を引きちぎる

促された訳ではないが酌いであげ

促すと仏もときに鬼になる

督促状混じる郵便受けの鬱

税務署が忘れてくれることはない

促されこの高さなら跳べそうだ

促せば母の財布は空になる

どこからも催促されずはつとかれ

その時がくればトマトは赤くなる

これつきり督促状は来ぬように

秀句

軸吟

京都市 榎本 宏子

米子市 政岡日枝子

出雲市 小豆澤歌子

羽曳野市 酒井 一壺

和歌山市 上地登美代

和歌山市 堂上 泰女

唐津市 井上 勝規

池田市 北出 北朗

出雲市 竹治ちかし

羽曳野市 吉川 寿美

藤井寺市 高田美代子

米子市 吉田 陽子

篠山市 遠山 可住

羽曳野市 森下 一知

西宮市 西口いわゑ

八尾市 宮西 弥生

枚方市 丹後屋 肇

東大阪市 谷口 義

芦屋市 黒田 能子

倉吉市 山中 康子

豊中市 吉田あずき

堺市 志田 千代

器

富田 蘭水選



大物の器だ笑顔絶やさな
蒼天に大器晩成まだ信じ
花百態花器に合せてポーズとる
平凡な器に幸をてんこ盛り
この器料理がカバールしてくる
外見も器の程も母に似て
風上に立てぬ器が軽過ぎる
恋とろり器の中の角砂糖
器だと言われ育てた子はニート
老いてなお未完の大器待つ私
柔軟に器に入れる水になる
母だけが器晩成信じてる
湧き水がこんなに旨い手の器
涼しさをガラスの器盛り上げる
眼で食べる器のよさを褒める味
透明な器にアイデアが溢れ
無骨だが愛一杯に父の土器
楽しみな器にのぞく荒削り
哲学が束になつてる器置人
悲しみの器へ水を足してやる
物差ではかれぬ器だと思ふ
ひたすらに返り咲く日待つ器

権 悟 敏 子 歳 子 小 幸 子 ゆきの 安 泰 子 こずえ 川 洋 子 柳 歩 富 子 登美代 弘 風 美紗子 充 子 彩 子 一 知 千 華 幹 子 政 順 子 政 勝

人物の器を測る世間の眼
自信作の重い器は邪魔にされ
正直な器に嘘は盛られない
常識の器が別にあるご縁
満たされた器は我慢いとわな
上に立つ器と言われ夜の街
私膳に器いっぱいイチャゴ盛る
小説小さい器にしか盛れぬ
不器用に生きて達磨がまた転ぶ
戦終えて錆びた器を磨き合う
年金の器置重品になる
還元水飲んだ器が脆くなり
話すたび大きくなって行く器
方円の器を替える定年日
わんぱくへ末は大器の夢を持つ
佳

武 史 藤 朗 典 子 吉 幸 子 裕 之 茶 子 シマ子 慕 情 伊 津 志 螢 像 山 鐘 造 四 郎 淞 丘 靖 鬼 霜 石 一 粋 婦美子 日の出 ちかし 愛 論 酒井一壺

プール

米田 幸子選



楽しんで出来るプールのダイエツト
ふるりの川がわたしのプールです
カラフルな水着プールの水中花
温泉プールスローライフの顔が浮く
サンオイルプールサイドの人魚たち
談合にプールした金喧しい
健康に歩くプールが花盛り
旅プラン立てて資金をプールする
二段腹プールで歩くダイエツト
歩くプールでメタボリックに立ち向かう
呑んべいも飲み代プール胸下ろす
ビキニ着てプールサイドの視線浴び
プールでは歳を忘れた蛙の子
炎天のプールサイドは花ざかり
優雅へプールに火花散っている
プールにエステ枯れないように恋もする
濡らない水着が闊歩するプール
プールでは人魚になれる一時間
羊水のプールのちが弾んでる
リハビリのプールで元気分ち合う
アリバイをプールしておく胸の奥
プールした税の行くへに闇がある

週 行 愁 女 准 一 柳 弘 公 誠 哲 代 庸 佑 ゆきの あずま 檳榔樹 政 勝 敏 子 岳 水 幹 子 くに子 ちかし 美智代 富 子 雅 枝 孝 一 朝 子

ブルした資金で緑化援助する
ブルした金で足りない闘病記
リゾートのブルに映える夏木立
ストレスをブルに流す月曜日
ブルした金に不正の跡がある
相応にブルしている三世代
金メダルの夢を育てているブル
もう少し生きたくブルする命
自分史のブルで溺れかけている
花びらも雲も浮んでいるブル
ブルした資金へ波が立ち始め
裏金をブルしてから蹴つまずき
青空やブル開きと山開き
Vサインブルの波はまだ消えず
水着ショールブルサイドに花が咲く

ここの一番気をブルして卒寿
ブルから上がるカッパの小麦色
シンクロの花が華麗に咲くブル
廃校のブル岩魚を飼っている
ブル開き黄金のような若さだな

夏の夜ブルで月が泳いでた
くやし涙がブルの中へ解けてゆく

母さんのブルで聴いたセレナーデ 備後三子
日本海のブルで育つ逞しさ

主一郎 セツ子 恭昌 徑子 昌鼓 茶子 俊子 鐘造 扶美代 照彦 泰子 重人 次男 雄々 浜丘 道子 一知 順子 螢子 典子 北朗 一粒

傷

松下比る志選



年金のミスこんな人に人を傷つけて
ばあちゃん知らない泣かない傷だけど
妙薬は母の唾ですこんな傷
細工などしない若さの向う傷
近道の石に躓き傷を負う
母さんの呪文で消えた軽い傷
美しい傷だあなたと同じとこ
軽い傷で済んだはご利益と感謝
お日さまに見られたくない胸の傷
妻はまだ昔の傷に触れてくる
言い訳をするほど傷が深くなる
傷ついて他人の痛みがわかりだす
家族にも言えぬ男の傷がある
我を張つてためらい傷が深くなる
夢多い男だったわ傷だらけ
オムライス裏にはきつと傷がある
古傷を思い出させる人に会う
古傷が疼く写経が足りぬらし
少しの傷御破算にするお釈迦さま
傷持つ同士労りながら海渡る
傷心を癒すお酒と本がある
心の傷特效薬は愛だろう

登美代 五月 高栄 幸雀 准一 重人 庸誠 公佑 ばつは 恭昌 北朗 直三 徳三 鐘造 哲男 一粋 幸子 美津子 孝一 英子 朝子 主一郎

身体髪膚親にもらったまま無傷
美しい別離傷口がひろがる
刃こぼれにあなたの傷も映つて
傷つけぬ言葉探している別れ
バツいちと言われ傷物とも言われ
いつの日か背負った傷を笑いたい
火傷せぬ距離で泳いでいるピエロ
会社での傷を癒した子らの酌
傷つけた恋びと今はお友だち
傷痕を時どき覗く花しおひ
古傷がひよつこ顔を出す月夜
広島と長崎が持つ癒えぬ傷
原爆忘生涯消えぬ傷の跡
戦争に負けた傷痕なめている
古傷が痛む梅雨空つばめ飛ぶ

口惜しさが傷を真つ赤に盛り上げる
傷つけた一言悔いて夏になる
花道の途中で古傷が疼く
傷紙めてなめて恨みが消えてゆく
胸の傷一つの嘘が住みついた

マン板の傷は暮らしの詩である
私を洗うと傷がまた疼く

傷もない雲もない今今朝の空 太田とし子
人間も一皮剥けた傷の跡

隆盛 彩子 小雪 正雄 高明 美千代 柳弘 四郎 慕情 霜石 ちかし 螢子 典子 宇乃子 篤子 充子 和郎 智加恵 扶美代 徑子

初歩教室

題一 泳ぐ

三宅保州

私の川柳観から(六)

☆課題は、主役に据えたと課題が生きてくる。課題が脇役になると、課題が生かされず、佳句になり難い。

☆課題吟で佳句を生む秘訣の一つは、作者(自分)が、その課題に変身(成りきる)して考えることである。

☆入選することを目的とする成績主義に陥ってはいけない。良い句を作ること第一の目的とすべきである。入選はあくまでその結果に過ぎない。「入選に驕らず 没に腐らず」

☆他人の句や選者の選句の仕方を批判することは、それだけ句や選者を評価する力がついてきたことでもある。ただし、偏見や感情的な批判は慎むべきである。

【世の中を泳ぐ的な同想句】

原世の中を泳ぎまくってここにいる 那珂子
添一所懸命泳いで今がある私
原世渡りが上手な彼を頼れない 裕之

添世渡りが上手な彼と距離を置く 俊子

原世間なか上手に泳ぐ技で生く

添世渡りの策に溺れていませんか 孔一

原現代つ子世間を泳ぐ術知らず みち代

原うまいこと泳いだあとに恐いつけ 孝明

原裏技の泳ぎトップを目ざしてる 徑子

原トップの座いつも泳いでいる眼 稔

原世の中を上手に泳ぐ苦勞人 みさと

原個性派は抜き手を切って泳いでる 章司

原人の世を上手に泳ぎ小金貯め

【添削・批評句】

次の三句は「泳ぐ」と分り難い句です。

原どの指に止まろうか迷う独りつこ 高洋子

添どつちの水が甘いか指を泳がせる 美紗子

原出勤へ人なか急ぐ今日も無事

添通勤のラッシュアワーを泳ぎ切る

原あるがまま気儘に余生泳ぎたい

添あるがまま気儘に余生泳ぎたい

次の三句は傍線の意味が重複気味です。

原泳ぐのがうまく御殿の家が建つ こそえ

添世の中をうまく泳いで御殿建て

原この歳に水泳パンツで惚け防止 義章

添惚け防止に良いと言われてスイミング

原帰って来いよメダカすいすい待っている 昇

原まず浮かぶ海も世間もあの世でも 實
添溺れないように世間に浮いている
原歩けない内から英語スイミング 亜希子
添まだ歩けないのに通うスイミング
原ゴーグルとプールでないと泳げぬ子 夢
添現代つ子プールでないと泳げない
原兄妹泳いだ海がなつかしい 周子
「なつかしい」は平凡なまじり。
添兄妹で泳いだ海は青かった
原少年の泳ぎ新たな波起こす 柳歩
添少年の前途洋々たる泳ぎ
原泳いでる目を見逃さずお茶入れる 靖鬼
説明過剰で、句意がはやけリズムも損なう。
添泳いでる子供から目を離せない 雅代
原来世は大かき位い習わねば
添来世は大かき位い習いたい
原リストラを必死に泳ぐ扁平足 (柑)信子
添リストラへ扁平足の立ち泳ぎ
原泳げる日夢見るプール試歩の日 房江
あれこれ詰め込み過ぎで、リズムも悪い。
添リハビリのプールへ通う試歩の日々
原不器用な泳ぎに添って共白髪 千恵子
添手と手とり合って泳いで共白髪
原寄り添って泳ぎ重ねる浮き沈み くにこ
添寄り添って泳ぎ続ける共白髪
原章心に泳ぐ気にする介護人 清

リズムがきくしゃくしています。

添リハビリに泳ぎ勧めている介護

原 四十年無理なく泳ぎ団塊へ

添 団塊の世代へ無事に泳ぎ切る

原 泳がずに水着を見せるだけの海

泳がずにと見せるだけが重複します。

添 流行の水着を見せに行く海辺

原 泳ぐより浮くのが不安身の重さ

添 泳ぐより前に浮くのが不安です

原 泳ぐこと何よりたのし夏の海

添 泳ぐのが好きで待つてる海開き

原 ふるさとの川で泳いだ川がない

添 ふるさとの泳いだ川も消えている

原 ネクタイを締めてビル内泳いでる

添 ネクタイを締めてオフィスビル泳ぐ

原 言い訳は無用泳いでいます

添 言い訳は無用泳いでいる眼

原 泳いでる広い仏の掌

添 許されるなら御仏の掌で泳ぎたい

【少し工夫すると良くなる句】

原 横泳ぎする私のマイペース

「私の」と「マイペース」が重なります。

原 暮らしては母が浮輪を持てます

添 困ったら浮き輪を投げてくれる母

原 泳ぎ切るまで続いている応援歌

添 泳ぎ切るまで聞こえてた応援歌

原 ブールサイド泳ぐつもりが日向ぼこ

添 ブールサイド日光浴も兼ねている

原 豆袋腰に泳いだ紀の川よ

添 豆袋腰に泳いだ里の川

原 河川敷引退の鯉勢ぞろい

添 引退の鯉も役立つ河川敷

原 荒波を泳ぎきつての今の幸

添 荒波を泳いで今の幸がある

原 温暖化泳げるようにしておこう

添 温暖化せめて泳ぎを覚えたい

原 人の世は仏も鬼も泳いでる

添 世の中は仏も鬼も泳いでる

原 泳がれず荷物の番を買っている

添 カナヅチで荷物の番を買う海辺

原 金槌がどうにか彼岸の岸にまで

添 金槌も彼岸に辿り着けますか

原 夏休み中に泳ぎを覚えたる

添 夏休み中に泳ぎを覚えたい

【佳句】

原 宮城人魚泳いでいるかしら

水槽のメダカせせらぎ聞きたから

大海を泳ぐ夢見る活け造り

ひとことと見ているだけの金魚鉢

物憂げに泳ぐ金魚に留守託す

溺れない深さで我が子泳がせる

手始めは母のお腹で平泳ぎ

光子

信子

きぬ子

忠子

孝子

ミヨノ

洋子

藤朗

秋星

柁子

節子

萌

宇乃子

雅明

起世子

乃りこ

泳ぎ方まだ定まらぬ定年後

雑魚なりの泳ぎを知った年の功

泳ぎなら昔の河童蘇る

疲れたら背泳ぎで見る別世界

背泳ぎでひととき雲に話しかけ

逢いたさに向こう岸まで泳ぎきる

嘘八百並べて鬼の目が泳ぐ

ハッピーな噂を風に泳がせる

【今月の推せん句】

泳ぎ方ちよつと変えたら友が増え

自らを改めると道が拓けるものですね。

指揮棒の先で泳いでいる音符

発想と表現の非凡さに感嘆します。

散骨は止めてはあちゃん泳げない

重いテーマを、あえてユーモアとペーソス

で詠み成功しました。

ゆつくりと泳ぎ着きたい蓮の華

仏教の究極原理の象徴としての蓮は、天国

でもあがめられていたとか。此岸から彼岸へ

ゆつくりと泳ぎ着き確かめますか。味わい深

い佳句だと思います。

【私の句】

泳がせておこうあなたは回遊魚

生きるとは泳ぎ続けることである

（登載浅れの方は役員が添削等して返送します）

はじむ

千代子

美智代

幸

洋子

直

利子

幹子

道子

前田紀雄

小川イセ

秀句鑑賞

同人吟 高瀬霜石

— 7月号から —

今月の担当で、本当によかった。

僕は今、ラジオで毎日おしゃべり（二応、

川柳の話が中心）をして8年になる。

あとは、新聞や雑誌の連載エッセイが6本など、本職の川柳よりも評判がいい（？）ので正直戸惑っている。

そんな中、6月は特別多くの締め切りがあり、この原稿の締め切りも6月末では正直苦しいので、できれば来月に回して貰えないかなあと悩んでいたところへ（つまりグズグズしていたのだが）ドーンとケラが届いた。

この号には、僕の敬愛する正坊さんの追悼句が沢山乗っていた。なにせこっちは青森、正坊さんは大阪、なかなか会うことはできず、数年に一度行く「川柳塔まつり」で会えたにしろ、そうそう話す機会のなかった正坊さん。もつという教えて貰いたかったなあ。

誤字脱字正坊さんに叱られる

川端 一步

斯くあるべし正坊さんに教えられ

前 たもつ

藤ゆれる正坊さんの計報聞く

山崎 君子

計報を知らせて下さったのは、奥田みつ子さんだった。僕と正坊さんとの関係（？）を覚えていて下さったのだ。

突然でどうすればいいか分からない僕に、「香典は受け取らないらしいし（いかにも正坊さんらしいと思った）霜石さんは遠いので、とりあえず、弔電でも打たれたら如何でしょうか」と言ってお下さったので、有り難くそれに従った。

「正坊先輩は、川柳人として、僕のあこがれの存在でした。その句に、その生き方に：親子ほども年の違う僕に、句をドーンと送ってきて、選をしろと言われた時は驚きました。それが『続・ペンシル』になりました。正坊先輩の背骨に少しでも近づけるよう、句をさたえます。沢山のご指導ありがとうございまして」と、僕の本音を奥様に打電した。

残されたペンシル光る五月間

米田 恭昌

正坊さん引き受けました彬の碑

近藤 正

こんな頼りになる後輩がいてよかった。悪人がこんなに増えて居た日本

板東 倫子

これこそ、正坊さん好みの句でしょう。

五十年ずっと愛した訳じゃない

小泉 ひさ乃

川柳は、本音を呟くといかにも面白い。愛していないわけじゃない。でもずっとでもないのというところが、正直で可愛い。

たまに來てなつかぬ孫とたわむれる

中村 金祥

「孫の句に佳句はない」が定説だが、これ位ズバリ本音を吐露されると孫の句も光る。

一軒おいた隣の人と馬が合い

伊藤 寿美

お隣と仲が良いのにこしたことはないのだが、なかなかそうはいかないものらしい。僕の住む弘前は雪国。お隣と雪のトラブルでい

がみあっている人が少なくない。

掃除機が唸り隣も大丈夫

榎原 公子

掃除機の音が嫌いで（好きな人はいないか）僕のいない時にかけて欲しいと頼んでも結局駄目。掃除機の音は「生きている音」なのか。

けちゃんぼの兄もかかったうまい詐欺

井上 照子

照子さんはケチなお兄さんをあまり好きではないと。騙されていい気味だわと。僕もねえ、妹には常になんか腹の兄ちゃんていたいだけだ、なにせ先立つものがないのですよ。思わくが外れたためがね拭いている

籠島 恵子

前の句の続きのような句。そういえば、僕もよく会議で眼鏡拭いている気がするなあ。アレは眠気覚ましにもなるのだ。

そうそう、恵子さんは6月3日に弘前で開催された「川柳塔みちのく二十周年大会」に遠路ご出席下さいました。感謝です。そして、あいかわらずおきれいでした。

自分史のところどころが消えている

野口 節子

ついこの前までは、この句はたつぷり比喩が効いていると思ったものだが、今は本当にストレートに読めるのだから困ってしまう。節子さんは、年金大丈夫でしたか。

裏金はないがへそくりある我が家

村上 玄也

ユーモアの中にピリッと芥子が効いているいいなあ。これぞ「庶民の文芸・川柳」の見た目のような句。前の句同様、役所に貼りたい。

天邪鬼携帯欲しくなってきた

高杉 千歩

僕はすーっとポケベル派だったのだが、街から公衆電話が消えてやむなく持った。ただ心臓に悪いから急用以外はかけてくれるなど言っている。くるのはイヤだが、かけるのは便利。千歩さんはパソコンもお手のものだから、携帯なんなく使いこなすでしょう。そろそろ年貢の納め時とちがいまっか。

そうそう、僕が「塔」にお邪魔するようになって一番最初に惚れたのが、高杉鬼遊さんでした。でも、鬼遊さんとは数度会っただけでお別れだったし、今度は正坊さんで……。

友達に留守が多いと言われている

鴨谷 瑠美子

出かけるということは、足が丈夫で口も達者（会話が苦手じゃね）ということ。あと、家族に病人がいなくて、多少のお金と時間もないとねえ。聞くところによると、高杉千歩さんもしつちゅうお出かけとのこと。瑠美子さんもそうなら、それは結構なことですよ。

古本市売るほどあるが買ってくる

高島 啓子

僕もそろそろ身辺整理をしようと思っているが、本とCDだけは増える一方。川柳人は常に好奇心旺盛であらねばと言いつつ。

還暦になつて踏み出す未知の国

鶴田 遠野

「塔」の若大将の遠野さん。若く見えますが、還暦ですか。六十歳になると様々な特典（映画が千円とか）が増えて楽しいかも。賽銭はやっぱりはずむべきだった

傍島 克治

サラリと読ませるが、こういう句ほど読むは易し、書くは難しである。僕の理想形。良心ののがめる音で目が覚める

杉本 義昭

この句も、サラリと姿勢が美しい。

人間にもある4H派4B派

海老池 洋

上手い！と思わず叫んでしまった。正直、自分の堅さは自分では分からない。2Bくらいが理想かな。正坊さんは3H？ 4H？

ネクタイを締める日いつも悲しい日

江見 見清

言われてハッと気付いた。佳句です。

雑踏の中でひとりの旗上げる

岩佐 丹吉

正坊さんの背骨をしつかりバトンタッチしているのがダン吉さんなのでしょう。いい後輩を持って、正坊さんも安心して天国に旅立られたことでしょう。

—水煙抄

秀句鑑賞

—7月号から

瀬戸 まさよ

花水木もう日本語が話せます

神野 宇乃子

日本からソメイヨシノを贈られたアメリカは返礼として花水木を贈ってきました。以来、九十五年の歳月が経っています。清々しい花の名、可憐な花びら、日本に根付いた素敵な花と思います。着想に脱帽です。

厚切りの沢庵旨し明治の齒

飯土井 健夫

バリバリと沢庵の音が聞こえてくるようです。明治生まれの人はスゴイ！背筋を伸ばし、しゃんとしている日常生活まで、垣間みる思いがします。

セットした髪をためらうヘルメット

百田 幸

美容院でせっかくきれいにセットした髪。ヘルメットで潰すのは惜しい。でも乗り物は車。ままよ、ヘルメットを被ってゴー！

竹の子を木の芽で和えて日本人

笠原 乃りこ

竹の子料理もいろいろありますね。刺身、焼き、煮る、てんぷら等。でも旬のものとして代々、受け継がれてきた木の芽和えは山椒を素材に独特の香り、色合い、風味などで季節感を出しています。素晴らしい食彩ですね。いつまでも夢捨てきれぬ床柱

伏見 雅明

定年退職になっても、なかなか尻尾の切れないのが人間です。床柱を背にして業者の盆部下の盆を受けてきたかつての栄光の座、昔を回顧して懐かしむ男の未練。

有夫恋手元に淋し春四月

岩崎 和子

一九八七年に出版された『有夫恋』は、個人の川柳句集として一般読者に迎えられた先駆けとなりました。川柳界に新風を送った時実新子さんは二〇〇七年三月に他界。残念なことです。作者のお気持ちよくわかります。

這い這いもあんよも畳あたたかい

山岡 紀子

大人の愛を一身に集める可愛いかわいい赤ちゃん、畳まであたたかく見守ってくれます。安全性、肌ざわり、適当な硬さなど畳は日本

家屋の粋の一つ。この頃、和室のないマンションを見かけますが淋しい限りです。

好物をどっさり作りチャイム待つ

二宮 紫鳳

待ちに待った孫たちの来訪。朝から腕によりをかけ、好物のあれこれをどっさり作って今か今かと待ち受けるチャイム。とてもよくわかります。孫は来てよし去ってよし。

前向きの言葉が好きでメモをする

辻内 次根

アツこの言葉はいいな、生きる指針になりそう。これは参考になると忘れないうちにメモしておく。手帳には今までのすばらしい言葉や納得のいく言葉の山。いいですね。作者の若さの秘密はここにあるのでしょうか。

油断した後ろ姿は正直だ

原田 すみ子

前から見えるところは化粧も、服装も整え、顔付きもにこやかに。でも後ろは？痛いところを衝いておられます。頭隠して尻隠さずを思い出していました。済みません。

発願も結願もまた己が胸

稲葉 洋

そうです。すべては自分から始まって自分に終わるのです。言い得て妙。

■句集鑑賞

米澤 俣子 著

『花の下』

木本 朱夏

さまざまの事おもひ出す桜かな 芭蕉
花あれば西行の日とおもふべし 源義

日本人と桜には切っても切れない思い入れ、独特の死生観があるようだ。ひとり静かに見る桜も趣があるが、仲間や家族と花の下に賑やかに集う喜びもまた、ひとしおのものであろう。一期一会の縁を大切に思う桜……

いみじくも『花の下』と名付けられたのは米澤俣子さんの第一句集である。

表紙を彩るのは満開の八重桜、いのちの喜びが華やかに匂いたつ。

句集名は平成十八年度、路郎賞に輝いた

平和ほど贅沢はなし花の下

からとられている。

まことに平和であればこそ花の下に集い、花を愛で、花に酔い、花の儚さに、生きていく喜びを実感する至福のひとつときであろう。

句集『花の下』は「風に乗る」「小さい幸」「神の使者」「おうむ貝」「恋の告白」「朝日な」にわ柳壇入選句」の六章に纏められている。序文を河内天笑主幹、番傘の日野愿さんが「句集発刊に寄せて」と温かい一文を贈られている。

句集発刊のいきさつを俣子さんはあとがき「以前から自分のこれまでの歩みを、まとめて遺しておきたいとささやかな思いを持っておりまして、昨年十月思いもかけぬ、大きな路郎賞を受賞することが出来ました」と書かれている。

賞味期限と品質保証切れ夫婦

足して二で割れば丁度という夫婦

有為の奥山越えた夫婦に小さい幸

ふたりして入る骨壺焼いている

半分は貴方のためにある命

川柳塔四月号特集「私の宝もの」で俣子さんは「ふたりの宝もの」と題して次の文章を寄せている。（私の受賞を路郎先生はきつと苦笑されたことでしょう。この路郎賞が私の一番の宝となりました。……永年、喜怒哀楽を共にし、協力を惜しまず私を支え続けてくれた夫との、ふたりの宝物でもあります。）

ことほどさように美しい夫婦愛が、句集のどのページにも満ち溢れている。

交通事故で一瞬に母を亡くした私は、母を詠んだ川柳には弱い。一般に母や孫を詠んだ川柳には佳句が少ない、と言われるが俣子さんの母川柳は暖かく、母への想いがストンと胸に落ちて、すこし切なくなる。

すき焼にちよつと遅れて母の箸

遠足は寿司より母の握り飯

辛抱ばかり竹のしなりのような母

家中の咳を知ってる母の耳

句集『花の下』には俣子さんの来し方が、三四〇句の作品として結実している。初心ころには橋高薫風先生のカルチャーを、現在は河内天笑主幹の講座で川柳を極められている俣子さんの、どの作品も骨組みがしっかりして揺るぎがない。いわゆる本格川柳の王道をゆく俣子さんであるが、童画のようなメルヘンチックな川柳も楽しませてくれる。

三月月は星の子供のハンモック

竹とんぼ宇宙散歩に行つたきり

この夜空ナウマン象も見ていたか

星の子と遊んでみたい金平糖

句集は分身である。『花の下』にはふくよかに笑う、肝つ玉母さんの俣子さんが見える。街いもなく、素直な詠みぶりこそは、俣子さんの本質であり、長所であろう。俣子さんの五年後、十年後の作品を楽しみにしたい。

みちのく20周年

記念大会に参加して

— 青森・函館の旅 —

扶美代・ダン吉・泰子

大会の一日

太田 扶美代

大阪駅20時17分発特急日本海は一行13名を乗せて一路、弘前の句会場、弘前プリンスホテルへ。五楽庵さんはじめ、たくさんの柳人の出迎えと歓迎を受けた。

ホテルの部屋の窓から、地元の人がおやまと呼んで大切にしている岩木山がまっ正面に見えた。残雪をいただいた岩木山は神々しいほど美しく、土地の人の信仰を集めているというのが納得できた。

軽く食事を済ませ、みちのく20周年記念句会に臨む。

関西の句会とは句も披露の仕方も違って、最初は少し戸惑ったものの地方色があり、あたたかい雰囲気になれ楽しい句会であった。スムーズな進行に裏方さんの御苦労がしのばれた。大阪からの参加者の中に、上位20

位内2名、次点1名というますますの成績であった。

句会の緊張から解かれ、懇親宴へと移る。

誌上でしか知らなかった方々と親しく言葉を交わせたのは大変有意義な事であったと思う。

その後はこの旅一番の楽しみである本場の津軽三味を聴きに連れて行ってもらった。

「山唄」という居酒屋は、ほとんど貸切りのような形でくつろげた。旅行から帰った今も、ジバン姿の若者達の爪弾く「津軽じょんがら」の迫力が耳底にある。

福士リツの民謡もまたすばらしかった。



大会会場にて

夜になって、まったく何も見えなくなつたおやまの方角に向かつておやすみと言って眠りについた。この辺でバトンをダン吉さんに渡すことにする。

きれいいいどっこいしよ観光記

岩佐 ダン吉

弘前への寝台特急、15時間の旅に続く大会の疲れもホテルでの一夜の眠りにすっかり取れ、翌日は観光へと出かけました。地元からは五楽庵・劬・井蛙・花峯・愁女・ヒサ子・霜石・金悦・慕情・夕香さん達10人が参加していただきました。マイクロスバスをチャーターして下さったの周遊となりました。

太宰治の生家「斜陽館」。なんと太宰は私の愛する鶴彬と同じ一九〇九年（明治四十二年）の生れと気付きました。六百八十坪の豪邸を巡りながら虚無と頹廢的な世界の作品を残し自殺した治と、時代に流されることなく反戦の川柳一直線、二十九歳で獄中死した彬との生き方の違い、それぞれの人生に思いを巡らせました。

二十二メートル、十九トンもある「立倭武多」の豪壮さには度肝を抜かれました。道中は蟹田町の句碑めぐりもあり、初夏の緑の中をゆつたりと散策しました。十三湖の前にしじみ亭の食事会ではミニ句会（選者・五楽庵）で交流を深めました。

人 旅半ば私も月も欠けたまま

慕情
楓楽

天 残雪を胸にたたんで旅終わる 富美子

函館を発つ早朝、私は赤レンガ倉庫群などの港を見下す函館山の麓を走ってみました。北の風を浴び外国人墓地などを巡っている

と、ああ、旅にいてるんやなあ……。企画とお世話までいただいたみちのくの皆さんありがとう。道中で聞いた「あ、きれい、おいしい、どこいしょ」が今も耳に残っています。

それでは泰子さんにバトンを渡します。

(文中 敬称略)

函館雑感

藤田 泰子

一度目は夫と飛行機で、二度目は連絡船でもう20年あまり前になるが東野大八先生が青森で選者をなさるからと大八先生の奥様、薫風先生、田中正坊さん、田形美緒さんと私の6人で夜行列車で青森へ。青森に着くと薫風先生が「あんたら大会に行かなくてもいいから奥様と函館へ行つてきなさい」と言われた。まだ、川柳を始めたばかりの頃で、何も分らないまま、おっしゃるとおり先生に川柳を託し思いがけず北海道に付ける事を3人は喜んで乗船、それが二度目の函館だった。

今回は弘前の皆様に歓待していただき、その上、JR蟹田駅まで送つて下さり海底トンネルを抜けての函館だった。昔のイメージのまま降り立った函館駅に驚いた。プラットホームは長くて300メートルくらい歩いてやっと改札口、駅舎は総ガラス張り、駅前には広いバスターミナルがあり、その周辺には高層のホテルが立ち並び、二十数年前に連絡船に乗って訪れた時のイメージはどこへやら。ホテルの部屋から見える函館市場は昔のままで、やっと函館へ来たんだなと思った。朝、ホテルの周辺を歩いて見ると昔ながらのレト



トラピスチヌ修道院

口な喫茶店が残っていた。大正時代の木造の洋館が残っている函館市場には大阪で売っていないような立派なアスパラガスが新聞紙に包まれて並べてあったり、量り売りの魚もあって観光客目当てだけでなく、近隣の主婦らしき人もお買い物をしている生活感があふれていて、少しホッとした。

そしていつもテレビで見ていた海鮮丼、定食のお味噌汁は蟹の足が二本も入っていた。港には摩周丸が繋がれていて乗船できると聞いた。船にも乗り、市電にも乗ってみたかった心を残し函館空港を飛び立った。あつという間の三泊四日の旅であった。



鶴の舞橋

譲られた席

酒 井 一 壺

この歳（九十四歳）になりましたが、近鉄線をよく利用しますが、最近席を譲られたことはほとんどありません。20分・30分ぐらひは立つたままでも全く苦痛はありません。

少し前のこと、病院へ行く途中、普通電車乗り換え吊り革を握っていると咄嗟に後ろから肩を叩く人がいたので振り向きますと、入門したばかりの若いお相撲さんでした。席を立ち、私に座りなさいと言って下さったのです。

突然だったのですがつい癖で、「実は次の駅で降りますので……、有難うございませう、どうか座って下さい」と断りました。短い時間でしたが、その青年はにっこりと笑って腰をおろしました。

次の駅で下車の時一礼しますと、相手も笑顔で会釈して下さいました。病院で待ってい

る時ふと今日の自分の対応があれで良かったのかと考えこみました。相手のお相撲さんは、私がどこまで乗って行くのかなど全く分かることもないし、また後ろから見ても老人だから座らせてあげようと考え席を譲って下さったのだと思います。こんな場合次の駅で降りる予定であったとしても、若いお相撲さんの氣持を素直に受けてせっかくの席に座るべきではなかったかと、自分の態度をはずかしく思い淋しくなりました。

あくまでも相手の心を中心に考え素直に行動することが、相手の気持ちに伝わる道だと深く反省しました。ほんの一、二分間の車中でよくある小さな出来事ですが、相手はどう考えたでしょうか、相手に大変すまない行為だったと反省し後悔しました。

一瞬の車中のなにげない言葉、行動にも、人の心が動きその対応のむずかしさ大切さを痛感致しました。ごくしやくとした暗い事件ばかりの世の中へ、せめて好意には素直に甘えるべきではないかと、つくづく思い反省するばかりです。

忘れ去られる小さな出来事でも温かい空気を大切にしたいものです。

譲られた席へ座って頭下げ

第19回兵庫のまつり

ふれあいの祭典 川柳祭

事前投句（一般の部）締切8月31日

題と選者 3名共選 各題1句

「三」宮崎たけし・矢沢和女・梶原サナエ

「ホール」佐藤純一・佐藤寿美子・木谷盛男

「自然」濱邊緒佐・田中節子・北野哲男

応募料 1000円 応募用紙に住所氏名

性別、電話、大会への出欠明記

応募先 〒669 三田市弥生が丘5-2-4

堀 正和 (TEL 079-5559-1255)

【ジュニアの部】締切9月7日 1人1句

原則として兵庫県内の小・中・高生としま

す。学校を通じて応募下さい。

「水」斎藤 功・山本芳男・沼尾美智子共選

応募先 〒669 三田市大原1-5-3 12

北野哲男 (TEL 079-563-4593)

主催 ふれあいの祭典実行委員会

兵庫県川柳協会ほか

後援 三田市・ふあうすと川柳社・時の川

柳社・川柳塔社・朝日新聞社ほか

発表大会 12月2日 要綱は後日掲載

路郎忌

本社七月句会

七月七日(土)午後五時半
アウイーナ大 阪

九州地方の豪雨禍が伝えられる梅雨最中、
没後四十二年目に当たる路郎忌本社句会は、
友好各柳社からも多数の参加を得、百十九名
の熱気あふれる例会となった。

お話は今年八十九歳の阿萬萬的氏と聞き手
楽原道夫氏による対談方式。

『川柳塔』の前身である『川柳雑誌』を飾
った柳人達を中心に紹介、作品『銀杏物語』
が昭和三十年の芥川賞候補にもなった岡田某
人や馬詰苦楽公、正本水客等を語る。又麻生
路郎の『川柳は人間陶冶の詩である』という
モットーは、自分自身を鍛え、常に反省して
いくものである等、路郎師の横顔に改めて触
れた貴重なひとときであった。(富美子記)
初出席は石田隆彦、川端六六、加川靖鬼、
阿部茶々、嶋澤喜八郎の各氏。

月間賞は鈴木いさお氏(藤井寺市)に輝く。
(司会)美籠、昭(脇取り)扶美代、蕉子
(受付)光久、(代)清記(直樹)

席題 「転機」

本田 智彦選

左遷地でどっこい転機掘り起す
三回忌済ませ女は蝶になる
残高に暮しの転機迫られる
盲導犬来てから靴がよーちびる
あの時は転機だったと豆をかむ
あの時が転機だったと今思ふ
ロスタイムになつてはじめて目が醒めた
九条の転機にゆれる水田町
風が吹くと変わるわたくしの転機
呱呱の声聞いてやる気が点火する
癌告知が転機輝き出すいのち
流されて強い女になりました
心機一転真つ赤な傘を買つて来る
トンネルを抜けたところにある転機
泣けるだけ泣いたら転機になるだろう
父の死がグレた息子の目を醒ます
人嫌いの転機は土と生きつづけ
聞かないで私が髪を切つたわけ
この僕に転機となった癌告知
人脈がなくなり心入れ替える
人生のはころび閉じて転機する
完熟を食べたいのです自家菜園
失恋が心をまるくしてくれた
足腰の痛み転機を告げていた
飛び込まず転機逃がした池の中
ビーポーに乗せられ禁煙の転機
バレた嘘それが転機に四面楚歌

ふりこ 尚士 富美子 六点 たもつ 弘風 保州 慶一 信久 光久 楓楽 潤子 扶美代 義 理恵 いさお 雅文 弘一 ばつは 保州 保州 五月 富美子 富美子 行兵衛 克己 章久

失敗が転機でしたと創業者
間違ひなく転機となった震度七
さけ弱くなつた転機が来たようだ
かあさんの涙を知つたのが転機
タバコ止めああうまい飯うまい酒

佳

転機とうあろうと酒はやめません
飲み仲間だんだん消えて転機だ
七々が転機わたしは嫁ぎます
日本の転機になれよこの一票
男になる転機ネクタイはめられる

人

しょうがないを後の祭りです春にする

地

ラブラブの転機逆立ちしてみよう

天

これから勝負失うものはない

軸

人生の転機にチャンス逃さない

兼題 「じつくり」

藤井 則彦選

じつくりと説教されて気がかわり
じつくりと豆煮る母の背が丸い
じつくりでよい飛鳥美人よ甦れ
九条へじつくり迫る闇がある
古傷をじつくりあばく妻の勘
じつくりと笹短冊を書き換える
じつくりと聞いてやりたい子の本音
じつくりと見ないで変な気が起きる

和夫 哲子 天笑 賢子 淳司 良知 天笑 ばつは 修 惠美子 元紀 惠美子 新一

理想論じつくり聞いているこけし
 会えるまでじつくり待とう天の川
 じつくりと見たことがない妻の顔
 床上げが近いじつくり粥が煮え
 白い飯じつくり平和噛みしめる
 路郎師の語録じつくり読み更ける
 愛を練り込みじつくり寝かすパンの生地
 窓際でじつくり社史を読む余裕
 己が巢を信じて蜘蛛は動かない
 じつくりと年金記録確かめる
 介護日誌じつくり読めば悔いばかり
 暇な日はじつくり愚痴を聞いて上げ
 じつくりとお化粧します大事な日
 じつくりと考え過ぎて湧く邪念
 太輪の菊をじつくり待つている
 忙中閑じつくりと打つ句読点
 じつくりと風を読んだるトンボの目
 じつくりと手間かけ老母の煮ころがし
 長くない余生じつくり聖書読む
 じつくりと育てるトキよ天を駆け
 じつくりと聞けばニートも八分の理
 雨の日の本棚に来て動かない
 正座してじつくり妻の話聞く
 じつくりと煮込めば丸い味になる
 じつくりと三面鏡と立ち話

雀 舍
 満 作
 楓 楽
 千 代
 希 久子
 保 州
 克 己
 和 夫
 求 芽
 正 和
 扶美代
 天 笑
 光 久
 かりん
 太 郎
 昭
 完 次
 理 恵
 い さ お
 憲 太郎
 直 樹
 惠美子
 集 一
 淳 司
 螢
 尚 士
 朝 子
 寿 子

終章はじつくり見せる父の背な
 じつくりと見つめる医者目が怖い
 人
 認知症の母とじつくり向き合おう
 地
 再会の幕はじつくり降ろしたい
 天
 じつくりと山を動かす策を練る
 軸
 不安な夜じつくりと聴くシューベルト
 兼題 「筋」 木本 朱夏選
 双葉より芳し筋の良さ認め
 曲つて背筋を妻に叩かれる
 脳みそも筋肉らしいアスリート
 筋がいいだけで月謝を払つて
 一筋縄でいかぬ男と根比べ
 筋変えて面白くする癖がある
 筋通す男の眉が動かない
 筋書きのところに四捨五入
 筋論をまた蒸し返す縄のれん
 荒筋を書いた女は渦の外
 筋道を立てて話せば五分と五分
 筋道を立てると変な音がする
 冷やかな視線の中で筋通す
 立派な嘘はちゃんと筋道通つて
 筋書の通りに蔓が伸びてゆく
 筋違いした首のまま飲んでる
 筋のいい弟子にきびしくなるろくろ

扶美代
 郁 夫
 寿 美
 完 次
 善 純
 庸 佑
 きよし
 理 恵
 見 清
 玄 也
 蕉 子
 みつ子
 ばっは
 時 雄
 愿
 准 一
 淳 司
 尚 士
 弘 一
 ますみ
 月 子
 たつお

家系図のどこどこに謎がある
 光背の一筋ことに慈悲がある
 長生きの血筋年金もつやろか
 青筋を立てっぱなしで見るニュース
 揺鉢に亡き母の筋つみれ汁
 生年月日に筋トレをさせている
 就職に有利なコネの筋がある
 腹筋のあたりで日常が笑う
 亡父の骨筋金入りの音がする
 くすり指に筋を通した跡がある
 酒好きと髪のはらはら筋がす
 筋を通したかった四角いスイカ
 その筋がものも言わせぬ春だった
 損は覚悟道一筋の古本屋
 筋のよさやっぱり蛙の子はかえる
 佳
 筋書きが見えて欠席者が増える
 ダイエットし損ね骨皮筋衛門
 路郎師の道筋永遠に消えるまじ
 腹筋のあたりに溜まるオヤジギャグ
 愛された記憶も美しい脊筋
 人
 鼻筋の頑固だけが父に似る
 地
 筋通す人と半日疲れ切り
 天
 筋書きは殯の森で書きかえる
 軸
 なでしこに筋の通っている背骨

正 和
 正 雄
 直 樹
 朋 月
 義 子
 惠美子
 元 紀
 信 子
 千 里
 義
 い さ お
 惠 子
 求 芽
 則 彦
 克 己
 行兵衛
 天 笑
 保 州
 楓 楽
 惠美子
 い わ ゑ
 天 笑
 楓 楽

兼題 「インテリ」 前 たもつ選

友だちにインテリでない雑魚の群れ
 インテリの分だけ呆けが早くなり
 インテリに見えて結婚詐欺師です
 インテリが裏の稼業で稼いでる
 インテリも年金漏れに混じってる
 本当のインテリが居た青テント
 江戸狂歌インテリ層の憂さはらし
 教養のためにこつそりマンガ読む
 嫁いつも六法全書読んでる
 インテリも外反拇趾の靴を履き
 インテリの家系芸人一人出る
 夫よりインテリ臭い犬の顔
 インテリの夫婦で子供生まれない
 学士さまも飽こ練ってる老舗です
 奥さんがインテリらしいお気のどく
 あんだんみてもインテリとは見えぬ
 父ちゃんもインテリゲンチャ平社員
 インテリはたいいて僕に近寄らぬ
 インテリも鉢も怖い使しよう
 インテリは蕪番述べてから食べる
 インテリと言われ喋れぬ河内弁
 インテリの仮面がずれる終電車
 インテリの白いスーツに一目惚れ
 インテリもセレブも私には合わず
 インテリは整形美人に騙される
 インテリを封じ老人会デビュー
 厄介なブライドインテリの眼鏡

公 誠
 雅 明
 六 点
 利 昭
 一 歩
 恭 昌
 桂 作
 喜 八郎
 保 州
 清 生
 哲 男
 一 歩
 ばっは
 修
 智 彦
 笑 司
 哲 子
 時 雄
 遠 野
 美 龍
 恵 子
 俣 子
 義
 美智子
 希久子

インテリの親が先生指図する
 インテリのよめはんテレビなど見ない
 インテリの靴に孤独がつきまとう
 独学でだいたい事知ってる
 インテリというサンキューのタイミング
 佳
 魂は売らずインテリ青テント
 東国原意外インテリだった顔
 この路地のインテリステコで歩き
 インテリの蚯蚓が這うたような文字
 インテリの語尾むにゃむにゃなっている
 人
 インテリが布団干してる日曜日
 地
 インテリですに構える癖がある
 天
 ネクタイの裏もおもてもインテリだ
 軸
 選者の中にインテリらしき顔の人
 兼題 「通う」 竹森 雀舎選
 彼岸会に通う仏に会いたくて
 巣離れへせつせと通う親つばめ
 ふるさとを恋う全山へ風通う
 ありがとう人と人とが通い合う
 同じ血が通って気性陰と陽
 この道を通うと出合う母の窓
 一言で心の通うありがとう
 蕉 子
 愿
 湖 風
 月 子
 恵美子
 耕 治
 賢 子
 天 笑
 靖 鬼
 ダン吉
 喜八郎
 楓 楽
 恵美子
 螢
 憲太郎
 寿 子
 能 子
 俣 子
 岳 人
 孝 一

茶封筒の中から温い血が通う
 会えばただ領き心通わせる
 絵手紙に心通わす友がいる
 近未来ビタパで通う天の川
 血の通うことは胸の奥で受け
 ゴミ出し日ちゃんと通って来るカラス
 夫唱婦隨心の通う妻がいる
 この子らに武器持たすまい通学路
 同じ花咲かせて心通い合う
 ありがたい心が通うボランティア
 輝いていたくて古書店に通う
 文鳥と心通っている孤独
 血の通う話のできる無二の友
 ほえんで温い心が通い合う
 通い合うものが途切れて倦怠期
 それなりに心通わす距離にいる
 梅雨晴れ間心の通う友の声
 移植して半年通いあういのち
 無遅刻で通った母校今はなく
 仕上げの目入れて人形血が通う
 痩せたなど言われて図書館に通う
 日替りで通う整形目の治療
 久闊の掌と掌に通う熱い脈
 通いなれた道ではひとときの詩人
 天の河こころの通う螢あり
 佳
 雲一つなぜ心が通い合う
 汗ふいて土に心を通わせる
 新 一
 正 明
 (久) 千代
 富美子
 完 次
 幸 雀
 三喜夫
 一 歩
 (志) 千代
 善 純
 扶美代
 瑠美子
 朝 子
 賢 子
 遠 野
 美 龍
 みつ子
 扶美代
 正 明
 (久) 千代
 恵美子
 萬 的
 寿 美
 恵 子
 義 子
 千恵子
 和 夫

お世なお世

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

和歌山三幸川柳会

喜田

准一報

列島をじんわり食べる温暖化
ピカピカの遠足の列蛇行する
二列目ではよいチャンス待っている
食卓の序列を変えたハンバーグ
しの字くの字の列が楽しい保育園
葬列で目立っていますすびす顔
寝るだけで治った体戦中派
眠る間も大樹の陰で身を護る
花嵐今夜は風の音と寝る
春眠にはよく魔法かけられて
寝違えた首がピカソの振りをする
雑魚寝もまた楽しからずや旅袍
惜春の島は緑に包まれる
寝溜めして体内時計狂わせる
有難く拝む寝釈迦の足の裏
それもまた折る形の涅槃像
花嵐に包まれ忘れゆく憂き世
小包が届いた嫁のプレゼント
純粹に夢を包んでいる書

宏夫 起世子 登美代 町子 当代 徑子 瑛子 義雄 紀子 美枝子 碧 みね 公子 和子 朱夏 保州 一歩 信子 次根

無造作に包んでくれる朝の市

夕焼けに包まれ今日も無事終る

包みからぼろぼろこぼれ出す本音

包まれて包んで夫婦らしくなる

焼き芋に新聞紙がよく似合う

毒少し入れたまじゅうなら売れる

包帯が取れてあれこれ出る文句

不眠症ちよつとお酒の助け舟

背信の酒は五臓に突き刺さる

ウオッカもテキーラも沁むバスポート

重責へ男は酒を武器にする

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

欲の穴掘ればほるほど深くなる

波風を立てぬ気配り三世代

世話になる嫁にチョロビリ花持たせ

聞き役が時に正論吐いている

後で来る結果気にせぬ軽い口

しばらくは丸秘にしとくアデランス

出すだけで元気になる鯉のぼり

夕張のメロン給料一年分

育くんだ古木が主の後を追う

待ち兼ねたように蛙の大合唱

逸れてゆく牛の毛並は褒めたいけど

もう少し横が痒いが届かない

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

お月様お供に犬と散歩道

叱られて夜道に使いさせられる

和代

昇

イセ

八重子

幸

桂香

章子

准一

かずみ

幹子

孝子

純子

ひかり

あきら

八重子

賢

よしみ

かおり

いさむ

はつ恵

寿々女

放任

弘

貞月

和代

克己

和代

和代

和代

和代

和代

和代

道に迷い恋にも迷う夜もすがら

妄想の恋のゲームがおもしろい

世はゲーム男で変わる浮き沈み

騒がれて聞き直っている浮気

心配を打ち消すことく騒いでる

老いたれど赤い血潮はまだ騒ぐ

日曜日になると夫も早く起き

車椅子背中伸ばして独り旅

女いま背中を拗ねているしぐさ

風見鶏論吉の方を向きたがる

しがらみを脱いで自由の風に乘る

風五月潮の香りの中に佇つ

骨太を自負して生きる男の背

岸和田川柳会

土橋

房枝報

生返事妻は一語も逃がさない

カタログで買えば失敗身に合わず

甘口の顔になつてる爺と婆

ヒロシマに新緑萌えた日を想う

新緑が昨日の刺を抜いてくれ

新緑の中にころ寝の家族連れ

新緑をあおぎ見てたら鳥の糞

新緑のおゾン吸って生き返る

新緑もか馳走のうち汽車の旅

甘口の言葉でかける黒い罨

ティタイム甘党の輪なごんでる

じいちゃんの孫のしつけの甘い口

だし巻の甘口だけはご勘弁

地平線人の営み小さ過ぎ

和代

あや子

八郎

太一

美弥子

賢子

朝子

シマ子

三重子

雅文

秀夫

敏子

湖風

愛論

洋

浅子

植代

恵

美花

幸子

香代

珠枝

房枝

泰弘

ふみよ

けい子

東吉

ゆい

ゆい

ゆい

ゆい

ゆい

宮んでここに幸あり山の小舎
身に合った営み励む果報者
肅肅と法事営み後で採め

根性で営む能登の露天商

うやむやな男ひとりがよく喋る

うやむやで丸くおさまる事もある

うやむやに出来ず傷口深くする

うちうちのいさかいなればなんとなく

カタログの束がゴミの日待っている

生保カタログ美味い話並べ立て

カタログに明日の自分をおいてみる

買ってから他社のカタログ集め出し

葬儀屋のカタログ覗く齢になり

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

言い訳に知恵を絞った跡が見え

白状をするまでゆつくりと絞る

ブライドはまだ捨ててない空の青

青い目も踊る阿呆になつてゐる

遣伝子の組み替えバラも青くする

ポケットに入れて帰ろか青い空

地図のない旅です母を送り出す

近道はあえて書かない父の地図

一生の白地図余白狭くなり

震度六生まれ故郷の地図変わわり

地図のない百鬼夜行のけもの道

シャボン玉いっつも夢見る世界地図

待ち合わせゆつくり回る花時計

ゆつくりと余生楽しむ花暦

岩夫 寿海 俊昭 仁緑 ダン吉 淳風 弘子 醉粹 蛙城 和美 笑司 守

余熱まだ残しゆつくり君と古い
ゆつくりとリハビリに行く小半日
ゆつくりと花が背に降る露天風呂
風みどり五感ゆつくり遊ばせる
玄関の魚拓お世辞を聞き飽きる
大漁の舟を笑顔が待っている
引き下がるわけにはいかぬ雑魚の意地
骨抜いた魚を今日も買いにゆく
捨てたはずのふる里恋し回遊魚
母の日も無言のままの回遊魚
どの波も乗れずに雑魚のままで古い
遠くから見ても君は美しい
歳月が謎をやさしく解き明かす
歯車を大きく回す今日の妻
冷奴崩し責任とらされる
スーザーの曲は五月の野を駈ける

松露川柳会

小西

雄々報

恐ろしい河童の話風化する
雨降りは農家にとって休息日
降りだして帰ろそびれて上り込み
降って欲しい晴れて欲しいと農作業
雨降って遠足帰り虹を見た
浸水へ無情の雨は降りつづく
雨が降るやさしく吹いてほしい風
ロマンだな星の降る夜いとおしむ
ほどほどの雨がほしいと苗がいう
流れ星ロマンの世界誘いこむ
俄雨気になり布団まだ干せぬ

尚士 祐作 義一 幸雀 重人 比ろ志 泰雄 孝一 乃りこ 公子 昭二 典子 葉子 求芽 郁夫 半蔵門

佳句地十選

(7月号から)

山本玉恵

手を離れ風を掴んだ竹とんぼ
時どきは狸寝入りもして同居
髪を撫で心うるおす千の風
青い目も混じる受験の百度石
五線譜に人生という靴が鳴る
朱肉拭く決意はとうにできている
疑わず並んで行けば戦になる
母の帯辛酸なめたあとがある
嬉しくて悲しくて行く母の杜
とっておきの涙が紙コップの底に

優勝のパレードに降る花吹雪

川柳塔唐津

仁部

四郎報

美容院で充電してる雨の午後
汗をかく後輪道を選べない
晴れ姿見たいわが娘も年がゆき
妻の留守ロマン顔出す昼の酒
大男酒と涙の演歌道
町内の会議上座は空いたまま
前立腺講師の顔をじっと見る
復興の一步名もなきボランティア

竹原川柳会

時広

一路報

春霞島は観音様になる
ふる里は僕のこころの宝島

蘭幸 力

雄々

晴翠

勝視

蜂実

水笑

四郎

輝夫

高明

高

明

高

明

高

明

大らかに開放的に島育ち

どちらから吹いても島の風やさし
島浮かぶエデンの海へ夕日落つ
大声で挨拶島に朝が来る

年金を杖に自立という老後
年金は米寿を生きたる命綱
年金日軸に生活回り出し

年金を親子二代でもらうてる
満額が出るまであなただ働いて
エコ写真真鼻がパパ似のボクの顔

私も父も得意料理はカレーです
美しい国は汚職の花ざかり
健康を心の的に暮します

的しほりもう一度しほり立ち上る
黄金的的笑顔の妻でした
もう一つの的を探して旅人よ

父という大きな的に矢を放つ
高い的ばかり見上げるから転ぶ
都合悪い的的のはずれたことを言う

的はずれもない優しい風に逢う
子午線の的をしぼってまだ未完
動かない的にどうして当たらない

的ひとつ真ん真ん中に母が立つ
泣いて生まれ笑って還る日を的に
的にする父なる大樹視野にある

射落とせば次は私的になる

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

お目出度い相談受けてお金舞う

汎美

貞子

節生

節夫

民恵

栄恵

輝恵

年子

京子

史子

千枝

太虚

房子

規代

笹舟

笑子

千代美

静風

慶子

幸子

相談が決定よりも後になり

ノーサイン夫婦の絆息びたり
やりくりが出来ずシャッター閉めたまま
古稀祝う未だこどもだと言われても

前向きに生きる八十路の顔の艶
艶のある声のセーブルに引っかかる
缶が浮くそれでも人は生きていく

新緑の薫り運んで千の顔
絵手紙に込めたあなたの思いやり
テレビ消す妻が目を開け見ていると

笑顔でね今日も明日も遍路旅
人生の運転今は妻仕切る
太つちよの兄嫁昔準ミス

運転をせずに無事故の賞もらう
団塊のベテラン惜しや野に下る
体調の機嫌とりつつ木の芽どき

期限切れか脳が誤作動ばかりする
相談はしても決定権は妻
アリバイが見えかくれるサスペンス

のはんと馬齢重ねて老いたのし
大家の絵ノスタルジの旋律が
バスツアーバスより早く待つ幹事

包丁の腕惜しまれる酒の量
艶っぽい美女が頭に棲んでいる
情熱が溶けたしらしくなる夫婦

親を亡くして小言じわりと効いてくる
残飯の掃除がたたり肥満体
バーベキュー板が悲鳴あげている

団塊の余生じつくり夢を描く

孝子

和子

ますみ

ミツ子

君江

耀一

民

知佐子

美代子

莊治

博子

俊子

たえこ

正春

浩三

幸枝

晴美

宏

美はる

欣子

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

頑固だが強くて硬い父の芯
摘芯をして腋芽から育てられ
換え芯も持たないままに生きている

もくろみの芯が沖つてゆく大樹
梅干の芯に天神さまおわします
鉄くずも金になる世へ芯の人

されどされど芯は満点銀杏よ
まだ橋の架からぬ図面ばかり視る
愛という設計ミスに運も逃げ

この顔はだれの設計ミスですか
空白になった余生の設計図
青春の楽譜砂丘に埋めてある

高齢化国の設計狂いだす
年金へ終の設計まで揺らぐ
爽やかな老後設計図は持たぬ

充分に練った設計反古にされ
設計図みては花壇の模様替え
談合の設計持つて天下る

四面楚歌そしてブライド丸くなり
ブライドを鼻にかけても年をとる
ブライドの漬物石が味さめる

駆けっこに敗けて泣いてる孫がいる
ブライドを少うし若く生きてみる
ブライドの欠片が邪魔をして困る

ブライドはほどほどがよい事もある
姑というブライド神の座に返す
ブライドの大黒柱ゆるがない

みどり

富久江

みさ子

諷人

節子

弘子

孔美子

八重

睦子

公彦

照彦

彩子

弘子

和子

盛桜

美恵子

重忠

忠良

富久江

菊乃

久枝

武彦

永子

かおる

武子

きみ子

くに子

ブライドがどつかとぐらかいている
ブライドの高い貧乏神と住む
ブライドを許す靴下はいてゆく
はるお 実満 螢

長柳会 村上直樹報

エプロンを脱ぎ残照の蝶と舞う
猿と人進化的過程枝分れ
衣脱ぎ虚心坦懐本音吐く
鮎と鞭上手に使う良い上司
進化する孫と遊んで教えられ
グラビアの美女達眩し脱ぎつぶり
十五歳ハニカミ王子にシャッポ脱ぐ
脱皮してわがもの顔の蟬しぐれ
加齢臭すぐに脱いでと急かされる
あれとそれ進化が悪い長寿著
濡れ方がひどいと妻にうたがわれ
奥の手のヌードで稼ぐ写真集
物干しに濡れて淋しい妻が留守
進化する頭脳に退化する育児
男氣があると言われて脱け出せず
口に咄入れたとたんに鳴る電話
黒髪濡れ羽色など今は過去
セーラー服脱いで女の顔になる
何度でも蝶になるため脱皮する
定年で脱いだ飯面を脇に見る
ニールツク着たいけれども今日は雨
手に取ってまぜつ返して買わぬ客
お別れの手紙涙に濡れたまま
お仕着せを脱いであつさり子等育つ
直樹 輝子 靖博 もこ 武男 明子 たけし 靖子 不二雄 三和子 よしお 正一 マサ 和代 敬二 正博 芳野 一慧 史 幸雄 淳司 登美子 けい子 富美子

進化論絵文字造語も仲間入り
こだわりを脱いだ余生が軽くなる
進化から取り残された温い路地
詫むの子を許した母の目も濡れる
和子 正子 正美 英美

川柳ふうもん吟社 夏目一粋報

まんが良い神と同棲しています
煽らないで下さい残り火が揺れる
幸せな記事の特ダネ待っている
擬似針に引っかかるほど飢えてない
いざ出陣おんなのいくさ特売日
しかし人は他人の痛みに鈍感だ
婆ちゃんのおところ孫のターゲット
退院の雨に生命の息吹聴く
一列車遅れて事故をまぬがれた
まんがよければ水の流れる変えられ
年寄りにターゲットされ荒稼ぎ
背伸びしてたつたひとつの夢を追う
まんのよさあなと会って五十年
まず味方騙し特ダネスツパ抜く
火種ない噂を蒔いて特ダネに
まんがよく脳梗塞の途中止め
ターゲットは鯛だ雑魚には目もくれぬ
一匹の雑魚特ダネを狂わせる
ときめきの色に私が染まりそう
キャンセルで命拾いのまんのよさ
ええまんに巡り合わせて趣味の友
特ダネを追って彼女を追えずいる
特ダネの一人歩きで大騒ぎ
洋々 一瑤 圭一郎 美恵子 夢路 美雪 一京 秀四 雅女 春名 昌鼓 稔 無限 茂登子 善夫 義徳 諏訪男 (前)孝子 孝男 志げ緒 由美子 金祥

ちよび髭がびくびくと嘘を言う
口上手しかし内心読めません
頼み事しかししかしと断られ
森の風さ迷う人の道しるべ
特ダネを抜かれ仲間と苦い酒
ターゲットイケメンよりも頼れる子
学あれどしかし常識ない人だ
あしひ はつ江 節子 益子 毅 喜子 一粋

西宮北口川柳会 黒田能子報

役退くとなんと清しい空の青
役どころわきまえ吠えぬ犬となる
悪役になって子育て無事にすぎ
まだ役になつていますと自画自賛
プリントの山ひとつずつ役こなす
脇役に徹する人の気の配り
人間の弱味知つてる札の束
束になりかかれど叶う女でない
束縛をされてよいに好きになる
札束の重さは知らぬ小銭入れ
結束を乱す利害という魔物
鍵束の一つを外す鈴音色
雑魚の意地遠い昔を小出しする
湿布張る届かぬ背中遠すぎる
鏡見て遠い昔の写真出す
あの頃のわたしが活きる遠い日々
蹴られたらすぐけり返す囲碁たのし
今を越える蹴りたい玉を探してる
忠告を蹴った若氣を子に語り
今ではもう蹴つたら足が痛むだけ
美籠 哲子 順子 歳子 求芽 光子 朋月 五月 忠 房子 折杭 美代子 萬的 奮水 弘子 千代 松煙 直 章子

蹟いた石よく見れば蹴った石
 紫陽花のような女にまた蹴られ
 人は鏡引き合う人と友になる
 浮き沈みあるが明日へ夢つなく
 抽出しの奥にしまったバラダイス
 幸せよ今が一番言つた母
 夕暮れのお目合いし月見草
 聞いたことないけどあるんだ虫の息
 山寺の小さい御仏黒光り
 万緑に歩幅大きく風を切る
 川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

正和 江美 婦美子 光久 紀乃 利子 悦子 二英 いたる 喜代子 登美代 保州 夕胡 英子 あきこ 輝子 豊太 寿子 稚代 三喜夫 小雪 徑子 精子 紀子 愿

爪の艶今日は体調良さそうだ
 午前様今夜も妻は爪を研ぐ
 育つ芽を伸ばすエールは惜しまない
 爪跡を刻む台風名を残し
 逆転へエールが跳ねる外野席
 私にもエールをくれた千の風
 挫折した汗はエールを惜しまない
 ウエディングドレスへエール絶やさない
 夜の底に明日の生気を貯めておく
 旨い物食えば生気が甦る
 貧乏だった青春生気満ちていた
 ベースアップ職場に生気とりもどす
 たつぷりと生気を溜めている昼寝
 川柳塔まつえ吟社 三島 泓丘報

紀久子 佐一 和子 正博 利治 順子 富美子 さち子 泰 准一 克子 三男 大輪 町紅 紫見 治代 薰 ちえこ スズコ 浜丘 昌枝 畔 多喜 螢 和歌子 幸子 多賀子

演出の小道具ぐらい持つてます
 孫たちの演出親の情を買い
 羞恥心ぐつとこらえて演じ切る
 静けさの中で溶け合うコンサート
 きれいな虹だ神の労りかもしれぬ
 労りの言葉がつづく敬老会
 お互いに心労る夫婦独楽
 労りの言葉はまたぬ冬の海
 ご苦労さまゆつたり宿の露天風呂
 余力あるべしは労り忘れない
 嬉しくてつい口ばし内緒ごと
 遠い耳わざと内緒の語る
 雨の中内緒話も濡れている
 内緒のはずが自慢をしてくる
 また一つ妻に内緒が増えました
 内緒にと話して見たら知っていた
 南大坂川柳会 吉川 寿美報

知恵子 小生 幸 礼子 玲子 蘭 房子 桂子 博子 日出子 政子 たけし 柳歩 静恵 茂美 注湖 昌紀 なぎさ ただし 修 観子 直子 弘子 更紗 勝弘 一歩 ルイ子

紫外線のガード気にする初夏のウツ
便利さをガードするのは自己責任
ガード下誰かが捨てた粗大ゴミ
人の輪のガードがあつて生かされる
ガードレールに白い供花がうなだれる
身構える自信の無さの裏返し

戦後史を語る鶴橋ガード下
手の温みやつとふくらむヒヤシンス
ふくらんだ欲は神から裁かれる
一色を足して明日をふくらます
若葉風夢を大きくふくらます
新茶いっぶく話上手と聞き上手
何も彼も覚えていたらバンクする
百までも生きたら困る預金帳
恥しさも馴れて手を引く認知妻
無職だがサムライですと書いておく
はつとする夕陽の中の鬼瓦
人類への警告だろウエルニニヨ
過去未来よりも私は今が好き

川柳花の輪

妻谷

重風報

母の味塩ひとつまみ台なしに
手伝つたつもりナースに叱られる
お土産がとんだやぶへび角を出し
パソコンに通じやぶへび字を忘れ
冗舌が過ぎて大蛇顔を出す
独り寝のホテルで初の聖書読み
コップ中賽の目を読む丁か半
カタカナ語読めても意味がわからない

祥昭 忠昭 萬一的 集一 千里 東吉 柳弘 福世 志華子 栄子 楓楽 洋 重人 あや子 章久 郁夫 ばつは たもつ 弘風

読むほどに窓白み来て寝る間無し
母さんの文回し読む七回忌
手足萎え伸びる寿命をもて余す
背丈だけ伸びて大人になり切れず

川柳塔なら

坊農

柳弘報

さりげなく自慢話を止めさせる
一年生スキップ踏んで門くぐる
四十年添えば水です空気です
横文字を殊更ならべ悦に入り
ダイエツト自慢してるが鞍が増え
園児の絵自慢のママは宇宙人
これだけが自慢話だ聞いてやる
英語塾いっばい夢を盛っている
きれいでしょ花の自慢を午後の庭
鑑定団父の自慢に五千円
立志伝誇った父の紙おむつ
自慢ではないが人間やってます
嬉しさと感極まった娘の答辞
逢える日の靴は嬉しいリズムとり
ブナの樹の言葉がすこし解ります
快復が間近か嬉しい普通食
酔顔と並んで眠る塾かばん
好きな娘に逢いたいだけの塾通い
競争の塾で人間見失う
とうろうも松も苦むす庭があり
ばあちゃんの自慢はなしに熊が出る
向こうから和解求めてくる握手
認知症そして日本一の母

一笑 一幸 音成 薫 カズ子 満作 博一 千梢 美はる 利昭 蘭香 章久 弘風 富子 六助 寿美 一風 のりこ 弥生 理恵 恭昌 比呂志 笛生 隆盛 美千子 真理子

痴楽症嬉しい顔を忘れない
殊更に親学なんて国が言う
霞草の自慢はたかが知れている
生かされる命二分粥三分粥
雑草も偏差値めざし塾通い
漁火がなおに切なくする逢瀬
イソップの森を忘れた塾靴

川柳茶ばしら

板山まみ子報

聞くだけは聞こう話は最後まで
お出かけに省エネ社会で扇子もち
大空を鳥とさ迷う千の風
暮を鳥のやめにした千の風
再婚をしますこないで千の風
窓からのエール気合いの入る朝
CTで腹部撮られて顔隠し
千の風色つきならは見えるのに

八尾市民川柳会

富西

弥生報

きつちりと決着つけて風が立つ
長い長い一日だった外は雨
コヒの渦とわたしの挫折感
思い出し笑いで一日が暮れる
散歩道小さな花を愛しむ
安倍総理物心両面靖国に
利子が利子生んでサラ金肥らせる
目標を下ければ光るものばかり
晩学の座り心地のよい世界
本物の恐怖をくれるコースター

茂雄 朝子 良一 道子 孝子 國治 秋雄 秀水 文男 遡行 かつ子 美千代 幸子 百合 まみ子 賢子 あかり 扶美代 秋雄 民 紀雄 ますみ 欣之 宏至 浩三

嘘誠切は正直に返る

一日がぼんぼん弾むうれしい日

ツイタチは小言もらいに墓参り

近道を知って遅刻が多くなる

闇雲に走った道も電池切れ

小姑に重箱の隅つつかれる

駄目押しを願うと機飛を打つ四番

一滴の水がきつちり花咲かす

にんげんの肥満の裏で病む地球

もつたないがメタボリックに加勢する

道ならぬ曲った道を進んでた

梅雨寒むの一日老母といる温さ

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

イメーゲンジそつと鏡に開いてみる

お日さまがもつたいなくしてお洗濯

もつたいないのころ異人に教えられ

お線香あげて仏とまた涙

泣き言はさらりと風に乗せている

腐るまでもつたいないと捨てきれず

変身にあなたの愛がワンタツチ

爺ちゃんなら泣き止むからと抱かされる

人形に泣かされて出る文楽座

泣く遺族無慈悲なマイク追いかける

もつたいない短気がおこす辞表劇

泣きこととは妻は娘に俺は大

減茶苦茶の年金介護不安です

もつたいない去年の服がもう着れぬ

もつたいない袖も通さず死んだ父

加央里

朝子

一風

いつみ

森子

柳伸

桜竜

はじむ

國治

寿鶴

春蘭

弥生

娘の彼へ思わず渋いお茶を出す

もつたいないそつとまで配慮いただいて

泣き虫が社長を名乗る同期会

よみがえる泣く事だけの人を恋う

老いもしよう泣いて育った娘も知命

川柳ささやま

遠山

可住報

大きな食卓掃省の子等待つ

人生航路ひょうたんからコマが出る

待ちぼうけあんな彼女がまだ好きか

現金が帳面よりも少ないぞ

見栄はらずこつこつ生きた共白髪

夏を待つ夢を呼んでる苗売場

こつこつと老いの暮しの泣き笑い

こつこつと貯めて浄土へ六文銭

こつこつと研究成果受賞する

古漬けが福神漬の家の味

噛み合わせ平和と合わす鍵を待つ

同じもの食べて肥えてる痩せている

平凡という幸せが来て米寿

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

招かざる老いひしひしと寄ってくる

病院に行くのになぜかおしやれる

ライバルに招かれ酒がほろ苦い

お招きの手前祝儀に気を配る

はげ防止二人でバズル解き明かす

偉い人遅刻の訳は咳一つ

時効という流れに沈む世の有情

黒兎

久子

幹治

契子

勝

純子

美緒子

二英

文子

美紗子

靖子

多美子

照代

かほる

つや子

哲男

可住

数日の命を燃やすホテル川

月に一度法話を聞きに寺参り

寝静まる秒針の音リズムミカル

招かざる黄砂堂々海渡る

お荷物にならないように生きたいな

色あせた母の形見は黄楊の櫛

長電話うっかりすぎて鍋こがす

わたしの影がいつも元氣についてくる

尼崎浜川柳会

山田

耕治報

潮騒のしぶきに恋の詩をつづる

恋はもうあつからんと雨上がり

詩心生れず壁を越えられず

老いてなお青春の詩が胸をつく

迷ってる背中を押した俄雨

動物園化ける素振りのない狐

つらい時この詩何度も口にしたり

しつとりとした娘だけれど酒豪とは

シシオシだけが今夜も起きている

しつとりと生きるひと日の眉を引く

信じてた男が乗せた泥の船

反対に姉はしつとりしています

漢詩から学ぶ道徳道標

秋刀魚の詩秋刀魚の煙吸いながら

乳液をたつぷり明日は退院日

これからはお託び上手な人を据え

紫陽花がまだかまだかと空を見る

いいことがあったから買う花の種

自己主張だけは譲らぬ青りんご

純

幸子

東園

勝巳

武庫坊

矢薫

忠

年代

耕治

晴美

紀乃

きよし

江美

桃花

靖鬼

よし子

美代子

政江

里江

五月

耕治

亀子

朋月

イサミ

正治

勝巳

孝一

美龍

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

遺伝子がすぐ居酒屋へ走らせる
パソコンはへそのまがつた友である
落日を間近に見える窓に立つ
ガッチリと熱意伝わる握手する
左遷地で赤提灯の友増える
転んでもガッチリ持っていた王子
悪友のおかげで酒が飲めてきた
友達には山ほどあってまだ独り
メル友にまだまだなれん操作ダメ
友情は永遠にしてお下げ髪
友達顔して猫が離れない
友達から貰う笑顔とエネルギー
風さんと友達でいる葱坊主
間近では見えない月の美しさ
幸せな余韻間近に聞くイビキ
本当の友だタイ焼き半分こ
ガッチリと今日のいのちを確かめる
ガッチリと見えるでしょうが気は弱い
清らかなおんな友だち五十人
海原のようです友の草書体

高知川柳社

川竹

松風報

美ツ千 尚子 和子 京子 美知江 龍枝 かつみ 芳江 幸恵 くに おあづま 雄人 ひろこ きみ子 重忠 螢 完司 石花菜 宣子 千鳥 悦子 正躬 房恵 栄美子

口実を見抜いた母の目が笑う
大臣の口実筋が通らない
笑い声こぼれ夕餉の灯が温い
お互いに声掛け合って老いの坂
一票の重みへ声も暖れてくる
只今の声が元氣な答案紙
大声で好きだと言って見たい人
電話口喜怒哀楽が声にある
声色を変えて電話の父元氣
砂へ書く声も出せないラブレター
仏壇へ行つて来ますとチンを打つ
一票の声の重さを知るダルマ

川柳大坂

長井

善純報

みどり 暖 良雄 和江 幸子 功 典雄 京子 まき子 哲史 美々 てるみ 朝子 彦太 福世 笑風 柳弘 花笑 まつお 信醉 青道 川童 和功 勝弘 珠生 楽子

定退の今日から静かな日が続く
静しずと近づいている認知症
入学で静かになったオモチヤ箱
翔べる日もあろう静かに酒をくむ
静止画像にはなりたくはない歩数計
ごめんねと素直に言えず悔いている
譲られた席は素直に礼のべて
屋久杉の素直な姿二千年
逆らわず自然に徹した自負
素直さが出世の邪魔になる不思議
さわやかな笑顔返す素直な子
何言ってもハイハイ素直認知症
素直です挨拶できる子に育ち
好きですと素直に言えずまだひとり
素直な子が信じられないことをする

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

洛醉 美花 五月 一風 美龍 鉄心 一步 かよこ 孝一 東吉 柳昌 章久 すがお 喜楽 善純 恵美子 好栄 かつ子 ちよえ 伸子 聖子 はるみ 博利 清泉 章江

信長に慌て鳴きだすほととぎす
川柳塔きやらぼく
福代 天雀報

五月の風を入れてやる私の頭
何年ぶりラッキーと書く旅日記
連休の高速道につづ見ず
何かある波の荒あらしうねり
DNA腰が曲がるらしく痛む
分れ道迷いがあれば回れ右
太鼓判すっかり信じ不覚とる
黄砂飛ぶ大山のみどりもうすぐも
旬のアジつみれ汁など如何かな
千の風歌う私に亡母が見え
白寿まで生きるつもりのおじちゃん
耳貸せとうまい話に誘われる
左右違う臭いの手でくらす
主婦業の疲れを流す仕舞風呂
赤い服蘇生させて余生かな
弟と時々亡母の樹をゆする
遊びすぎてもコンビニが有る大丈夫
人情のつまったわら家なつかしい
相合い傘の想い出ふつと青春に
ひとり居り付きまよつてばかりもしも
コンビニに助けてもらいする手術
フランスで睨み利かせる団十郎

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

定年後尻に敷かれて平和です
アメリカの尻につくことやめなさい
尻込みをしてる間に出し抜かれ
尻に火がついて徹夜原稿紙
気を付けよ女房の声が尻上がり

てい子 富美子 田鶴 蕨 恵子 初枝 なみ 寿々子 亜弥 那珂子 玲子 天雀 春枝 すみえ 晶子 紫泉 雪江 やえ 瑞枝 ふみ 日枝子 千代

お魚の尻尾はいつも母の皿
母さんの腕にかかれば物になる
自信ある腕無駄口を叩かない
長崎にうでを貸したの誰ですか
ドクターの腕に神さま加勢する
人間の仕業に鬼も呆れ果て
近頃は呆れるほどに気が長い
土産物漁りに行ったバスツアー
裏の顔知って呆れることばかり
職退いて爪は呆れるほど伸びる
見え見えの辻褄あわず朝帰り
バス代をベダルに替えて汗流す
雨もりにじつと耐えてる青テント
雨だれを見つめています無の時間
ばたばたと水も滴る僕のこと
ばたばたと汗にやっぱり賭けてみる
上役の前で流れる汗を拭く
川柳ねやがわ 森

泰子 アヤ子 重人 真一 扶美代 一壺 フジ かつみ 喜久子 一知 ヨシ枝 獺 杓 光男 みつこ 志洋 西報 庸佑 麗 典子 高栄 勇太朗 あやめ 亜成 鈍甲 とし子

つなく手が熱い心を通いだす
熱いお茶すすり男は決意する
熱鬧は甲子園から湧きあがる
折鶴に吹き込む熱い熱い息
妻の愚痴分析すれば俺の罪
追い風が続き分析甘くなる
暗黙の了解だった特待生
暗黙のうちに決まった重い役
暗黙の心遣いに救われる
二人には解るサインがたとある
裏金はみんな知ってた黙ってた
兎も角もここは黙認しておこう
知らなけりや幸せだったことばかり
真つ直ぐに生きて斜めにトゲ刺さる
眼鏡が三つ違う世界が三つある
鈍感力灰になるまであしんど
生きいきと等身大を生きる幸
ちっぽけな私を包む風みどり

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

高すぎて財布がうんとうなずかぬ
ストレスが財布の口を開かせる
財布不用電子マネーの時代来る
年金の財布がやせた祝い事
おだてたら男の財布口緩む
行き先で財布の中味違います
昼の顔夜の顔より多い皺
どちらにも転ぶだるまに皺はない
苦労した男に似合う深い皺

修 ともつ 博泉 一風 郁夫 洋 さち子 ルイ子 茜 弘風 弘一 仁清 賢子 薫 たよし 柳弘 朝子 恵子 能子 加津子 香住 ますみ 弘直 慶子 シマ子 喜美子 烈

奥様と何があつたか服の皺

あずき

すみよし川柳会

岩崎

公誠報

泣き言は言うまい青い空の下

かりん

感動のあまり泣いたり笑つたり

舞夢

どうしても勝てない孫の泣き落し

篤子

母のまえ前触れもなく泣けてくる

瑠美子

人情にもろくて妻はすぐに泣く

裕之

泣き疲れ寝た子の頬をそつと拭く

幸子

電車事故命おとし泣く身内

遠野

ちよつかいを出してくれぬと女泣き

定子

悔しさに隅での涙明日の糧

俊夫

テレビ見て感動ドラマもらい泣き

りつえ

見栄はつて余白で泣いていた日記

一步

北極も泣き出している温暖化

日の出

突然の客に泣き顔盗まれた

明江

三人目大泣きしても無視される

伸子

泣き味噌も母になつたら強くなり

蕉子

泣き声満ちる八月のヒロシマ

ダン吉

ジャンプ傘泣いたおんながもう弾け

美代子

元氣よく泣いて心のもやが晴れ

公誠

川柳塔打吹

野口

節子報

落着いて揺られてる震度1

玲坊

揺れてるほど乳房がほしい老いの坂

紀美恵

悩ましい揺れる思いが住む心

滋

これからの年金暮し夫婦で揺れ

勝誉

芋掘りの子供元気で歯が笑う

和子

根氣よく山芋掘って酒も飲む

楨元

原野には等身大の穴を掘る

美ツ千

うずもれた歴史のロマン掘りおこす

美知江

クラス会タイムカプセル掘り出そう

貴恵

トンネルを掘つてもぐらの人見知り

よしえ

掘り下げてあばいていった罪と罰

幸子

幻のササユリ掘つた五十本

重忠

ころころと喜ぶ土に花植える

克枝

青い空堀の広さで浮んでる

みち子

曲り角墓穴を掘つた天才児

美代子

年金の迷路を掘つて確める

たけ代

愛情が溢れて子供すくすくと

美美子

傘寿喜寿古稀還暦の人溢れ

玲子

新婚の溢れる愛も徐徐に枯れ

清

オットト下戸に注がれたウーロン茶

京子

鮎の群れ溢れるほどの水等待つ

善江

恥かいた汗が溢れて止らない

螢

看板は要らぬ行列でできる店

孝恵

杉の板じつと我慢し出番待つ

和枝

野ざらしの板に白蟻住んでいた

照彦

看板が腐つた社会保険庁

龍枝

胸板は薄いが正目日本産

石花菜

どぶ板をたどつていけば家に着く

三津子

板などになりたくはない山の木々

芳光

父の日に父の財布をあてにする

完司

父の日の音沙汰もなく日が暮れる

章子

父の日の音沙汰もなく日が暮れる

朋月

父の日の父はふらりと郷の道

宣子

勝手にせい言うた時から許してる

千代子

勝手口旅の土産がノックする

雅司

勝手知る友の助言が効いて来る

紀乃

好き勝手しても似て来る子の仕草

哲男

何事も許しておこう雲の白

婦美子

反対を押し切つたからガンバレる

キヨミ

久しぶり睡眠時間八時間

歳子

行く先を忘れたような昼の月

美紗子

丸かじりほんまの味がするリング

順子

お早うと言えは返事がある安堵

好文

父さんをうんと見直すアルバイト

忠

魂も臓器も売らず生きている

二英

三田祭通りに風のうすみどり

哲夫

同じことやつて本日ホメられる

聖也

ため息で作つたシャボン飛んで行く

一泉

風光は明媚でしたよ過疎の村

藤朗

城北川柳会

小谷 集一報

定員漏れ不平不満が胃に溜る

萬的

定員をあなたのために空けてある

明子

支払も小銭から出すボケ防止

福世

小銭でも目を細くして地藏さま

達子

貯金箱可愛いプラン抱く小銭

志華子

小銭には汗がいつぱいいついてる

典子

削除キー叩いた後に残す悔い

弘風

傍に居るだけで悩みの消える人

たもつ

昼の月昨夜の夢はみんな消え

詔子

俺はまだ生きているぞと活け作り

昭

組の鯉になつても生きる意地
 ドッサリのチラシが重い土曜朝
 釣マニアびくびく浮きと話す
 詩とメロデー清んだ声から風を聞く
 美しいセリフで城を開け渡す
 引き算も足し算もない蓮の穴
 ひたむきに遊んでいます余生です
 三昼夜干されて梅は紅をさす
 死んで知る政治と金の罪深さ
 高望みもうやめ足を地につける
 煩惱をくるくる回す火の車
 一筋の道に迷つてばかりいる
 万物の命きらめく風みどり
 浴衣縫うやさしい祖母の鯨尺
 天乞いの気持で買った宝くじ
 取り敢えず手を上げてから考える
 奥さんの漏らす話が本音だろ
 助手席の妻はカーナビより確か
 自分への弔辞を書いた昼の月
 暗い世にお笑い芸人よくもてる

富柳会

池

森子報

一步 東吉 容子 章久 睦子 ただし 美智子 正 ルイ子 千里 朝子 柳好 順三 利昭 はじめ 和夫 郁夫 倫子

手前みそさあ極上を召し上げられ
 妻の笛に定年どきどきばかりする
 腹八分それが出来ないダイエット
 露天風呂透かして見れば我が影か
 動悸する直ぐに点滴する脆さ
 どきどきときどきめく自分に乾杯
 暴言を浴びるも試練明日の糧
 便箋に楷書の愛がほとばしる
 朝風呂に昨夜の顔が並んでる
 形状を美化して残す日記帳
 足早に近づく切符握りしめ
 手の平に春をころがし生きている
 ぬるま湯に馴れてのつべらばうな顔
 たつぷりの湯に浮べてる過去未来
 しっかりと新芽を抱いて生きている
 喝采を浴びているのは隣の子
 冷やかな視線浴びても咲いた花
 どん尻に咲いて脚光浴びている
 混浴・期待外れの顔と顔
 ご時世に僕の常識追い抜かれ
 琴線に触れてまどろむ春の宵
 車椅子母も緑をたんど浴び
 色艶は消して真剣勝負する

もくせい川柳会

江見

見清報

九条を胸にたたんで逝った人
 お互いに聞こえぬ振りをして老後
 ああ平和長蛇の列の宝くじ

奏子 晴美 寿之 彦次 登子 ひろし 冬虹 未知 伸雄 澄子 安希子 高鷲 己代一 よしみ 田鶴子 アキ 深雪 扶美代 哲史 宏至 よりこ ダン吉 森子

守るものあつて弱気になる歩幅
 相棒と採れたボタンのかけちがえ
 野の花にぬくもりもろた晴れた空
 胡瓜カット日焼のバック安上り
 正坊さん赤エンビツ等有難う
 カットされ天狗の鼻に出来た傷
 平々凡々昨日も今日も同じ顔
 わたしだけルール守った負けゲーム
 爪伸びる速さ時間の速さかも
 胸中に鬼が棲む日は鶏みぐく
 ばあちゃんをころをカット赤ちゃんに
 大きな種で損したような甘い枇杷
 平原に大の字になり風になる
 困るのよ褒めるとメニユーつくママ
 楽しむこと諦めなないで歩いてる
 泰平の龍児ヒルズは鬼門です
 だしぬけに貴女守ると言われても
 カットされやつと気付いたうそばかり
 平仮名のささやき骨抜きにされる
 残そうか切ろうか迷う花鉢
 生ぬるい風がわたしをそのかす
 何もかも妻が仕切つていて平和
 愛してるを手話を覚えたコンサート
 沈黙を守り出方を探り出す
 平凡が難しいことやつと知る
 年金暮らし拝領金はありません
 ビラ配りノルマもあらう貰つとく

重人 庸佑 タミ 都代子 久太郎 萬的 比ろ志 求芽 千代 美義 勇治 宇乃子 巴子 玲子 早人 寅次郎 郁子 知香子 幸雀 美智代 満寿巳 尚士 夢 隆 肋骨 義 啓子

岬川柳会

八十田洞庵報

手ごろだと思ふ相手もそうらしい
一寸した気遣い部下がやる気出す
鈍感が手頃な幸を逃がしてゐる
それぞれが一寸気くばり輪が和む
手頃だとすぐ約束の旅支度
一寸ずつゆづつていたら後が無い
西瓜切る一寸違いへ子供が目
母のひざ一寸乗りたい上の孫
傘一つ寄り添う杖の老いふたり
一寸だけ弾む御馳走古希の膳
お手頃は人に話せぬことばかり
淡い恋添えて伝える糸電話
一寸一ぱいつもりが今日も午前さま
爽やかな笑顔を買いたいたこ焼き屋
火の杭もはだして添うて歩いた日

川柳塔おとしり

福田 登美報

倅子 東吉 富美子 年子 令子 和美 貞夫 洋子 悦子 和香 広作 蛙城 とみ 茂平 洞庵 由多香 艶子 風花 ヒロ子 真一 雄々 幸次郎 以和万津 小生

ころころと転んで八十近くなる
青春はころころ落ちた恋の道
ころころと心変わりに愛も逃げ
ダムの底滴たしてくれる梅雨を待つ
翠 洋 会 谷 口
余生いま鈍感力を光らせる
正坊さんのベンが泉下に光つてる
生かされて光り続けている命
木洩れ日は母の愛にも似た光
もう少し歩いていたい月あかり
群鶏図また若沖を見る愉悅
手放して悦べないという学資
我ながら悦にいつてる筆のあと
悦びは家族の笑顔絶えぬこと
悦びを隠せず声が裏返る
もう呑んでええと医者許可が出る
平穩に一日おわり眠る幸
一日の電話よろこぶ母が居る
笑顔満載バスも上げ潮快走車
ファックスが小躍りしてる佳い知らせ
庭園に宝石のよう木漏れ日が
幽興の世界へ誘う花菖蒲
酒樽茶屋にじり口から京の風
新緑の光へ憂さを解き放つ
酒樽がどんと据えられ二畳の間
梅雨晴れの秘園でしばし無我になる
酒樽で造った部屋の心地よさ

螢 道子 清子 登美 義報 楓 集 蕉 日の出 啓子 正雄 照子 すみ子 美籠 尚士 茶々 捷也 絹子 舞夢 満作 義 富子 水昇 志華子 桃花

木木や岩裂いて紙屋の川は澄む
みどりの風心に溜めて家路つく
いずも川柳会 佐藤 治代報
気がつけば低い目線に咲くすみれ
札束は持って逝けないから使つ
初対面父親となるひげを剃る
遠回りしながら迷い整える
今の世は束の間の夢かもしれない
低周波千のひつじが眠らせぬ
炎えた日は遠ざかつてくカンナの朱
真ん中で踏ん張っている低い鼻
終バスに乗ったわたしと虫の声
遠い過去履歴書だけが知っている
遅しく家族束ねる母が居る
低い雲私に何を隠すのか
分からず屋ばかり束ねが嫌になる
私の小さな道を通るバス
束ね髪男に負けぬ山越える
肩車父の背中中は温かった
遠来の手紙にソツとキツスする
奇声歓声束ねて走るコースター
五年目の約束千の風に逢う
父の山知れは知るほど深くなる
低姿勢見えかくれする頼みごと
梅雨晴れ間過去を束ねて焼く夕べ
耳塞ぎ遠い雑音聞き流す
焚き口で未練たち切る遠い文

孝一 みつ子 佳子 キミエ しげる テル子 桂子 治代 ちえ たえこ 寿美 放舟 淞丘 玲子 裕 歌子 多輝子 多喜 蘭水 佐余 昌枝 喜子 満江 美佐子 幸 房子

苦労した事は語らぬ父の背な
束縛もなく地球は自転する
私を束ね遺物石にする
札束の重さは軽くなる
束になり掛かってゆけば勝てそうた
まだ父を越せず重なる年一つ
ちかし

倉吉川柳会

竹信 照彦報

ころもがえ相も変わらず同じ服
竹の子がバラリバラリと衣替え
うどんやの旗も水にころもがえ
ノネクタイ気持ちはキリリ締めておく
ころもがえ脱いだり着たりやつと出る
余命無く白い衣の用意意く
衣更えするにも迷う温暖化
満ち欠けのリズムに合わせ咲いて散る
恥をかく度に人間強くなる
呼はずとも欠かさず飛んでくる黄砂
(前)喜美子
花びらの悲しみ一つ描く絵筆
描きながら持ち続けるの夢がある
釣銭がなくて小銭をかき集め
王様は何と言つても白い飯
日本人米を忘れて欧米化
チャーハンにアレンジされた残り飯
二升炊きから一升になり今二合
飯食つて昼寝するのが癖になり
一膳と一滴を待つ飢餓の子が
結婚式新婦飯食う暇が無い

町紅 多賀子 きみえ 文子 茂美 ちかし
和子 賀寿恵 玲子 風露 よしえ 秋草 みちる 鬼一 幸子
きみ子 勝誉 美津恵 康子 貞子 茶子 京子 螢 次男 和枝

何よりも三度の飯がご馳走だ
にぎり飯こんなうまい運動会
北斗七星あれが銀座の王様だ
閑古鳥倉吉銀座くらしよい
倉吉の銀座で恋した頃もある
東京の銀座夜の顔昼の顔
むかしから金が唸っている銀座
銀座より土蔵観光大賑わい
不夜城の銀座ネオンに迷いこむ
昔むかし倉吉銀座有楽座

岩美川柳会

石谷美恵子報

騒音も補償の額で納得し
金婚にふたり揃って得をする
ササユリを百花咲かせて得意顔
好きなことやって所得はうれしいね
得策は無言と知った日から冬
損か得かは天秤にかけて見る
納得をするまで判は捺しません
納得のできる説明して欲しい
欲ばらぬが最後は得をする
真心を尽せば得はねかえる
損得の計算できぬ好きな人
損得を考えないよ主婦仕事
ボランティア今日は弁当ついでいる
金のない愛は具のない肉饅だ
痛いことずばり言うのは止めてくれ
人前ですばり言うのは止めてくれ
後悔しない人生のためずばりやる

泰輔 醉美蓉 石花菜 悠子 由紀子 萩江 玲坊 日出子 重忠 照彦
忠良 螢 重忠 主一郎 雅女 公乃 節子 幸枝 幸安 和子 幸子 完子 睦子 清帆

次の世も遊べる癖をつけておく
遊んだが親をよう看る子に育ち
果たせない夢に遊ばれ日が暮れる
遊んだらゴミを忘れて帰らない
ウグイスと一とき遊ぶ散歩道
若者の遊び言葉が辞書にない
花と風相手に蝶はよく遊ぶ
豪遊の財布に税がもぐり込む
説得力おんなの涙は勝てぬ
はるお 蟹郎 一粋 菖子 かつみ よしえ 茶子 公子 美恵子

あかつき川柳会

とき 9月14日(金) 14時から
会場 住まい情報センター
大阪くらしの今昔館
(地下鉄天神橋六丁目③出口)
兼題 空気・モデル・舌 時事吟
投句先 〒599-0332 阪南市箱作
1586-14-102 森村美花

お詫びとご連絡

(同人誌友部)

新しい同人名簿の電話番号の一部に市外
局番の改定に合わせての修正が出来ていな
いケースがありました。謹んでお詫び申し
上げます。新同人名簿記載に誤りのある方
は事務所まで葉書にてご連絡下さい。

市外局番と市内局番の変更例

旧 072×○○○○○○○○
新 072-×○○○○○○○○

柳界展望

にんげんを奏でる涙歌笑
顔 新家 完司

○創立50周年記念第18回時の川柳大会は5月12日兵庫県民会館にて開催。新家完司氏(同人・倉吉市)が兵庫県議会議長賞を獲得。

▽出版△

○川柳塔みちのく20周年記念句会は6月3日弘前プリンスホテルにて74名の出席により開催。同人の天位。行きつくは母のかたちに雪ほとけ 今 愁女

井上桂作氏(同人・守口市)は5月25日付で川柳句集『時をつかむ』を発刊(B6版150頁)

▽御芳志御礼△

月を見ているジャンゲルジムのてつぺんで 高瀬 霜石

○同人鴨谷瑠美子さん、高田美代子さん、仁部四郎氏から金一封拝受。
○美研アート、山崎重吉氏から金一封拝受。

▼訃報▲

●同人宮川珠笑氏(枚方市)は3月30日肝不全にて逝去72歳。

●岩崎昌武氏(同人・岩崎みさ江さんの夫君) 5月25日逝去79歳。

耳の奥に魔船があり今日も雨 小谷美ツ千
耳を澄ませば夏野の果ては声明す 小林 妻子

●ふあうすと川柳社副主幹

福島直球氏、6月27日逝去。

▽同人動向△

○前たもつ副理事長は6月10日第31回全日本川柳栃木大会に出席のため日光市行。
○同人木本朱夏さん(和歌山市)は「川柳・華群」第2号にエッセー「本を巡る断想」を発表した。

▽訂正とお詫び△

6月号28頁上段24行目「社長三代記」社長三代目。
7月号89頁下段11行目「簡単で走る」単車で走る。
7月号95頁上段23行目「位の高い」という「位の高い立派な戒名」という。
7月号103頁中段26行目「漱子」漱子。7月号100頁上段19行目に「清記」直樹を入れる。
7月号106頁9行目「まさ子」賢子。

常任理事会「7月7日(土)出席19名①第13回川柳塔まつりについて、10月8日の諸準備、表彰の段取り②高野

新同人紹介

川^か名^な洋^{やう}子^こ

— 充子・朱夏・勝・方子・康子推薦

平成19年造幣局桜の通り抜け

(投句数799名)

4月5日〜11日(太字は同人)

(人) 松月の笑顔見惚れる人の渦 河内長野市 村上 直樹

(地) 人間の喜ぶ顔を見る桜 大阪市 三好 聖水

(天) 極楽もこんな景色が通り抜け 大東市 谷口 東風

(佳作) 前 たもつ・岩崎 公誠

高田美代子

(秀逸) 小谷 集一

山合祀11月10日(土)予定③一賞選考委員の選出最終確認 介する件⑥その他
④定例確認事項、各地川柳大会の状況⑤各部報告事項 (火)一時半

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 藤 井 寺	19日(日)午後2時15分締切り 先祖・サイン	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日)午後1時半締切り 天狗・支える・従う	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	19日(日)午後1時半締切り 追求・地上・過信・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時半締切り 教える・気持ち・フリー 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さんだ	21日(火)午後1時より 地下・色・拝む・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前9時半から 訳・風・モデル・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	25日(土)午後6時から 続く・重い・ぜいたく・乱	東大阪市立社会教育センター 3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和 歌 三 山 川 幸 柳 会	25日(土)午後1時から 電話・ふと・海	県民文化会館 4F 中会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
岸 和 田 川 柳 会	25日(土)午後2時締切り 案・威張る・うるわしい キャプテン	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市 民 川 柳 会	26日(日)午後2時締切り ブーム・顎・泳ぐ・「ごろり」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
八尾市民 川 柳 会	26日(日)午後1時締切り 子・異・荷・世・八・家・水	八尾市民川柳大会 八尾文化会館 5F 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日)午後2時締切り ドロー・うんざり・造反	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
京 都 塔 の 会	27日(月)午後2時締切り ぶつかる・包む・供養	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
南 大 阪 川 柳 会	27日(月)午後6時から 貰う・気配・もっぱら・自由吟	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川 柳 塔 みぞくち	27日(月)午後8時から 野球・鉄・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月31日(火) 12時半締切り 第25回 夜市川柳大会	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	2日(木)午後1時から 伏せる・歳・ノート	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尼 崎 いくしま	3日(金)午後2時締切り 脱ぐ・器用・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城 北 川 柳 会	4日(土)午後1時半締切り 石・浴びる・みるみる・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	4日(土)午後2時締切り 備・打つ・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	4日(土)午後2時締切り 野球・私・示す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町山良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 わかやま	5日(日)午後2時締切り 注意・諦める・アンコール 「まだ」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 塔 唐 津	6日(月)午後1時半から それから・囁む・引力	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 みちのく	11日(土)午後5時半締切り 契約・乱れる・手厚い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後2時締切り 順・ハンカチ・湧く・はらはら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川 柳 塔 打 吹	11日(土)午後2時締切り 芯・集める・抱く	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から 黄・バス・曇る・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から 消費税・震える・てこずる	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	14日(火)午後2時締切り 断つ・ヒント・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木)午後1時半締切り 痒い・下戸・ぱったり・風 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子

二賞選考規定（要約）

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 【一】ロブロック（一）選者数
【北海道・東北 関東 北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ五句ずつ選出した十句の中から主幹が決定するものとする。
 - ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。
- （備考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

平成十九年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

河内 天笑・西出 楓楽・奥田みつ子・小島 蘭幸
前 たもつ・木本 朱夏・山本希久子

第二次選者（二十七名）

本社関係 河内 天笑・西出 楓楽

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

【北海道・東北 関東 北陸ブロック（2）】

蘭田 猿沓・菊地 政勝

【京都・奈良ブロック（1）】 都倉 求芽

【大阪ブロック（6）】

岩佐ダン吉・籠島 恵子・鴨谷瑠美子

桑原 道夫・瀬戸まさよ・藤村 亜成

【兵庫ブロック（3）】

北野 哲男・西内 朋月・山本 義子

【和歌山ブロック（2）】 牛尾 緑良・古久保和子

【鳥取ブロック（4）】

岩崎みさ江・岸本 宏章・倉益 一瑠・武田 帆雀

【島根ブロック（3）】

伊藤 寿美・小川 注湖・森 茂美

【岡山・広島・山口ブロック（2）】

石原 淑子・平田 実男

【四国・九州（2）】 市丸 晴翠・高橋 宏臣

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成十九年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 川上 大輪 松本 文子

一路賞 小西 雄々 松原 寿子

各地柳壇賞 遠山 可住 播本 充子

編集後記

☆二賞応募月となりました。折角のチャンスをお見逃しなく全員の応募をお待ちしています。

☆教科書をひらくとそこは春だった 綿貫 佳奈

先月号に掲載した日川協働木大会ジュニアの部の入賞句の中の一句です。この句は本社同人のお孫さん(中一)の句ですが、子供らしい素直さと感性豊かな表現、読後清涼感のある素晴らしい句だと思います。

☆こうして次代になうジュニア達が川柳の未来を大変明るいものにしてきています。

☆小学校の読み聞かせボランティアに参加して四年、資格を持たない私はただ自分の子供や孫と接する如くに、本を読んだり紙芝居をしたりしています。

☆空想や夢の世界が広がる物語の楽しさ、言葉の美しさを感じてほしい

というのが私たちボランティアの願いです。テレビやテレビゲームに、はまっている現代っ子に少しでも本の楽しさを味わってほしいと思っています。

☆例年の事ながら入学当初の一年生はおとなしく、素直ですが、夏休みを過ぎた頃から、少しずつ教室は騒がしくなり、おとなしく聞

いてはくれません。

☆先生のいい教室は一人が騒ぐとみんな浮き足立ってしまいます。活発で多動は子供の本性かもしれませんが、学校教育の中に少ししつけの面もと入れられないのでしょうか。せめて

他人の迷惑にならぬように一年生から、しつけてほしいねと言いながら悪戦苦闘の十五分です。

(希)

ひとこと

「川柳・交差点」出発

「風船が飛ぶまつさらの風に乗り」喜八郎。「川柳・交差点」は嶋澤喜八郎さんの呼び掛けで始まりました。スタッフはわれわれ交野市とその近隣に在住の者を中心に11名、副代表は籠島恵子さんと八田灯子さんです。準備会が4月8日、第一回句会が5月6日、第二回が6月3日と、どんどん進み、遠く和歌山からの参加者もあり、

2回とも盛会でした。

会場はJRR学研都市線と京阪交野線が交差する所にあり、駅からも近く、至極便利なところでした。交野は大阪府の北東部にある小さな街ですが、太平記などで知られた桜の名所です。「小さく生んで、楽しく長続きのする会」と思っています。嶋澤代表の行き届いた気配りで、とても気持ちのいい会です。是非一度のぞいてみて下さい。

(田岡 九好)

★川柳塔の事務所が移転して間もなくの日、事務所にやってみると、ダンボールが積まれた状態で、取りあえず編集に必要なものは、千里さんが、用意してくれていてなんとか、編集を終える事ができた。

行って見たいところいっぱいである。またの機会に御紹介できればと思っている。情だ。

★私自身も引越して二年余りになった。前に住んでいた所から一キロくらいしか離れていないが、いろいろと暮らし方が変わってきた。まず大きく変わった事は交通の便が良くなり、句会場も近くなったことだ。川柳をやっている私達には、川柳が鏝になっていると思いませんか。

★この事務所のまわりは興味深い所だ。近くに四天王寺、一心寺、動物園、新世、通天閣、織田作が愛した口縄坂、夕陽ヶ丘など、友達とも少々疎遠になると思いませんか。

(恵)

二 賞 選 考
応 募 用 紙

きりとりせん

○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）
--------------	---------------

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。



地名

姓·雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成18年9月号から平成19年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P120・P121を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

発表(10月号) 地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「ぼちぼち」 (8月15日締切)

10月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B

A

B

A

地名

市都
道府

姓雅号

地名

市都
道府

姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

10月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑選
水煙抄 (8句)	西出楓選
愛染帖 (3句)	新家完司選
檸檬抄「ぼちぼち」 (2句)	鈴木公弘共選
一路集 (3句)	西口いゝゑ選
初歩教室「音」 (3句)	中原諷人選
	今愁女選
	播本充子選
	三宅保州担当

11月号

檸檬抄「飛ぶ」

一路集「ピント」「黄」「不思議」

初歩教室「自分」

第26年度 夜市川柳募集

第3回「友達」福士慕情選

ハガキに3句 8月末日締切

投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇七年(平成十九年)八月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

電話 (06) 6779-1349

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳塔社

本社8月句会

とき 8月7日(火) 午後5時半開場・6時半締切り

開催時間、締切り時間に注意下さい。

ところ アウィーナ大阪 4階 金剛

天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

おはなし

兼席 井上桂作

題 堀田美代子

「狭い」 高田正和選

「粋」 藤田泰子選

「チャンス」 川上大輪選

「止まる」 塩満大敏選

「波紋」 河内天笑選

会費 1000円

投句料 500円 (切手可)

(各題2句以内)

本社9月句会

7日(金) 午後5時半から

兼題「わくわく」「闇」「ショック」「避ける」「内助」

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

鳥取県総合芸術文化祭

第31回鳥取県川柳大会

とき 10月21日(日) 10時開場 13時開会

ところ 倉吉市大平町 上井公民館 ☎08558(26)1736

(JR倉吉駅北へ徒歩10分ほど)

兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切11時半)

「壁」 西出楓 楽選

「命」 大家風 太選

「刈る」 長谷川博子 選

「洗う」 政岡日枝子 選

「美しい」 西原艶子 選

「誕生」 野口節子 選

「投げる」 森山盛桜 選

事前投句(ジュニア部門)「友」(2句無料)土橋 螢 選

表彰 鳥取県知事賞ほか

会費 2,000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1,000円(小為替) 9月30日必着、用紙自由

投句先(問い合わせ先)

〒689-0605 鳥取県東伯郡湯梨浜町園545-16

竹信 照彦 方

第31回鳥取県川柳大会実行委員会宛

TEL 0858(34)3345

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会・倉吉市ほか

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十九年八月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻九六三三号

柳塔

八月号

定価

八百円

送料

八十四円

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわりの、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050